

には、頗る困つたらしい。けれども、パークスは、却々の遣り手であるから、其儘に怯んで、口を噤むやうな人ではない。

「大隈さん、貴下の述べます所は、日本政府の意見でありますか、それとも、貴下、一人の意見でありますか」

「答辯する迄もありません。苟も參與の職として、日本政府の、大きい役人が、揃つて居る前で、斯くいふ以上は、私の述べる所は、總て日本政府の意見と見て、差支へありません」

「確と、左様ありますか」

「無論の事です」

「それでは、貴下の言ひました事に就て、一應、私の意見を述べませう。條約を結びます時に、宗旨の事を、何も定めてない、と、貴下は、言ひましたが、斯様な事は、條約の上で、定める事ではありません。宗旨を、信仰する事は、世界を通じて、認められて居る事でありませぬ。獨り、日本國に於てのみ、信仰の自由を抑へる、といふのは、甚だ宜しくありません。殊に、耶穌教を、信する者を捕へて、慘酷な取扱ひをして、死に至らしめる、といふやうな事は、全く野蠻國の政府が、爲す事であつて、日本政府が、左様な事を、繼續して行けば、世界各國の反對を受けて、日本國は、滅亡するの外はありません。日本政府は、信仰の自由を、飽迄も抑へる、といひますか」

パークスも、疇穢に障つたから、思ひ切つて、斯ういふのだらう。苟も、外交上の談判に、お前の國は滅亡するなどは、甚だ穩かならぬ事だ。腹の中には、何う思つても、そんな事は、口外すべきものではない。パークスは、今にも、日本が滅亡する、といふやうな事をいふて、一寸、脅して見たのだ。處が、大隈は、其時分から、斯うした談判には、極めて圖太しい所があつて、パークスの威嚇も、更に效がなかつた。

「耶穌教を、信する者を抑へれば、日本國は滅亡する、と言はれるが、併し、私の考へる所では、耶穌教を、弘める事を許せば、日本國が滅亡する、と思つて居ります。貴下と、私と、其點に就ての考へは、全く反對であります」

パークスは、眼を圓くした。

「耶穌教を信じますと、其國が亡びる、といふ事はどういふ、譯ありますか」

「今日迄、耶穌教が、行はれて居る國には、大きな戦争が起つて、困つて居ります。即ち其戦争は、耶穌教が、原因になつて居る。世界の耶穌教國の戦争は、大半が、宗門の事から、起つて来る、といふ事は、歴史が、之を證明して居る。また、未開の土地へは、先づ耶穌教を弘めて、それから漸次、其土地を蠶食して、終には、兵力まで用ゐて、領土にしてしまふ、といふのが、耶穌教國の慣用手段である。左様な、危険な宗旨が、我が日本國に行はれる、といふのは、我々としては、甚だ喜ばないのであります。信仰の自由は、世界各國が、認めて居る、といひますが、左様な宗旨を、弘める事は、御免を蒙る。どうしても、弘めなければならぬ、といふて、押込んで来る、といふのも、甚だ面白くない事では、ありませんか。依つて、我政府は、如何なる手段を以てするも、耶穌教が、國內に弘まる事は、防ぐ意であるから、今日までの方針が、或は慘酷であつたかも知れない。併し、それ位にしても、御禁制の目的を、遂げる事が出来ねば、猶一層、酷い取扱ひを、爲るかも知れぬから、強て布教しやう、とするものは、豫め覺悟してかゝるがよい」

政府の方針が、果して其處まで、堅く決つて居るか、どうかは判らぬが、一向、そんな事には頓着なく、大隈が、思ひ切つて、之までに、やりつけたのは、流石である。理窟の善悪は、姑く措いて、少しも弱身を見せず、何處までも、喧嘩腰で、掛つた所が、面白い。パークスとても、それに怯んで、引込むやうな人ではないから、盛んな論戰が、初まつて、容易に納まりさうもなかつた。

此時に、通辯の役を仕たのが、シーボルドであつた。父のシーボルドの時から、日本の爲には、能く努めて呉れた人であつたが、今日の談判の模様から、此人が、甚く心配して、其晩、頻に大隈と、パークスの間を往來して、調停の勞を執つて呉れた。それが爲に、幾分か、パークスの考へも、穩やかになつたのは、偏にシーボルドの働きであつ

たが、併し、又一面から、考へて見れば、大隈が、向う見ずに、強く出た、といふ事が、パークスをして、少からず驚歎せしめ、それが因をなして、談判の結果は、頗る有利に、展開したのであつた。

それは、兎に角、長崎方面に、信徒を置くのは宜しくない、といふので、既に捕へてある者は、夫々に處分して、各藩に分けて、三十人若くは四十人、預ける事にして、頗る曖昧の中に結了した、パークスの方でも、さまでに、儀式張つて、懸合ふ事もなく、政府の方でも、幾分か、手心を加へて、或點までは、布教の上に、寛大な扱ひをする、といふやうな事になり、一時は、世間を騒がした、耶蘇問題も、之で納まりがついて了つた。大隈が、朝野の間に知られたのは、全く此問題からであつた。

江戸遷都

一

慶應四年の九月に改元して、明治となつた。御即位の式は、八月廿七日を以て、其禮を行はせられたが、極めて質素に遊ばした。奥羽諸州の變亂も治まらず、猶ほ全國に、不穩の形勢が、漲つて居たから、態と、略式を以てせられたのである。

此當時に、二つの大問題が、涌いて來た。其一は、徳川家を、如何に處分すべきか、といふ事であつた。猶ほ一つの問題は、遷都の事であつた。

徳川家の處分に就ては、何處までも追窮して、根を斷ち、葉を枯すまで、やつて了へ、といふ者と、それまでに爲るにも及ぶまいから、切めて、家名だけは存してやらう、といふ者と、二派があつて其論争が、却々甚かつた。

遷都の事に就ては、公卿の反對が、烈しく起つて、非常に喧ましかつた。それは其筈だ。一千年の帝都が、一夜にして、他へ遷る、といふのであるから、京都の人、殊に、公卿が反對する、といふのは、無理ならぬ事である。今日の事として、假に考へて視ても、府縣廳や、學校の移轉問題でさへ、飛んだ騒ぎが、出来る事もあるのだから、況んや、帝都を遷して、陛下の御座所が變るといふほどの、大きい事について、多少の動搖が起るのは、致方ない事である。

長州人が、徳川に對する怨みは、随分、長く續いて居たのであるから、自然、長州出身の役人が、朝廷の權威を笠に被つて、徳川家へ、復讐的に、嚴罰を加へやう、とするのは、據所ない事だ。然れば、最初に於いては先づ慶喜を、死罪に處して了へ、といふ説が、大分勢力があつた。けれども、嚴罰論は、大西郷が、出て来て、どうか斯うか押へつけて了つた。若し、大西郷が、居なかつたならば、慶喜は、死罪になつて了つたかも知れない。江戸城の明渡しに就て、大西郷が、勝安房と、談判を開いた時に、勝から、慶喜公の御身の上は、何分お頼み申す、といふの一言葉を、聞かされて居るので、どうしても、西郷は、勝の哀請を入れて、慶喜を、救はなければならなかつた。管に夫ばかりでなく、西郷としては、最も辛い事があつたのは、天璋院と、靜寛院宮の兩夫人が、江戸城内に、留まつて居られた、といふ事である。

天璋院夫人は、齊彬侯の養女として、政略的に、徳川家定に嫁いだ、篤子姫が、將軍の亡き後は、未亡人になつて天璋院と稱し、西丸に居られたのである。結婚の際には、齊彬侯の命を受けて、西郷は、調度係を、勤めた位に、深い關係を有つて居たのであるから、謂はゞ主人にも等しき、天璋院夫人を、見殺しにする事は出来ぬ、といふ事情がある。

靜寛院夫人は、新帝陛下の、伯母様に當るので、猶更に、大切な御方である。此兩夫人が、江戸城の西丸に、居られる以上、只だ無暗に、江戸城を、攻めつけて、さへ了へば可い、といふものではない。兩夫人の御身の上も、安全にしなければならぬ、といふ責任が、官軍の方にはあるのだから、夫に就ての苦心は、一方ではなかつた。勝安房がそれを見込んで、慶喜の身に就て、寛大の御處置を哀請するのだから、早くいへば交換問題で、西郷は、退ツ引ならぬ羽目に陥つて、それと明かに、口に出さないで、只だ目顔で知らせ、不言不語の間に、互の心を察して、江戸城明渡しのやうな、大きな問題が、殆んど立話し同様で決したといふのも、實は、兩夫人に對する、問題が残されてあつたればこそである。

西郷と勝の、二度目の會見は、高輪の薩摩邸であつたが、愈々、江戸城明渡の、相談が済むと、西郷は、すぐに早籠の用意をさせて、晝夜兼行で、京都へ、乗込んで来て、太政官會議を開き、之を問題にしたのだ。其時にも、長州人の鼻息が荒く、慶喜を死罪にしろといふ、説が、多かつた。けれども、西郷は、何處までも、慶喜の助命説を唱へて、遂に衝突した結果、西郷は、決然として、席を立ち乍ら、
「どうしても、慶喜を死罪にする、といふなれば、俺どんな今日限り、御免を蒙り、國許へ引取るから、跡の事は、宜しく頼む」

と言ふて、すぐにも、退京す可き、覺悟のある態度を見たので、長州人も、我を折つて、遂に慶喜の生命を、助ける事にしたのである。

然うなつて見る、と、今度は、徳川家を、どうするか、といふ事が、第二の問題として、當然、起つて來べき筈である。散々、揉みぬいた末、駿遠參の三ヶ國で、七十萬石を與へ、慶喜には、隱居を命じて、田安家から、龜之助が入つて、相續する事になつた。即ち今の家達が、即ち當時の龜之助であつて、徳川家に對する處分は、一段落になつたのである。

一一

京都は、山紫水明の地で、繪の上の都としては、此上もないのであるが、苟も鎖國の夢を破り、開國條約を結んで、世界の舞臺に乗出さう、とする、新興の日本帝國をしろしめす、天皇の都としては、甚だ不適當な所である。然れば世界の大勢に、通じて居た者は、夙から遷都の意見は、有つて居たのだ。只だ急進と漸進との差ひはあつたが兎に角、都を遷さなければならぬ、といふ事とは大概な者は、思つて居たのである。

されば、大久保の建議が入れられて、新帝陛下は、大阪城へ、お移り遊ばす、といふやうな、大英斷を行はせられ

たのであるが、只だ之だけの事を以て、遷都の實を擧げたとは、言へぬけれど、兎に角、新帝が、大阪城へ入られたといふ事は、天下の耳目を、聳動したに違ひない。左様な事が、容易く行はれた、といふのも、詰りを言へば、時勢の爲といふても、可からう。

然るに、佐賀藩の江藤新平が、征討軍の東下と共に、其後を追ふて、江戸へ、下つて居たが、江藤は、京都へ、引返して來ると、帝は、江戸へ遷さなければならぬ、といふ事を、言ひ出して、愈々、遷都が、問題になつて來た。江藤は實に偉い人であつた。固より此人を以て、蓋世の英雄である、とか、一代を曠しうする、偉人である、とかいふやうな事は、いかに鼻眞目に見るも、言ひ得ないが、併し、時勢を達観して、一國の改善を計る、といふに就ては、非常に進んだ、意見を持つて居た人であるから、只だ徒らに、刀の柄を叩き、慷慨悲憤して、天下の事を談ずるといふのとは、頗る違つて居た。蓋世の大才を懷いて、着々、其見込みを行つてゆく、といふやうな、人物であつた。惜しいかな、佐賀藩に生れて、薩長二藩と、縁故がなかつた爲に、毎も、意見の衝突を來して、到頭、來末路は、悲惨なものであつたが、兎に角、我國を導いて、文明國らしい施設を、政府に、なさしめた力は、髓に江藤が、其一半を負ふて居た、といふても、然るべきである。

江藤は、佐賀藩の輕輩であつたが、一躍して、司法卿兼參議といふ、顯職に上つたほどで、同じ輕輩でも、一人前の武士ではなく、足輕に、毛の生えた位の所で、あつたのだが、隨分、それ迄に昇るには、骨が折れた事であらうが、それは足輕であるから、一足飛びに、行つて了つたのだ、ともいふが、併し、參議から、又、一足飛びに、飛下りて、獄門臺に、首を曝したのだから、面白いぢやないか。

斯うした悲惨な、運命の下に、此世を終つた、といふのは、詰り、薩長藩閥から、出身の政治家と、衝突した結果で、自分は、司法卿兼參議といふ、顯職に居つても、自然、頭を押へられて、計畫した事を、意の多く、爲し遂げる事が、出來ぬ爲に、功を急いで、無理をしたから、然うした運命に、落ちたのである。

自分に、何程の力量があつても、周圍に、味方が少なければ、對抗してゆく事は、出來ないのであるから、其處で、盛んに司法省へ、人材を網羅して、他日、反對の政治家と、衝突した時に、自分の一勢力を、作つて置く必要があるから、種々の事をして、味方の吸収に、掛かつたのである。當時の江藤を、能く知つて居る者から、聞いて見ても、常に食客が、四十人や五十人は居た、といふ事であるから、以て、當時の江藤が、いかに焦つて居たか、といふ事は、想像し得るのである。

大井憲太郎を、陸軍裁判所へ入れたのも、江藤の周旋である。副島安正を、究苦の裡から、救ひ上げて、司法省の役人にしたのも、江藤である。河野敏鎌を、食客に置いて、司法省の一員に加へたのも、江藤の力であつた。之は只だ、江藤が、有用の人材を、無名の書生から引上げて、他日、自分が、風雲の機會に、際會した時分には、大に是等の書生の力に依つて、活躍しやうとした、ホンの一例には過ぎないが、兎に角、當時の大きい官吏として、澄して居れば、相當に、資産も出來、子孫が、陋巷に窮死する、といふまでの零落には陥らなかつたであらうが、有つて生れた、霸氣と、精悍の氣が、遂に薩長藩閥の下に、願使される事に、甘んじ得ず、遂に自分の首までも、梟木に曝すやうな事に、なつて了つたのである。

上野の山内に、彰義隊を初め、多數の幕臣が集まつて、官軍に、戰爭を挑んだ當時、江藤は、一個の文官として、江戸に、來て居たのだ。然るに、此形勢を以て、猶ほ幾日かを、過して居れば、必ず佐幕派が、各所から、一時に起つて、關東一圓は、戰亂の巷になるだらう。一刻も早く、上野に、集まつて居る、幕臣を掃蕩して了はなければ、天下は治まらぬ、と、見越して、人知れず、晝夜兼行で、京都へ引返して來て、太政官に、其議を、上つた結果、遂に大村益二郎が、江戸へ下る事になつたのである。大村は、前名を、村田藏六といふて、元來が、毛利の世臣ではなく、馬防國の一寒村に生れた、醫者の伴であつた

が、夙に志を立て、長崎に、蘭書を學び、歸つて來てから、醫學を研究して、あれまでの人物になつたのであるが、若し、大村が、江戸へ下らなかつたならば、縦令、官軍の勝利となるまでも、あの戦争が、一日で片付く、といふやうな事は、なかつたに違ひない。乍併、若し此時、大西郷が、征討總督の大參謀でなくして、大村なんぞが、餘計な世話だ、といふやうな顔をして、大村を排斥したならば、猶ほ事が面倒になつたのであるが、其所は、流石に、西郷の大きい所で、大村が、やつてくれるならば、却て任せた方が宜い、といふて、西郷は、作戦上のことを、一切、大村に任せて、自分は、全然、局外の人の如くなつて、其戦況を、見て居た。大村は、自分の思ふがままに、作戦を立て、たつた一日の間に、上野山内に、籠つて居る、幕臣を、撃拂つて了つたのである。當時、大村は、上野廣小路の、伊東松坂の二階に隠れて、一枚の地圖を眺めながら、諸藩の兵を配置して、上野を包圍したのであるが、この家が、即ち今日まで、盛んに商賣して居る、呉服店の伊東松坂である。幕臣の方では、日の暮れるのを待つて、各所から、上野へ駈つけ、猶ほ残れるものは、江戸の四方から、火を放つて、内外相應じて、官軍を挾撃つ、計畫であつた。されば、此戦争が、夜に入れば、それこそ、由々敷大事になつたであらうが、はやくも、大村が、之れを悟つて、日の暮れぬ中に、攻落す戦略から、充分の手配りをして、作戦を誤らなかつた。といふ、其處に、大村の俊れた點は、あつたのだ。併しながら、之とても、江藤が、太政官を動かして、大村を東下させた、働きの結果である。と思へば、江藤の勳功は、容易ならぬものであつた。

二二

今の九段坂に、建つて居る、大村の銅像は、唯一のものであるが、東京市中に、建てられた銅像は、殆んど二十餘もあるが、何れも之れも、姿勢の拙い事は、お話しにならない。只本人の顔や、身體の恰好を擬せた、といふだけのもので、本人の風格が、現はれて居る、といふやうなものは、甚だ少ない。併、大村の銅像に限つて、能く見れば見ると、其風格が、現はれて居る。初め銅像を建てる、といふのに就て、どういふ姿の所を、採つたらよからうか、といふのが陸軍部内でも、議論になつて、結局、午後四時頃に、大村が、各攻口を見廻つて、湯島天神の境内へ、やつて來た。其時に、吉祥閣が火になつて、燃え上つた所であつた。之を適かに湯島臺から見た、大村が、膝を打つて、

『モウ、宜い』

と叫んだ。其時の姿勢が、如何にも宜かつた、といふので、當時、大村に従いて、之を見て居た者が、その形を寫して、工作家に、あの銅像を作らせたのである。之だけの事情を、呑込んで置いて、能く見れば、大村の銅像に、少からぬ興味を有つ事になる。

上野の幕軍を、撃拂つて了つたので、關東の大勢は、茲に決した。それが、全國へ響いて、まだ向背の決まらぬ、諸侯が、追々と、官軍に歸順するやうになつたのである。又、各所に、潜伏して居る、幕臣が、夜に入つたならば、上野へ駈込んで、大に奮戦しやう、と、氣構へて居たのだから、此時の戦が、大村の爲したやうに、功を收め得なかつたとしたら、その影響は、大きなものであつたらう。此點から考へても、大村が、江戸へ下つた、效能は著しいものだ。それを爲さしめた者は、誰である、といへば、即ち江藤新平の働きであつた。

江藤は、官に机に向つて、政務を見る、といふ丈けの、才識を、有つて居たばかりではない。斯ういふ點に於ても却々、機敏な働きをした。愈々、江戸城が、明渡しになつて、官軍が入城した時、大西郷は、都下の者に命じて、農業に關係する、記録一切を集めさせて、堅く其保存を命じた。然るに、江藤は、奉行所や、評定所に、積込んである、訴訟書類を、一切纏めて、保存せしめた二人の性格や、眼の注け所が、異つて居たのが、此逸事に依つて、明かに知れる。

海江田武次は、城受渡しに立會つた際、寶藏に秘してある、金の分銅の数が少いと、苦情をいふたので、案内者た

る、山岡鐵太郎の爲めに、一喝されて、顔を救めた、といふ珍談がある。海江田は、後の信義の事であるが、金の分銅の爲に、山岡から、劍突を食つたなどは、甚だ外聞の悪い事だ。死んでから後も、腹違ひの子供が、互に喧嘩して、相續争ひなどで、世間の嗤ひを買ひ、東洋のネルソンとして、尊敬をうけて居る、東郷大將までを、裁判所へ引出して、マゴマゴさせる、といふやうな、失態を醸した事は、甚だ残念な次第で、海江田家の爲に、惜む可き事である。

人間は、何事もなく、落着いて居る時には、さまで異りはないが、少し身邊に異状があつたり、下サクサの起つた時分には、平生の性質が現はれるものだ。此三人が、江戸城明渡しの際に、残した逸話に就て見ても、直ぐ別るてはないか。後に、江藤が、司法卿になつてから、裁判所の組織を整へたり、刑法の大本を定めたり、其他、様々な法律の制定をして、司法制度の基礎を、造つて置いて呉れた、といふ事は、現代の國民は、感謝しなければならぬ。

是程の江藤が、何故、那アした、末路を見たか、といへば、畢竟、時勢に逆らつて、無理に、自分の意見を通さう、としたのが、累をなしたものと、いふの外はない。餘りに焦つた爲に、自分の力で、自分を倒した事に、なつたのだ。人間といふものは、何れ程、偉いといふた所で、矢張り人間なのであるから、鳥渡した、見込みの違ひで、昇るものと、降るものとの區別が、出来るのである。偉いと、偉くないとは、僅の紙一枚の差であるから、巧く時勢の潮流に、乗じて行はば、トン／＼拍子に昇るが、一と足ふみ脱せば、奈落の底まで、落ちてゆく。其成敗に由つて、偉い人ともなれば、また、偉くない人ともなる。江藤の如きは、則ち足をふみ脱して、落ちて来た人である。只だ、其敗れた事の爲に、江藤は偉くない、とは、いへないのだ。假し偉くない、としても、彼れ丈の仕事を、残した人だから、日本の國家から見れば、大なる功勞者として、未來永劫に、傳ふべき人物である。

四

今の法津家が、仔細らしい顔をして、人權は貴むべきものだ、とか、類に難かしい理窟を、いつて居るが、江藤は、

一般の人が、知らぬ中に、さうした問題に就て、法制の基礎を、決めて置いて呉れた。第一に、人身の賣買を禁じたのが、自由廢業の行はれる因に、なつて居るのだ。穡多非人の制度を打破つて、平民の戸籍に、編入した上、一般の人民と同じやうに、權利義務を、負擔させる事にしたのも、江藤の働きである。勿論、此事に就ては、大江卓が、土居卓造といふた時で、民部省の一小吏たる、土居が、建白した結果で、あるが、併し、江藤が、それはならぬ、と言へば、駄目になつて了つたのだ。其他、人權に關する、問題に就ては、武家時代から、行はれて居たものを打破つて、新生命を、開いて置いて、呉れたのである。

何う考へて見ても、江藤の如き人は、今日に於て、維新の勳功者として、其子孫は、厚く國家が、保護す可き筈である、と思ふが、江藤の遺族は、長く生活に苦むて居た。而て見ると、社會は、存外に冷酷なものである。幸ひにして、衆議院の問題になつて、皇太后陛下より、江藤の未亡人に對して、御下賜金があり、旁、世人の同情も、起きて来たが、そんな事では、遺族を、救済する事は出来ぬ。今は、どうなつて居るか、よく知らぬが、茲に特記して置く。

江藤が、維新草創の際に於て、帝都を、江戸に遷す事が、最も必要である、といふ儀を唱へて、遂に實現せしめた一事は、非常な功勞である。

大久保は、大阪に遷都の必要を説いた。江藤は、江戸へ遷都の必要を、更に強調した。多くの反對者を屏息させて、之を實行なさしめた、といふのは、維新史に、特筆すべき事柄である。

當時、其事が行はれ、やうとして、一度、邪魔が入つて、難かしさうになつた時、江藤から出した、建白書がある。之を掲げて、參考の資料に、供する事にする。

謹而奉奏 聞候。東京御幸之儀、尹宮御陰謀露顯の事出来、其上、開陽鑑其外脱出の事相瀾、都下人心恟々、於雲上御疑被爲在候哉に付、御遲延可相成と傳承 仕候、臣甚以相驚、大息無限の次第にて御座候。

先度東京御親臨被爲在候儀、海内海外へ御布告相成、東京府中の人民、初めて安堵の道に相赴き、關東八州の事情、漸く安業の場に相成り、熟ら其光景を相察し候處、鳳輦既に發都と申御事傳承仕候はゞ、駿東十三州府縣の人民、耳目立に一新、奥羽の民心立に定まり、乍恐聖上の觀斷、海外に相轟、國本固立、天下大定、寒に以て恐悅至極、至大至喜、何以是に加焉。夫欲大定天下者、先づ人の耳目を新にするに在り、夏股、周革禮も、是所以新人耳目也。人の耳目を新にするといふは、衆の方向を定むる所也。方向既に定まる、是國本怒て立也。苟國本不立、一時干戈は雖止、紊亂は在其中也。今駿東十三州は、開闢以來、鳳輦不至、武將恩威を仰望するのみ、故に今御維新の時と雖も、只無主宰之恩を爲し、外は承順すると雖も、内は實は疑惑を致す次第にて御座候。何分にも分向定まると不可謂也。(中略)且古人云、武王一怒天下大定、誠哉言也。今脱艦の事、輦下に傳聞仕候はゞ、必大に其不道を逆鱗ましましたし、十日に被遊御出輦候事も、五日に御出輦被爲在候位の儀に相成候はゞ、徳川代々の家來共、大に畏れ、諸藩の子弟も大に畏れ、海内懼然として、五威に恐順仕候。(中略)左候て、御幸遲延候へば、乍恐御大信を御失被遊候御事に移行可申と奉存候、諸藩の兵士、唯々朝廷之御爲めと、其主其主の勇みに由り、親被討候共、子不顧、子被討候共、親不顧、兄弟の屍を越えて弟進み、弟の死を餘所にして兄進み、流血染野、終に賊窟を屠り盡して、己欲得賊首、本雖倚人望、豈非倚聖運哉。神武御身執戈、其上御中興之御大業を御定被遊、神功皇后は、海外に被爲渡、三韓を御定被遊、如此御武勇、御聖斷にて、被爲踏危難譯之所、瑣々たる弱賊孤艦脱出迎、御幸を御遲延にも相成候はゞ、前段戰士は、何賊思はんや。天下又、雲上は于今武勇無之と言はん哉。然らば乍恐御武德相缺可申と奉存候。夫御維新の時、當乍恐、陛下萬一、前段仁信武の三德を御失ひ被遊候事にも移行候はゞ、人臣たるもの、竟舞其君と不可謂也。(中略)臣愚、謹而察するに、若し御幸永く御遲延被遊候事にも相成候はゞ、天下の事は去可申と奉存候。因て若し其通り、御幸御遲延被遊御事にも相成候はゞ、伏而願は、臣即ち

御暇を賜り、歸藩被仰下度奉希望候(下略)
實に、思ひ切つて、能く是れまでに、書いたものだ。當時の事情を察すれば、遷都に反對する者も多くあつて、殊に、此際の御幸は、甚だ危険である、といふので、一時は、中止の御沙汰も、出さうになつたが、漸く此建白書で、喰止める事が、出來たのだ。それについて、木戸と江藤との間に、面白い話がある。

五

戰爭に勝つて、天下を統一してからは、却々、討幕派の鼻息は強かつたが、未だ江戸城が、漸く手に入つた許りて、幕臣の多くは、各所に潜伏して、恢復の策を、講じて居るとか、又は、奥羽の諸藩が聯盟して、官軍に當るとかいふ、風評も、起つて來るし、加ふるに、榎本釜次郎が、幕府の軍艦を率ゐて、脱走した時には、流石に、勢ひの好い新政府も、一時、弱り果てた。

といふものは、一時の勢ひで、幕府を押し倒したやうなもの、何しろ、二百七十年の間、天下を壓へて居たから、恩威兩つながら行はれての、響きは、却々、根が深く入つて居た。倘し、佐幕派の方に、少しでも都合の好い事があれば、自然、其方へ引付けられるやうな、傾向があつたのであるから、それを甚く怖れて居たのだ。従つて、關東行幸の一條も、口には強く唱へて居ても、心の底を洗へば、幾分の懸念はあつたのだ。江藤は、その形勢を視て、非常に憤慨したので、建白書の、筆鋒鋭く、議論も激しかつたのである。乍併、江藤が、此書面を捧呈する迄には、多少の曲折はあつた。自分が、深く信じて居る、木戸に見せて、豫め打合せをするつもりで、木戸を、訪ねる事になつた。

江藤と木戸を比べると、全然、性質も異つて居たし。出身も、佐賀と長州の異ひが、あつた上に、木戸は、漸進主義の人で、江藤は、急進的人であつたから、何うしても、二人の議論が、一致すべき筈はない。けれども、徳川

幕府を倒して、新しい政府が、出来たばかりであるから、何事も、新しく積上げて行く、必要は、二人共に、認めて居たのだ。其時分には、木戸も、焦慮り氣味があつて、随分、思ひ切つた事を、やつたものだ。後には、江藤と、意見の相違があつて、屢々、衝突して居るが、太政官が、京都にあつた時分には、木戸の方から、幾分か譲歩して、江藤の意見を、採用するやうにして居た。又、江藤は、才幹のすぐれて、先の見える人であつたから、木戸も、其一事に於ては、互に容れる所もあつて、江藤の説は、よく参考として、耳を傾けたものである。軍務局の御用で、江藤が、暫く關東へ行つて、三四日前に、歸つて来たのは、聞いて居たが、未だ會はなかつたのだ。所へ、急に面會をしたいといふて来たので、木戸は、取敢ず、江藤を迎へた。

「ヤア、木戸さん、久しく會はなかつた。京都の方は、何ういふ模様ですか」

「別に之といふて、物語るほどに變つた事はないが、相變らず、金の無いのと、議論許り多くて、事の進捗がつかぬ、のと、此二つには、苦しめられて居るのぢや。ハツハツハツ」

「金の事は、三岡が、働いて居る、といふ事ぢやから、さまでの心配はあるまい」

「イヤ、然うでない。三岡が働いても、詰りは、焼石に水ぢやからな」

「それは然うぢやが、折角、此所まで漕付けたものを、此儘に投出す譯にもなるまい。今、一寸の辛抱ぢや」と、語り乍ら、江藤は、ずつと、膝を進めた。

「時に、木戸さん、拙者は、お役御免を願ふて、故郷許へ引籠らう、と思ふて、相談に来たのぢや」

「何と、御役御免を願ふ、と言はしやるのか」

「左様」

「フ、ム、一體、そりや何ういふ次第か」

「お互が、之までに命懸けて、押詰めて来た事が、さアといふ、ドン詰の場合に、腰を突くやうな事では、到底、見込みはつかぬから、寧ろ御免を願ふ方が可からう、と思ふたので、其覺悟に、なつたのぢや」

「フ、ム、何ういふ次第から、然ういふ考へになつたのか、知らぬが、兎に角、夫までに覺悟をする、といふのは、容易ならぬ儀と考へるが、全體、どういふ事に激して、それまでの覺悟をしたのか。一應、聞かせて貰ひたい」

「イヤ、言ふまい。言ふた所で、到底、難かしい事だらうと、思ふから、寧ろ言はぬ方が、可からう」

「然うでない。それは一應、言ふた方が可い。逆も行はれぬ、と思ふて居る事でも、俺が、聞いて見て、存外に、易い事かも知れぬ。其處が、各自の觀察の異ふ所なのぢやから、兎に角、打明けて見たら、可からう」

江藤は、暫く考へて居たが、

「宜しい。それでは、話す事にしやう」

「ウム、何ういふ事か、承はらう」

「實は、關東行幸の一條に就てぢやが、此頃、承る所に依れば、今暫くは、御沙汰止み、といふ風評を聞込んだが、此場合に、左様な優柔不斷な事では、到底、天下を統一する事は、難かしい。既に幕府をあれまでに、追詰めて、江戸城までも、受渡しが済んだ、今の場合に、左様な弱味を、見せるやうな事では、未だ向背が、判然して居らぬ、

談藩を押へて、王政一新の實を擧げる、といふ事は、なるまい。永い間、帝都とした土地を、御發聲遊ばして、關東へ、行幸遊ばすのは、最も大切な事では、一刻も急ぐ必要があるのに、之れに故障の起る、といふものは、畢竟、

天下の大勢に通ぜざる、姑息の輩の言ひ分に、違ひない。それ等の者に働かされて、御沙汰が異變するやうな事では、之から先の事が思はれて、甚だ面白くない、と思ふから、其所で、拙者は、御役御免を願ふて、國許へ引籠らう、といふのぢや」

豫て、江藤が、帝都を、江戸へ遷す、といふ説を、唱へて居る事は、木戸も、能く心得て居るし、自分も、口に出して言はぬが、心には、同意して居たのだ。只だ、それを實行するには、時機を見なければならぬから、徐に機會を、窺つて居たまでの事である。然るに、元來が、性急な江藤は、それをもどかしく思つたものか、關東行幸の事が、御延期になる、といふ説が漏れて、それを聞いて、憤慨したものに違ひないが、此場合、一人でも、江藤ほどの者を失ふのは、折角に築き上げた、政府の基礎に、龜裂が入るやうなものであるから、木戸としては、黙つて聞流す事は能なかつた。

六

王政維新の實を擧げ、公議輿論に基いて、政治の實を擧げる、といふ爲には、諸藩の有志の中から、然るべき人物を、採用するのが良い、といふ事になつて、それ／＼に名指で、引上げられた人物は、何れも其藩に於て、屈指の者ばかりであつた。先づ薩藩では、寺島宗則、町田久成、五代友厚、長州藩では、廣澤兵介、井上聞多、楫取素彦、土州藩では、後藤象二郎、神山佐多衛、佐賀藩では、副島次郎、大隈八太郎等の人々であつたが、其時分には、朝廷から、召されて出た、といふので、之を徴士といふて居た。夫に對して、貢士といふのがある。それは四十萬石以上の、藩から三名、十萬石以上から二名、一萬石以上から一名と、いふやうに、工合に割付けて、其藩を、代表し得る、實力あるものを、召上げたのであるが、諸藩へ下された、御沙汰書は、

「今般、王政御維新、仰せ出され、輿論公議を探り候、御趣意を以て、各藩より、貢士として、太政官へ、差出し候やう、仰せられ候條、其御趣意に相基き、國々の國論に、代るべき者、人選、差出し候條、御沙汰候事」と、いふのであつたが、諸藩からは、それに對して、貢士を、人選して出した。併し、或は、藩主の御氣に、入らぬ者だ、とか、或は、重役の嫌ひな者だ、とか、いふものは、如何に才物でも、之を嫌つて出さない、といふやうな、

弊もあつたので、朝廷から名指で、呼上げる者も、出來た。それを徴士と、いふたのである。貢士として、出て來た人の中にも、却々、立派な人物があつて、後には、新政府の爲に、種々、貢獻する所があつた。兎に角、藩より勸めて出したのと、朝廷から名指して、呼上げられたとの違ひがあるのだから、徴士として、朝廷へ出た者は、先づ當時に於ては、第一流の人物として、見なければならぬ。有體に言へば、多士濟々の新政府であつたが、早くから中央へ出て、討幕勤王の爲に、働いて居た者は、所謂、一日の先輩で、自然、天下の事情にも、通じて居る所から、然うした人物は、一人でも多く、圍ふて置くのが、新政府としては、必要なのだから、其所で、木戸は、江藤が、辭職の決心を以て、關東行幸の事を争ふといふ、覺悟が、如何にも堅いのを見て、

「足下のやうに、然う一本氣に、言はれても困るが、兎に角、争ふべきだけは、争ふ事として、御役御免などいふ、事は、御互に控へやうではないか、足下の説には、吾等も同意であるから、共に力を盡して、朝廷へ、貫徹するやうに勤めやう」

「貴下に、それだけの覺悟があるなれば、拙者も、敢て御役御免と、いふやうな事は、申したくもないのだが、今日の朝廷の御有様では、逆も肯かれまい、と考へて、此覺悟をいたしたのぢや」

「宜しい、能く解つた。詰り、關東へ行幸の事が、一度、御内定して居たにも不拘、僅かの事に、故障を申して、御中止の御沙汰が下る、といふ、此頃の風聞に就て、足下は、憤慨して居られるのぢやから、それに就ては、吾等も骨を折つて見やう」

「貴下が、それまでに言はれるなれば、之を一應、御覽下さい」

と言ふて、江藤が差出した、一通の書面を、木戸が、取る手遅しと、披いて見れば、之れぞ江藤が、心血を注いで、認めた建白書であるから、木戸も、黙々讀返して、

「イヤ、立派なものぢや。足下が、斯くまでの御覺悟を以て、朝廷へ迫られる。その赤心は、必ず朝廷に於ても、御

採用になるに、違ひない。吾等も、及ばずながら、力を盡す事に致さう」
 「貴下に、其覺悟があると、聞いて、拙者も、安心致した。此上ともに、御骨折を、頼み入る」
 「併し、江藤さん、愈々、建白書の通り、御採用に相成つて、關東行幸が決した曉に、路次の警護萬端、吾々の力に依つて、爲さなければならぬものぢやが、萬一にも、佐幕派の殘黨が、不穩の企てを、いたした時には、何とせられるか。其邊の考へもあれば、一應、聞いて置きたい」
 木戸は、見事に一本、灸所を衝いた意で、江藤の顔を、ヂツと、見詰めたが斯ういふのだが、江藤は、ニヤリと笑つて、

「道御理の御心配ではあるが、併し、夫等の事は、防ぐに道を以てしたら、さまでの事もなからう、と存する」
 「して、如何いたせば宜しい、と言はれるか」

「諺に所謂、毒薬も盛りやうに依つて、薬に變ずる、といふが、其外に、策はあるまい」
 木戸が、膝を打つて、

「其所ぢや。吾等の考へも、其通り」

二人は、聽て、硯を引寄せて、何か紙に書いて、互に示し合ふて居たが、

「オ、こりや、貴下の考へも、同じや」

木戸は、笑ひを洩して、

「之なら大丈夫、巧く行き居る意ぢやが、足下の考へと、符節を合はすやうに、少しも違つて居なかつた、といふのも不思議な譯ぢやのう」
 斯くて、江藤は、木戸の同意を得たから、喜び勇んで、歸つて來た。

七

其翌日、江藤の建白書が、御前へ披露された、太政官の一室に、議論の花が咲いたのである。乍併、之には、木戸が同意して、飽までも、江藤に代つて、

「關東行幸の一條は、最初の企ての通り、一日も早く行はなければ、天下の人心を、收める事が出来ぬ」

といふ説を述べて、到頭、決してしまつたのである。が、此場合に、頗る難かしかつたのが、

「關東へ、行幸遊ばすに就ては、どうしても、東海道を通るのであるが、萬一にも、佐幕派に依つて、不穩の事が、起つた時には、どうするか」

といふのが、一問題であつた。

「愈々、御發輦の日取が決したら、それと同時に、徳川慶喜、及び龜之助に對して、街道筋の警護の役を命ずる、といふ御沙汰を下せば、何事もなく、江戸へ、御安着遊ばすに、定つて居る」

と、木戸が言ひ出した。これには、非常に驚いて、反對する者もあつた。殊に、公卿などは、眼を圓くして、

「此場合に、徳川慶喜父子をして、御鳳輦の警護を命ずるとは、途方もない事だ」

といふて、頗る反對したが、木戸は、力強く、それを打消して、

「毒を制するに、毒を以てする、といふ諺がある通り、徳川父子に、此役を命じたならば、却て朝廷の御爲に、身を以て、盡すに違ひない。又、其事が、奥羽諸州に聞えたならば、徳川家の前途を思ふて、官軍に抵抗しやう、として居る者も、其志を翻して、却て、朝廷に親いて來るに、違ひない。若し、警護の役をさせて、此御役を勤める場合に、不都合の行ひがあつたならば、其時には遠慮なく、徳川家を、取潰してしまへば、差支へないのであるから、少しも憂ふる所はないのぢや。王政維新の御沙汰を下して、關東行幸の第一に、徳川慶喜をして、鳳輦の御警

護を命ずる、といふやうな、大膽にして、而かも、仁慈の御沙汰が下つた、といふ事が、六十餘州に響いたらば、必ずや此一事だけでも、天下の人心は、歸服して来るに、違ひない、今更に道中筋で、不穩の風評が、ある位に事に懸念して、此行幸を延ばす、といふやうな事は、朝廷の御威光にも關するから、速に、行幸の御沙汰を、公表せられるのが可からう、と思ふ』

最初の中は、頻に反對して居た者も、諄々として、木戸が、説いて行く、其説には、遂に服して、關東行幸の事は、茲に確定したのである。

愈々、鳳輦が、關東へ向はれる、といふ事が決すると、果せる哉、道路の風評、紛々として、今にも、不逞の徒が街道筋に集まつて、意外の騒動が、起るやうな風説は、頻に夫から夫へと、傳へられた。けれども、木戸は、一旦、斯うと決した以上、飽までも遂行しやう、といふので、徳川慶喜父子に對して、街道筋の警護を一任する、といふ御沙汰を、朝廷から下されたので、サア驚いたのは、佐幕派の連中であつた。火の無い所に、煙は立たぬ、といふ譬の通り若し鳳輦が、東海道筋を、下るやうな場合には之を擁して、薩長二藩の、鼻を明かして呉れやう、といふ計畫はあつたのだが、意外にも、徳川慶喜父子に、鳳輦の警衛を命じた、といふ事であるから、何時か、其計畫は休んで、同時に、風評が立消えと、なつてしまつた。又、慶喜父子は、此間まで、朝敵の取扱ひを受けて、謂はば謹慎中の身の上で、あるにも拘らず、此有難き御沙汰に接したのであるから、責任を以て、鳳輦を、無事に江戸へ、お送り申さなければならぬ。萬一、幕臣の中に、左様な者が、あつてはならぬ、といふ所から、役目の者を奔走させて、鎮撫に着手したから、木戸が、見込みの通り、鳳輦は、少しの故障もなく、慶應四年九月に、東海道筋を、江戸表へ、御着になつたのである。

奥羽諸州の兵亂が、未だ全く鎮定しない、といふのに、鳳輦が、江戸へ御着になつた、といふ事は、徳川最良の、江戸つ子を初め、關東人の膽に銘じて、形にそれとは、明かにはなかつたが、人心を、慰撫する上には、非常な效力

があつた。朝廷に於かせられても、極めて其點に、御注意なされたので、高輪の泉岳寺に、葬むつてある赤穂義士の墓前に、勅使を遣はされて、有難き御沙汰を傳へられた、といふやうな事は、片鼻貞の江戸つ子を、著しく感激させた、といふ事だ。

併し、此時には、未だ江戸を、帝都にする、といふ事は、決して居なかつた。一旦、京都へ、還幸遊ばされて、更に翌年三月に、行幸遊ばされてから、初めて、茲に江戸を、東京と改めて、大日本國の帝都と、いふ事に決したのである。之までに、迅速な進捗の着いたのは、木戸、大久保の二人の盡力は、最も多かつたには違ひないが、遷都の事に就ては、前にも、言ふた通り、江藤の建白が、原因を爲したものである。

薩長藩情と大村の死

一

村田が、朝命を奉じて、關東へ、下つた時には、大村益二郎と、いふて居た。上野に立籠つた、彰義隊を、唯一日の中に時間を限つて、攻落した戦略は、大村が、立てたものであつて、表面の大參謀は、西郷であつたが、實際は、大村が、之に當つて、彰義隊を、一掃してしまつたのだ。

是が爲に、江戸市中に、潜伏して居た、幕臣も、手の出しやうが無く、多くは奥羽方面へ、落込んで行つた。それが、纏て、奥羽諸藩が、聯盟して、薩長二藩を、憎むの餘りから、朝敵の名に甘んじて、大きい戦ひと、なつた時に、何れも一方を受持つて、官軍を悩ました。

奥羽の戦ひは、會津の落城と、長岡藩の一頓挫に依つて、やうやく終熄し、天下は、再び太平の昔に返つた。けれども、函館には、榎本釜次郎、大島圭介、松平太郎等の、幕臣が立籠り、征討總督として、黒田清隆が、其對手に、なつて居たのであるが、是は、何れ程、奮闘した所で、大勢の上に、關係の無い戦さで、僅に北海の一部に於ける、小争鬭に過ぎなかつた。

幾度か、危い橋を渡つて、無理にもせよ、押付けて来て、手品の種は、人に知られず、何うか、斯うか、天下は、薩長二藩のものに、なつてしまつた。伏見鳥羽の戦ひが濟んでから、薩長土肥と稱して、土州と佐賀の二藩が、加は

つて来た。併し、それは、名義だけの事で、其實は、矢張り薩長二藩が、思ひ通りに、政府の組織から、政治の方針まで、立て、行くのであつた。

勢ひに任せて、薩長の二藩が、切つて廻はず、それに對しては、多くの人が、頗る不満に感じたけれど、兎に角、維新の大業は、二藩の力に依つて、成し遂げられたのであるから、假令、二藩の遺口が、専横に流れても、さうひどく、批難する事は出来ず、二藩の人達は、思ひの儘に、明治政府の、實權を握つて、勝手な振舞をして居た。一時は、各藩の不平から、何事か起りさうであつたが、兵馬の實權を握つて、天下の事を、行ふて居る、二藩の力で、壓へ付けてしまつたから、何れも物にならずして、立消えの如き姿になつて、日本の國を起さう、と、また、寝かさう、と、二藩の力に依つて、何うにでもなるやうな、形勢に、なつてしまつた。

一口に、薩長二藩といふて、維新の功勞を、同じやうに誇つて居るが、實際に於ての武功は、薩藩にあつて、長州藩は、薩藩の後から、附いて行つた、といふやうな傾きがあつた。

けれども、長州藩は、最初から、勤王討幕の一點張りて、進んで来たので、其間に、岐路へ外れた、といふやうな事は無かつた。是が爲には、幕府から、征長軍までも向けられて、一時は、非常に苦しんだが、それを忍んで、押通して来た、といふ所に、長州藩の誇りはあつた。薩藩に至つては、長州藩と、違つた所があつて、齊彬の死んだ後に、久光が、専ら藩政を、握つて居たので、動もすれば、藩論が、佐幕に傾きかけた、といふやうな事情があつて、思ふやうに、働きは出来なかつた。幸にして、大久保、西郷といふが如き、偉い人物が、出て来た爲に、纔に藩の立場も、左まで見苦しい事にならず、維新の大勢を、定むる上に於ても、薩藩の力は、長州藩に、優るとも、劣らなかつた、といふまでに、漕ぎ付けたのは、偏に二傑の在つた爲であつて、薩藩の働きとは、いふやうなもの、實は、二傑の働きてあつた。

斯ういふ事情で、ある所から、自然、二藩の間に於ても、多少の軋轢があつて、愈よ明治政府が、出来てから後は、

其暗闘は、始終、續けられて居たのだ。昭和の今日になつても、薩長の二派が、互に争ふて居る。それは、此時代から、芽ぐんで居た事で、維新の残物が、すべて死に絶えぬ限り、此暗闘は、容易に止むまい、と思ふ。
維新の際、武功に於て、長州藩が、薩州藩に、幾分か劣つた、といふばかりでなく、新政府が出来てからも、薩藩には、大久保と西郷が、並んで進んで来るのに、長州藩は木戸が、只一人であつたから、何うしても、其權衡が取れなかつた。

後には、山縣や、井上、又は伊藤と、指を折つて來れば、立派な人物も在つたが、其當時に於ては、第三流以下に、數へられて居た人々で、なか／＼西郷や大久保と、太刀打の出来るやうな事は、なかつたのだ。實に、西郷、大久保に對して、太刀打が出来ぬばかりでなく、木戸と、肩を列べて進む、といふ事さへ、出来なかつたのであるから、人物の權衡が取れなかつた、といふ事が、薩藩の勢力になつて、長州藩の勢力が、自然、それに壓へ付けられる、といふ傾きがあつた。僅に大村益二郎が、居た爲に、長州藩の軍人は、息を吐いたのだが、それとも、西郷に對抗して、大村が、陸軍の全體を、壓へて行く、といふ事は、出来なかつたのである。其智謀と、學識に於ては、縱令、西郷以上の大村である、としても、人物の大小を、比べて行けば、等級が違つたのであるから、迎も、對等の相撲を、取る事は出来なかつた。従つて、陸軍の勢力は、薩藩の爲に専有されて、長州藩の如きは、何事に付いても、薩藩の尻に、附いて行く、といふ外は、無かつたのである。

長州藩の如きですら、それであるから、他の藩に至つては、殆ど問題にならなかつた。佐賀藩から、出て來たのは大隈、大木、江藤、副島の四人であるが、大久保、木戸、西郷の三人と、太刀打は出来ない。土州藩からは、後藤、板垣の二人が、出て居たのだが、是とても、藩長の三傑を、向ふに廻して、大に争ふ、といふだけに、實力を有つて居なかつた。況して、それだけの人物すら、有つて居なかつた。他の藩が、薩長二藩に對して、對等に進んで行く、といふやうな事は、夢にも見ることは、出来なかつたのである。

權力の相違から。偶類な事が行はれるので、これに對して、不平を抱くものは、聯合して立向ふ、といふ傾きがあり、新政府になつてからの當座は、相應に、内部の紛紜は、あつたものと見て、差支へない。

一一

新政府が出来て、それ／＼に、賞典祿を賜つた。維新の功勞に對する、御褒美といふ意味もあるし、又、是から先の食祿を取極める、といふ意味もあつて、總花同様に、振撒かれたのであつた。重立つた者が、賞典祿を、與へられに付いて、其割振を、茲に掲げて見やう。

- 五千石 三條實美、岩倉具視
- 千八百石 木戸孝允、大久保利通、廣澤眞臣
- 千五百石 中山忠能
- 千石 正親町三條實愛、大原重徳、東久世通禧、小松帶刀、後藤象二郎、岩下左治衛門
- 八百石 澤宣嘉
- 四百石 田宮如雲、福岡藤次、中根雪江、辻將曹
- 百石 江藤新平、土方備左衛門、島義勇
- 其他、幾百人といふ、澤山の人に、それ／＼等級はあるが、御賞典があつた。併し、復古功臣と稱へて、早く言へば、文勳ある者としての、御沙汰であつた。
- 又、武功ある者に對しては、
- 二千石 西郷吉之助
- 千五百石 大村益二郎

千石 吉井友實、伊地知正治、板垣退助
 八百石 大山綱良、由利公正
 七百石 黒田清隆
 六百石 山縣有朋、前原一誠、山田顯義

同じ賞典でも、永世と、終身の二つに、區別されて居たが、兎に角、此總花は、巧に振撒かれたので、左までに、不平は無かつた。祿高にこそ、多少の相違はあつたが、武勳の上に於て、西郷と大村が、互に相並んで、莫大な賞典を賜ふ事に、なつたのは、薩長の武功を、代表する意味からであらう。

大體の上から見れば、薩藩出身の者は、榮華に誇る傾きがあつて、長州人が、それに對する、不平は、一通りではなかつた。けれども、同じ長州人の間でさへ、不平は、絶えなかつたのであるから、薩藩に向つて、其不平を洩す、といふ事は、出来なかつたのである。

維新の際に、立後れとなつたり、或は、國詰の名の下に、取殘されて、討幕の大業に、與り得なかつた爲に、論功行賞に漏れた、連中は、長州藩の中にも、澤山あつたのだから、それ等の人は、非常に不平を抱いて居た。中央に出て居る、長州人が、國許に居る、長州人の不平を鎮撫しやう、として、苦心した事に、非常であつた。所が、薩藩の方にも、それと同じ事情で、内部の不平に、苦しんで居る、先輩は、少なからずあつた。

藩と藩の争ひばかりでなく、又、藩主と藩臣の間にも、感情の行違ひがあつて、紛紜ついで居たのだから、可笑なものであつた。

島津久光が、大久保に送つた、書面の中に、

「汝は、余の家來でありながら、朝廷から、從三位を戴いて、それに甘んじて居るのは、何事であるか」といふ意味が、書いてあつた位だから、況して、西郷の正三位には、非常に立腹して居たのである。怒る久光に、無

理があるのはいふ迄もないが、併し、久光は、家來が、自分より上の位置になる場合、主人に、一應の申出もなく、直に御受けしてしまつた、といふのを以て、甚だ不臣の至りである、として、怒つたのだ。是が爲に、海江田信義が、態々、久光の内命を含んで、東京まで、大久保と西郷へ、談判に來た。流石の西郷、大久保も、餘りの馬鹿々々しさ、に恐縮して、海江田の對手に、なる事も出来ず、勝安房に頼んで、海江田を、巧く説き付けて貰つて、國許へ追返した、といふ事があつた。

所が、西郷は、流石に偉かつた。一度は、此賞典に與つて、有難く御受けはしたが、直に辭表を出して、國許へ歸つた。自分は、僅な功を樹てた爲に、空前の御沙汰まで蒙つて、最早、一身の上に於て、何の望みも無い。加之、是から先の事は、自分等の力を以て當る、といふよりは、後進の人の爲に、途を開いて、新しい考へを、有つた人達に、やつて貰ふのが、却て天下の爲になる」といふ意見から、其職を辭して、國へ歸つたのだが、それは、世間へ對して、いふた迄の事で、其實を言へば、國許に残された、士族の不平を抑へる、といふのと、新政府になつてから、情實因縁に依つて、事が、公平に取れない、といふ、それを見て居るのが、厭になつた爲に、辭職してしまつたのである。

何れにしても、其中の理由の一つを、實として見て、考へた所で、此際に、西郷が、身を退いたのは、實に立派な事であつた。

西郷が辭職して、國へ歸つた切り、出て來ない、となれば、薩藩の勢力の上に、非常な影響を有つのであるから、そんな事を、薩人が黙つて、見て居る譯はない。忽ちにして、西郷を、引出しては來たが、一時は、さういふ事もある。

大村益二郎が、兵部大輔になつた。其頃の兵部大輔は、今で言ふと、参謀總長といふ格式で、實際に於ては、陸軍卿以上に、勢力を有つて居たのである。薩藩出身の豪傑連が、殆ど陸軍部内を、占領して居た時代に、大村が、長州藩から出て、此任に就いた、といふ事は、全く大村の手腕を、薩人の方でも、認めて居たから、之を拒み得なかつたばかりでなく、長州藩としては、大村を、此重要な位地に、留めて置かなければならぬ、必要があるので、斯ういふ事に、なつたのである。

學問は深く、智慧はあつたし、徒らに強きをのみ誇る、軍人の中に於ては、大村のやうな人物が、獨り毅然として、立つて居ると、殊の外に、目立つたものである。人は、目前の出来事に付てのみ、騒いで居る時に、大村は、もう十年後の事を、考へて居た。陸軍の軍制を定め、徴兵令を發して、四民皆兵の制度に、改めてしまはう、といふ考へを、既に有つて居た。

板垣退助が、士の常職を解いて、四民皆兵の制度に、改めなければ、徳川幕府を倒して、王政復古にした、甲斐が無い、といふ意味の建白をした。其以前に、大村は、既に實行す可く、計畫して居たのだ。

板垣の建議と、大村の考案を、いづれが先であるか、といふ事は、敢て詮索する必要はない。兎に角、あの位の人になると、知識の上にも、大した違ひが無い。同じ時代に、同じ事を考へて、兵制上に、大變革を加へやう、としたのが、甚だ妙である。

大村の智は、既に時代を、超越して居たから、舊弊の頭を、有つて居る奴から、ひどく目差されて、嘗に厭がられるのみならず、ひどく之を憎んで、極端の手段を以て、排斥を計る者が、出て来る、といふやうな事は、是までも、多く例のあつた事で、大村が、四邊の事情や、頑固連の反對に頓着なく、陸軍部内を改革し、兵制の一新を、斷行しやうとした事は、一部の頑固連には、ひどく憎まれて、大村を斬れ、といふ聲さへ、聞くやうになつて來た。

木戸が、訪ねて来る、といふので、大村は、心待ちに待つて居た。燈の點く頃になつて、木戸は、やつて來た。

「木戸様が、御出てになりました」

「ウム、さうか、是へ御通しをせい」
暫くすると、木戸は、案内されて、客間へ通つた。

「ヤア、もう少し、早く来る積りぢやつたが、長尻の來客で、存外に、遅れて相濟まぬ」

「是といふ用事も無いのぢやから、今宵は、長く待たせられても、差支は無かつたのぢや」
長州藩の人物も、多く居たが、大村を對手に、互角に話し合ふものは、木戸のみであつた。

「用事といふのは、何事か」

「イヤ、外の事でもないが、實は、頃日來から是非、一度會ふて、相談して見たい、と思ふて居た事は、澤山にあるのぢやが、マア、それは緩り話す事として、取敢ず、注意までに言ふて置きたいのは、貴下が、智慧に任せて、何事も、思ひの儘にやつて、退ける。其遺口が、少し走り過ぎて居るやうに思はれて、何分にも、危なくてならぬのぢや、周圍の事情を省みて、徐に進むやうにしたら、何うぢやらうか。左たきだに、猜疑嫉妬の甚しい輩は、貴下に對して、甚だ穩かならぬ事さへ、口走つて居る。俺の耳へも、その隘口は、這入つて居るのであるが、兎に角さう急がずとも、緩り進んで行つても、間に合ふ事ぢやから、幾分の弛みを付けて、貴下の考へた事を行ふやうにせぬ、と、諺に所謂、禍は障壁の中にありぢやから、それを、第一に言ひたうて、今日は、會ひに來たのぢやよ」

木戸の注意を、大村は、頗りに肯きながら、聽いて居たが、
「御配慮は辱ないが、併し、幕府を倒して、新政府の基礎が、まだ定まらぬ今日であれば、改革といふよりは、寧ろ是より始める、といふ方が、適切であらう。従つて、頑迷不靈の徒には、氣に入らぬ點もあらうが、そんな事には頓着なく、ドシ／＼やつ付けてしまはぬ、と、迎も、政府の組織は、完全に出来るものでない、殊は、唯強い

事のみを、自慢として居る、陸軍の組織などは、一層、さういふ傾きがあるのぢやから、此際には、唯一と息にやつ付けてしまふのが、上策ぢや、と思ふ』
と、言ひ終つて、大村は、意氣昂然として、木戸の注意には、更に頓着せず、ニヤリと笑つて、木戸の顔を見た。
『流石に、貴下ぢや。それまでに、覺悟してやらつしやる、といふ事は、固より悪くはないのであるが、併し、詰らぬ妨げの爲に、大事を誤るのも、餘り褒めた事てなからう。其邊には、御如才もあるまいが、切に御注意して欲しいのぢや』

『折角の御慮ぢやから、承つて置く。併し、大村には、大村式といふのがあるから、マア、見て居て下さい』
大村の決心が、茲まで進んで居て、多少の障礙に頓着なく、平生、唱へて居る、陸軍の組織を、純粹の西洋流にしてしまはう、と、堅く決めて居るが、よく判つたから、此以上は、木戸が進んで、何を言ふた所で、何の甲斐もあるまい、と、見て取つて、此話は、木戸の方から、控へてしまつた。
今日になつて考へれば、木戸が、是までに心配して、大村に注意したのは、無駄な事ではなかつた。大村の最期を視れば、木戸の懸念が、どこにあつたか、といふ事が、想像し得られる。

朝鮮に關する紛紜は、明治六年まで、引つゞいて解決しなかつたが、それ迄に、政府内では、相當に研究をして交渉に、少しも手抜かりは、なかつたのであるが、何分にも、朝鮮政府が、頑強に突つ張つて居るので、いかんとも仕やうがなかつた。此事については、木戸が、一番に力を盡して居たのである。
各藩の勢力を、均等にする必要があるとか、或は、薩長の暗闘を緩和しなければならぬ、とか、内面的には、種々の問題もあるが、それよりも大切な事は、朝鮮に對する、條約問題であつた。之れについては、各人が感情を抑へ、すべての力を一つにして、その解決を、急ぐ可きである、と、木戸の考は、殆んど此一事に、傾注されて居た。

木戸が、大村を訪ねて來たのは、矢張り此問題が、主としてあつた。大村に對して、言ふだけの注意は、言ふてしまつたし、もう外に、言ふべきことは無いのだから、そこで、此問題に、移つて來た。

『時に、大村さん。例の朝鮮の一條ぢやが、何とか處置を付けてしまはぬと、後日に、煩ひを遺すと思ふから、それに、就ては、貴下の奮發を願ふ外はないのぢや。一と通りの書類は、廻して置いたが、見て呉れたかのう』
大村は、軽く肯いて、

『書類は、よく見たが、朝鮮政府の返答は甚だ以て怪しからぬ事ぢや』

『サア、其怪しからぬ事を、仕向けて來たのも、詰りを言へば、此方の内兜を、見透して居るのでもあらうが斯かる事は、打棄て、置けまい、と思ふ』

『併し、木戸さん、打棄て、置けぬ、と言ふて、何うする積りか』
『何うする、といふて、外に方法も無いのぢやから、兎に角、正式の談判を、開いて見る外はあるまい』

『談判を開いて、當方の申條が、容れられぬ時は、何うする積りか』
『其處が、相談ぢや、無論さうなつた、驍は、國の面目としても、一戦を試みるの外は無いが、俺は、一個の文官として、立つて居るのであつて、兵馬の權に就ては、何等の關係も無いのぢやから、貴下の奮發を頼む、といふのも、其處にあるのぢや』

『フ、ム、それぢや、朝鮮政府と、戦さを始めよ、と、いふのが』

『マア、其處まで行かなければ、此事件は、落着を告げまい、と思ふ。又、一戦を試みても宜かららう、と思ふのぢや』

『それや、折角ぢやが、今、外に向つて、兵力を費す、といふ事は、面白くないやうに思ふ。國內が、漸く治まつたといふやうなもの、まだ到る所に、新政府へ對する、不平の徒が、潜伏して居て、何時、何ういふ騒ぎが、始ま

らぬといふ、限りも無い。敢て、それを恐れる、といふ譯ではないが、今俄に、外へ對して、兵力を分ける、といふのは、面白くない』

平生の大村にも似合はず、今日に限つて、頗る弱い言を吹くので、木戸は、甚だ不快に感じた。此事に就ては、一も二もなく、同意して呉れる、と思つて、やつて来て見れば、案外に、斯う言ふ答へであるから、頗る面白くないと思つたが、尙ほ一押し、押して見よう、といふ氣になつて、膝を立て直した。

「實は、朝鮮政府が、無禮な返答を致した、といふだけに就て、此軍を起さう、といふのではない。某外にも、理窟が、あつての事ぢや。恐らく貴下も、俺と同じやうな考へであらう、と思ふから、一應、述べて見やう」

木戸が、斯う言ひ出したから、大村も、膝を進めた。

四

幕府を倒して、明治政府は立てたが、それは一時の勢ひに乗じて、巧に遣り送げた。といふだけの事であつて、眞に天下の人心が、未だ新政府に、歸服して居る、といふ譯ではない。實に、そのみならず、諸藩士の間にも、なかなかな不平の徒があつて、動もすれば、不穩の形勢が、現れて来る、失意に、暮して居る藩の連中が、不平を懐くのは未だしもだが、現に、政權を握つて、全盛に誇つて居る、藩長二藩の者さへも、不平を懐いて、何うかすると、政府に反抗するやうな、氣勢を示して居るのだ。是は随分、變な話ではあるが、段々打割つて、其事情を知れば、無理の無い事だ、といふ點もある。

といふものは、維新の際に、立遅れとなつて、兵亂の巷に、立會はなかつた連中は、國許に、留守番して居たのであるから、論功行賞の頭數には、入れられて居なかつたのだ。

縦令、其場に掛かり合はさないでも、國許に居て、後顧の憂ひを、無からしめた功は、相當にある。それ等の者は

更に顧みられず、僥倖にして、兵亂の巷に出入した、といふ者だけに、恩賞の御沙汰があつた、といふ事は、甚だ不公平である、といふ議論もあつた。又、一時の恩賞は受けた、が、直に暇を賜つて、國へ追返された、連中もある。それ等の人も、同じやうに不平を、言ふて居るのだ。詰り、褒美を貰つて居る者では、其高下の別をつけられたに就ては、銘々勝手な熱を吹いて、自分天狗の不平は、有つて居る。さうした連中が、動もすると、愚圖々々、言ひ出すので、之を抑へるに就ては、政府に立つて居る、薩長の先輩も、苦心して居たのだ。木戸なども、獨り胸を痛めて、一夜寢ずに考へた事もあつた。

さればとて、今更に、不平を言ふて居る奴を、悉く引出して、役人にする事も出来ず、名義がないのに、追賞してやる、といふ事も出来ない。何とかして、逃途を造らなければ、内亂を醸す恐れがある。此事は、木戸ばかりでなく、其外の者も、考へて居たのだ。木戸は、それに就ても、朝鮮征伐の必要はある、と、心ひそかに思つて居たが、今日は、大村を動かさう、として、やつて来たのである。

「朝鮮政府には、猶ほ一應の談判をして、不調になつた上は、征韓の軍を起し、不平の連中を引出して、相當の功名をさせ、後日の不平を抑へやう、と思ふのだが、是は世間へ、公に言へぬ事であるが、俺は、左様いふ考もあるのぢや。貴下の意見は、どうかかな」

聽いて見れば、一應の理窟はある。大村とても、絶対に悪い、とは思はなかつた。

「ウム、よく解つた。さういふ次第なら、篤と考へさせて、貰ひたい。やるにはやるやうに、遣方があるのぢやから朝鮮國の一つや二つ、取つてしまふ、に、手間暇は要らぬが、それから先の關係を、考へて見ると、迂闊に、手を出して、拔差のならぬやうな事が出来ては、一大事ぢや。詰り言へば、秀吉が、征韓の軍を、起した事情も、大方は、今日の事情と、相違は無からう。併し、秀吉の如き者ですら、あの通り始末であつたから、我々は、其轍を踐まぬやうに、考へねばならぬ。甚だ姑息のやうではあるが、今暫く、熟考の餘地を、與へて貰ひたい」

『今、此處で、極めなければならぬ、といふ事ではないが、併し、兎に角、宗對馬守の手を経て、既に交渉は、いくたびも、開いて居るのぢやが、その答へは、御承知の通りで、殆んど我國を、無視して居るから、どうせ、圓滿の解決はむづかしいもの、と、思はねばなるまい。然る上に、一日も早く、落着を付けてしまはぬ、と、取返へしのつかぬ事にもならう、と思ふ』

『宜し、其積りて、考へて見やう』

其日は、それで別れたが、大村の考へは、木戸に別れてから後に、征韓を決して居たのだが、容易に、さう決した、といふ事を、言ふて来ないのは、其以前に於て、陸軍の制度に、一大改革を行はう、といふ考へが、あつたからである。

思へば、朝鮮國も、随分、因果な次第で、昔は、秀吉が、應仁以來の亂を治めて、天下を統一した迄は、極めて順調に、進んで行つたが、愈々、太平の世に、なると、武功に誇る、連中が、不平を言ひ出すから、それを押へやうとして、遠く征韓の軍を起して、鷲林入道をして、手に入れて、之を不平連に、分けてやらうの考へから、あんな事を始めたのだが、今度も亦、それと同じやうに、不平の徒を、抑へる爲の一策として、朝鮮征伐をやらう、といふ、是はホンの内情の一部ではあるが、縦令、内情にもせよ、斯うした考へが、征韓論の理由の、一つであつたとすれば、朝鮮國こそ好い面の皮である。併し、此一事は、歴史的に、何等の根據もなく、傳説を基礎として、興味的に述べたのであるから、そのつもりで、讀んで欲しい。

木戸の考へ、何れ程、征韓論に、進んで居ても、大村が、同意して呉れなければ、纏まりは付かないのだ。されば木戸から、話し込んだ事に就て、何とか、返辭の來るのを、待つて居た所へ大村の書面であるから、開いて見ると、斯ういふ意味が、書いてあつた。

『此頃、相談の一條に就ては、應に承知した。必ず貴意に基いて、例の事は、實行の運びをつけるが、併しそれに就

ては、軍制の改革を、先にする必要があるから、外へ對する事も必要だが、内に對する事は、尙更必要であつて、此際、直に運びをつける事は、出來さうもない。尤も、さう長くは掛らずに、此方の仕事は、運ぶ積りであるから、其目鼻が付いたならば、直にも着手するから、決して心配をして呉れるな』

木戸は、此手紙を讀んで、漸く胸を撫て下した。大村が、是れ位に乗込めば、一と安心であるから、縦令、半年位は、不平の連中が、八釜しく言ふても、それを抑へる位の事は、何でもない。唯、木戸の心配は、免に角、幕府を倒して、未だ幾年ならず、新政府の基礎も、固まらない上に、四方から、不平の連中が起つて、内訌に日を送る、といふやうになれば、御上へ對しても、洵に相濟まぬ次第である。と思ふ所から、色々に苦心して居るのであつた。

又、朝鮮政府が、我政府へ對して、甚だ無禮の態度を示すから、一氣に攻め付けてしまつて、我國の武威を、示して置く事は、今後、支那なり、露西亞なりに對する、對外策としても、必要である、と考へて、それで、大村を動かさう。としたのだ。所が、大村も、其決心になつて呉れた、といふから、木戸も安心して、其時期の來るのを、待つて居たが、不幸にして、此事は、大村の横死に依つて、中止するの、止むなきに至つた。

五

大村が、兵制改革の意見は、全然、從來の古い遺方を廢めて、式を、世界に則り、さうして、西洋風のものにしてしまはう、といふのであつたから、無論、其時代の事として、反對する者は、多くあつたのだ。併しながら、大村は、そんな事に頓着なく、舊來の兵制は、無遠慮に打破つて、西洋式の陸軍を、組織してしまはう、と考へたのである。何れの時代でも、同じ事だが、長い間、慣れて來た事を變へる、といふのは、容易ならぬ事で、必ず舊式を守る、といふ方には、存外に勢力があつて、容易に新しい事を、行ひ得ぬのが、先づ一般の傾向である。それを、無頓着に踏破つて行かう、といふのであるから、なか／＼骨の折れたのも、無理は無い。

先づ、それをやるには、兵學寮を起して、新しい知識の、軍人を養ふ事が、第一である。といふ事になつて、兵學寮を、設ける場所を、何處にするか、といふのが、難しい問題であつた。

大村は、それに就て、京都を選んだのである。陛下は、江戸へ、御遷り遊ばして、長い間、帝都に定められし、京都は、人の心までも淋しくなつて、元來が、靜な都として、聞えて居た所だけに、一層の淋しさを、感ずるほどであつた。之に對する。繁昌の策を、講じてやらなければならぬ、といふ考もあつて、免に角、京都へ、兵學寮を、設けるのが至當である、と、大村は、殆んど獨斷的に、定めてしまつたのであるが、これに對する、不平の聲は、閑僚の中にはなかつた。

もう一つの理由は、全體、京都の人は、保守頑迷の氣風があつて、何事も、舊慣を墨守して、進取の氣象に乏かつた。従つて、攘夷論の如きは、非常に歡迎されて、明治の世に、なつたにも拘らず、尙ほ京都には、異人の足を、踏ませないなどと言つて、頑張つて居た者も、あつた位だ。そんな事で、紛紜して居る中に、陛下は、東京へ、御遷りになつてしまつた。詰り、薦に油揚を擧げられたやうな形であつたが、それでも、未だ眼が醒めないで、昔の攘夷論時代を、夢みて居たのである。

其處へ、兵學寮を設けて、大に西洋流の、兵事思想を注込んで、段々と、京都人の氣風を、世界的にして行く、といふ事が、纏て、排外思想を、棄てさせる原因にもなるだらう、といふのが、大村の考であつた。

乍併、さうした理窟は、京都に、兵學寮を設ける、といふ、正面の理由には、ならないのであるから、陸軍部内に、起つて来る、新しい兵制に就ての反對には、大村も、非常に苦心して、不平を抑へ付ける事に、掛つて居たのだ。偶々、木戸が訪ねて来たから、此事を話し出す、と、

「俺も、其事は聞いて居た。陸軍の中にも、故障を言ふ者があつて、大村は、怪しからんといふ聲は、屢々、耳にして居たが、段々、貴下の説を、聽いて見れば、大に道理であるから、多少の反對があつても、押切つて、やり遂

げたならば、必ず貴下の見込通り、良果を收める事が、出来るだらう、と思ふ。俺も、及ばずながら、内閣の方は、總まりを付ける事にしよう」

と言はれたので、大村も、頗る乘氣になつて、何うか、斯うか、西郷を説き付けて、承知させてしまつた。西郷は、西洋の學問はなかつたが、世界の趨勢は、よく解つて居たから、大村が、一通りの説明をすれば、それで、直に理窟は解る人だ。薩藩出身の、若い連中が、幾ら騒いだ所で、西郷が、承知してしまへば、他の者が、何う愚圖々々、言つた所で、大丈夫である、と、大村は、堅く信じて、其準備に掛かつたのである。

當時の、兵學校長、原田一道が、京都へ先發する事に決して、乃木希典、小川又次、兒玉源太郎以下、百名餘りの生徒を率ゐて、上京する事になつた。明治大帝の御跡を慕ふた、乃木大將や、大阪の師團長として、日露戦争に、勇名を轟かした、小川や、又、兒玉のやうな人が、其生徒の中に、あつたのだから、實に面白い。

大村は、少し遅れて、明治二年の八月十日に、京都に着した。木屋町二條下の處に、藩の控屋敷があるので、それを宿舎に宛てあつた。翌日から、地所の檢分に掛かつたのだが、大村の奔走は、實に驚くべき程で一緒に附いて、行つた者さへ、終ひには閉口した位であつた。

伏見を首めとして、宇治、八幡、山崎方面を、蒸すが如き、八月の災天に、鞋掛けて、檢分して歩いたのだから、随分、骨も折れたらう。檢分を終つて、京都へ、再び歸つて来たのが、九月二日であつた。それから、三日間を休養するにして、大概な來客は謝絶して、腹心の者を對手に、調査をつゞけてた。原田は、大村の手傳をして、兵學寮設置の土地も、大凡は極つて、直に着手するまでに、運んで来た。

原田が、歸つた跡へ、藩の大隊司令、靜間彦太郎と、兵部省作事取締の吉富音次郎が、加賀出身で、英學教授方をして居た、安達幸之助を、伴れて来たので、それ等の人を、話對手にして、計畫の事などを、話合つて居るうちに、

酒肴が運ばれた。

大村は、地圖を披げて、一ばい飲んで考へ、考へては、筆を取つて、書入れる、といふやうな工合で、來合はせ
たものは勿論次の部屋に、見て居た従者も、その精力の強いには、唯驚くばかりであつた。

所へ、執次の者が、急ぎ足に、やつて來て、

「此御方様が、御訪ねに、なりました」

名刺を見たが、少しも覺えの無い人であるから、暫く考へて居たが、

「今日は、用事が立て込んで居るから、御目に掛る事は出來ぬ。明日にも、御出て下さい、と言ふて、歸つて貰へ」

「ハイ」

と答へて、執次は、立つて行つた。大村は、次の部屋を顧みて、

「オイ」

と呼んだので、従者が、手を突いて、

「御用で、ござりまするか」

「お前達も、疲れたらうから、一ばい飲んで、寢んだら宜からう」

「有難う存じます」

「其座敷では、氣が詰つていけないから、別の座敷へ行つて、飲みなさい」

「ハツ、それでは、御遠慮なしに頂戴いたします」

「ウム、緩り寢みなさい」

そこで、従者は、離れた座敷へ行つて、酒を飲み始めた。

暮六つに近く、夜色が、迫つて來たから、家來の山田善次郎は、燈火の仕度にかゝつた。

「頼む」

「どーれ」

「大村先生に、御意を得たい」

「先生は、お二階に居られますが、貴下の御姓名は、何と仰せられますか」

「拙者は、斯ういふもので御座る」

名刺を出したから、これを受取つて、山田は、執次に立たう、として、背を見せた時、さつと、抜打に浴せられて、

一と堪りもなく、山田は、そこへ倒れた。

はげしい足音をさせて、二階へかけ上る、浪士體のものが、三四人つゞいた。

大村は、けたまほしい物音に、頭を上げると、途端に、踏込んで來た、二三名の浪士が、刀を下げて居た。眞先に

居たのは、豫て見覚えのある、神代直人であつた。

「ヤツ、神代か」

と、いふ聲も待たずに、

「ヤツ」

と、一步踏込んで、斬付けた。大村は、坐つた儘に飛退いたが、神代の斬込む、切尖激しく、額から小鬚へ掛けて、

ザツクリと、割込まれた。

「失敗た」

と叫びながら、小膝を、立て直して、床の間の刀を、取らうとした所を、飛込んで來た、神代が、横に拂つた一文字、

再び飛退いたが、間に合はなかつた。膝口へ、深く斬込まれて、流石の大村も、尻餅を搦いた。所へ、神代が、三度

目に斬付けたが、此時は、既に大村の手に、小刀があつたので、抜き合はず間はなかつたが、鞘の儘で、ガツチリと

受止めたので、幸に、神代の斬込んだ、三度目の刀は、避ける事が出来た。静間と安達は、此騒ぎに驚いて、すぐ逃げ足になった。裏手は、鴨川に沿ふた、細い路がある。欄干を飛越えて、その道へ飛下りると、此處にも、浪士體のものが、二三人かくれて居て、すぐ斬りつけた。二人は、防ぐ間もなく、それへ倒れて死んだ。

大村を見捨て逃げた、卑怯は、この見苦しい最期となつた。吉富は、流石に感心な男で、刺客の一人、和田進を、斬つて居る。併し、自分も、重傷を負ふて倒れた。和田は、三河の浪士である。

斯んな事が始まつた、とは知らず、別の座敷で、飲んで居た、従者の連中は、座敷の方で、ドタバタ騒いで居るから、何か始まつた事か、と思ふて居る、と、其處へ、風呂番の下僕が、飛んで来て、

『た、た、大變で、ございます』

『何だ』

『だ、だ、旦那様がき、き、斬られました』

『ヤツ、それは一大事ぢや』

と、後は聽かずに、一同は飛出した。折しも、向ふの廊下から、中庭に飛出して、垣根を飛越える武士が、二三人あるから、

『それ、逃がすな』

と、一人の者は、之を追ふて行く。

大村は、斬られて倒れる時、襖が外れて、體が、廊下へ出たのを幸ひ、裏梯子を下りて、湯殿へはいつた。風呂桶の中へ忍んで、僅に最後の襲撃を、遅れた。後の者は、座敷へ戻つて来て、御殿から、大村を、助け出して、介抱に掛かつた。

『如何でござりますか、御怪我は、何うでござりますか』

『ウム、しまふた』

『御傷は』

『斬れたよ』

と、一言、いふた儘、大村は、自分で、繻帯をして居る。其處は、元が醫者であつたから、外の者とは違ふ。其中に、怪者の後を、追ふて行つた者も、歸つて来たが、何れも取逃した事を繰返すばかりで、何の甲斐もなかつた。

『先生、如何でござりますか、御痛みになりますか』

と、聽いても、大村は黙つて、考へて居る。

『唯今、醫者を迎ひにやりましたから、もう追付け、参りませう』

『ウム』

と言ふて、矢張り、黙つて居る。

『怪物の面體は、御見覚えがござりますか』

『よく知つて居る』

『何と仰しやいます。怪者を、御覺になりましたか』

『ウム』

『何者でござりましたか』

『マア、そんな事は、何うでも宜い』

『併し、此儘にして置く事もありませんから、怪者の面體を、御承知だとありますならば、直に取押へなければなりません』

「イヤ、押へる譯にも、なるまいよ」
 「そりや、何故でござりまするか」
 「其仔細は、何れ語る事にしよう」
 と答へて、又もや、思案に耽るのは、何かこれには、深い仔細が、あるらしい。従者も、押して聴く事は止めてしまつた。

所へ、原田一道を首め、其他の者も、駆付けて来る。醫者も、やつて来て、應急の手當もしたが、傷は、存外に重いやうだ。

其頃の京都には、名醫と、稱された人も、澤山に居たが、何れも、舊式の醫者で、斯やうな、重い傷を、受けた揚合には、役に立たない者ばかりだ。殊に、大村は、自身が醫者であつたから、舊式の醫者を信ぜず、その手當を受ける事さへ、好まなかつた。大阪には、西洋醫者の、ポールドといふ、立派な人は居たが、其頃の京都は、異人の遺入る事を、許されて居なかつたから、翌日になつて、大村は、戸板に乗せられて、大阪へ送られた。残暑の酷しい時分であつたから、大阪へ着いた時分には、傷は、化膿して居た。名醫のポールドは、左右の者に、聲を潜めて、

「何うも、致し方が無い。洵に残念な事を致した」
 と、いつた。其一言を、聴いた時、一同の落膽は、一と通りでなかつた。斬られた方の脚を切斷したが、何分にも、手當が遅れて居たので、衰弱が甚だしく、十一月の二十日になつて、大村は、可惜、蓋世の雄才を齎して、此世を去つてしまつた。

大村が、神代の事を、遂に言はなかつた、といふのは、神代は、長州人であつて、攘夷派中、最も過激な奴である。併し、此時に、襲ふて来たのは、何人かの教唆に依つて、來たに違ひない、とは思ふが、それを言へば、長州人同士の内訌を、薩人の爲に、知らるゝ事になるのであるから、大村は、神代の事は、一言もしなかつたのであつた。

大村は、死んだが、兵學寮と、大阪の兵器製造所は、この後に衰つた。陸軍大學校と、砲兵工廠と、これは、大村の賜といふ可きである。

大村の死に依つて受けた、陸軍の損失は、非常なものであつたらうけれども、一番に、失望した人は誰か、といへば、木戸であつた。それが爲に、折角の征韓も、遂に沙汰止みとなつて、更にそれが、明治六年になつて、再度の紛擾を醸して、是が爲に、内閣に、龜裂が入る、といふまでの騒ぎになつたのも、不思議な因縁と、言ふべきである。刺客の處分について、未だ話もあるが、それは略した。

會津藩の苦境

勝が、非戦論を唱へて、踏張つて見ても、慶喜が、其説を入れなければ、行はれる筈はないのだ。所が、慶喜は、常識に富んで、利巧な御方であつたから、早くも大局を見て取つて、勝の説を入れ、上野の大慈院へ、引籠つてしまつた。

三代の家光が、比叡山に擬らへて、東叡山と名付け、寛永寺を建立して、御本坊を、輪王寺と名付けた。宮様を、御一方申請けて、之を法親王と、崇め奉り、代々、それに馴つた。

若し、朝廷と、徳川との間に、確執を生じて、苦しい立場になつた時、法親王の御袖に縋つて、朝廷の御機嫌を、取り繕はう、といふ、豫めの考へがあつて、設けて置いたもので、此處は、徳川が、最後の逃場であつた。

上野の寺中へ引籠つて、慶喜は、謹慎を表して、法親王の御取成で、朝廷へ嘆願をする、といふ筋の一幕は、全く勝の入智恵であつた。

先づ、斯うして置いて、それから更に、西郷へ、面會を申込んで、其使者を勤めたのが、山岡鐵舟である。流石に山岡は、此使命を完うして、三月十三日を以て、勝と西郷が、江戸の薩邸に於て、會見する約束をして、歸つて來た。旗本の中でも、稍や骨のある、連中は、勝の計らひを以て、甚だ不快の事として、そこで、彰義隊なるものが、新

たに組織されて、上野へ、引籠る事になつた。如何に江戸城の受授が済んでも、旗本が、斯ういふ次第で、上野に籠つて居る以上、未だ天下は平定したものと見て、見る事は出来ぬ。彰義隊の解散には、種々、手を盡したが、どうしても、いけなかつた。

彼是する中に、會津中將容保が、奥羽諸州の諸侯を促して、飽迄も、薩長二藩と對抗する、準備を整へた。さうなつて見る、と、江戸の市中に、散在して居る、幾千といふ旗本が、今更に、弱い音を、吹いて居る事は、御直參の肩書に對しても、出来ぬのが當然である。何れも奮發して、戦ひが、此方面に於いて、愈々起きたならば、それに應じて、最後の一戦を試みやう、とする、覺悟の者が、ふえて來た。迎も、此儘に棄て、置いたならば、何んな大事になるかも知れない、といふ所から、大村益二郎が、江戸へ急行して、遂に一日の戦ひに於て、彰義隊を撃攘つてしまつた。

各町々に、散存して居た、幕軍は、何處を當に集まる、といふ事も出来ず、志の固い者は、追々と奥州路を指して、落ちて行く。それが皆、會津侯を頼つて、行くものばかりであつた。

そこで、會津侯を、盟主と仰いで、奥羽諸州の大名が、官軍に抵抗する、といふ注進は、櫛の齒を、挽くが如く、一日延びれば、一日だけの害が、大きくなるのであるから、といふので、愈々、奥羽征討の軍を、起す事になり、總指揮官は、板垣退助であつた。

奥羽諸州の戦ひを、精しく話すと、なか／＼長くなるし、木戸の本傳に、關係の無い事だから、大概にして、置くが、兎に角、會津の落城に就ては、述べて置く必要がある。

奥羽の各藩が職盟したとは、傳へられたが、眞に最後まで、戦つた者は、會津と長岡の二藩であつた。其他の諸藩は、甚だ見苦しい態度を、執つたものもあつた。殊に、仙臺藩の如きは、あれだけの雄藩でありながら、其去就は、極めて曖昧であつた。

板垣の祖先は、甲州の武田家、二十四將の一人、板垣駿河守信形であつた。此人は、天文十年に、信州上田原の戦ひに於て、討死をいたしました。其前晩に、自分の子供を、家來に預けて、後事を託した。其家來が、信形の遺子を連れて、遠州掛川の山内一豊の所へ、頼つて行つた。一豊の家來で、乾備後といふ人が、それを引受けて、育てる事になつたのである。

其子が、成人して後、後繼の無い内に、死んでしまつた。山内家では、板垣家程の名家を、此儘に絶やすのは、如何にも惜しい事である、といふので、一門の中から、山内刑部一照を選んで、板垣家の相續とした。信形の子供は、乾の姓を、名乗つて居たのである。そこで、板垣家は、再興される事になつた。系圖の上からは、板垣の末葉であるが、血統の上から言へば、山内の血族と、言ふても然るべきである。

板垣は、後に政治家になつたが、若し、彼の人が、軍人として、一生を送つたら、無論、元帥になつて居たらう、と思ふ。板垣は、總指揮官となつて、各藩の大兵を率ゐて、會津征伐に、出掛けて行つた。策戦は、着々成功して、到る處、疾風、枯葉を捲くが如く、戦ふ毎に、勝利を得て、だん／＼進んで行つて、愈々、會津城へ、總掛りになつて、攻め付けた。

一一

板垣の率ゐた兵が、會津へ攻めかゝる前に、三春藩の事に就て、面白い逸話があるから、それを一寸、述べる事にしよう。

當時、三春藩を首め、極く小さい大名が、何れも去就を、決し兼ねた、といふのは、何しろ、會津を主として、長岡も、それに應じて、官軍に、對抗して居るので、それが爲に、小藩の去就が、甚だ曖昧であつた。官軍に抵抗するのは、辛い事であるが、さればとて、目と鼻の先にある、大藩に反對して、官軍に附く、といふのも、難儀の大策である。何とかして、都合よく其間を、切り抜きたいと、いふやうな、所謂、首鼠兩端を持して、曖昧の態度を、取つて居るものが、多くなつたのだ。

官軍の方では、錦の御旗を掲げて、進んで行くのであるから、少しでも曖昧な、態度を取る、藩があれば、朝敵として、攻め付ける。場合に依つては、後日に、恐ろしい御沙汰も下る、といふやうな事も、言ふて聽かせるので、大概な藩は降伏して、官軍を迎へるやうな事にはなつたが、中には、今こそ、官軍が、此勢ひで居るが、今後、果して何ういふ風になるか、といふ事に、疑ひを有つて居て、未だなか／＼、去就を決しない藩もあつたのだ。

即ち、三春藩の如きも、其一つであつた。殊に、藩主が幼少で、伯父に當る者が、後見職をして居たのであつた爲に、何うしても、去就を決する事が遅かつたのが、其時に、三春在の豪農で、なか／＼の舊家であつた所から、代々庄屋を、勤めて居た、河野某の件、廣中が立つて、藩主の代理に面會して、順逆の道理を説いた。是が後の河野廣中である。

その時に、廣中は、僅に十九歳の一青年であつたが、到頭、藩の重役を動かして、官軍に歸順する、といふ事に、極めさせてしまつた。所が、茲に一つ困つたのは、今まで、曖昧の態度を、取つて居た事である。官軍の方では、三春藩に對し、何處までも、朝敵としての扱ひをして來る、といふ風説が、立つて居るので、今更に、歸順した所で、後日の御沙汰が恐ろしい、といふやうな、疑懼の念を、懐く者もあつた。それを聞いて、廣中は、

「宜しい。さういふ次第であるならば、拙者が代つて、官軍の大將を、説く事にしやうから、相當の資格を、與へて呉れ」

といふ事を、申出た。そこで、廣中は、三春藩の代表者として、官軍の陣へ、談判に行く事になつた。

板垣は、三春藩が、歸順を申込んで來た、といふので、兎に角、其使者に、面會する事になつた。會ふて見ると、意外の感に打たれたのは、眉目清秀の一青年が、藩の代表者として來たのであるから、「斯んな小僧が、何ういふ譯で、

藩の代表をして来たのか。頗る疑はしい」とは思つたが、段々、話し込んで見ると案外にも、青年の言ふ所が、條理整然として、一點の疑議を、挿む隙がなかつた。

板垣に向つて、廣中が、斯ういふ事を、言ふたのである。

『三春藩が、今日まで、歸順の意を、明かにしなかつたのは、藩主が、未だ幼年であつて、前後の分別がない。それが爲に、後見職になつて居た者が、藩臣の間を、纏める爲に、彼是して居たので、時日が遷延したゞけの事であつて、歸順するといふ事は、初めから極まつて居たのだ。所へ、官軍が、進んで来たのであるから自然、其旨を屈出でるのが、遅くなつたのである故、其儀は、御赦しを願ひたい』

と、いふのであつた。

板垣は、只見る、一箇の若衆としか思へぬ、一青年が、辯舌も爽かに、何の恐れ氣も無く、官軍の陣門に来つて、見だけの説を述べるのは、如何にも感心の次第である、と思つて、縱令、藩の態度に、今迄に何うあらうとも、此一青年に免じて、三春藩を救つてやらう、といふ考へになつた。然るに、廣中は、尙進んで、

『就きましては、三春藩に對しまして、後日、朝廷の御叱りが、ありませぬやう。貴下から、然るべく御取成しの儀を願ひたい』

と、言ふので、板垣は、益々感心した。廣中の乞ひを容れて、三春藩を、救ふ可く約した。併し、板垣も、然る者であるから、

『それ程に、お前の方で、朝廷へ對して、歸順の意が、最初から、あつたのであるといふならば赤心を現はす證據として、會津征伐に就て、先手を承はれ、それが出来ぬ以上は、今までの誠意も、認める事が、出来ぬやうにならう』と言つたら、廣中に、即座に答へた。

『宜しうござります。其仰せは承知仕つた』

三春藩は、愈々歸順して、官軍の先手となつて、會津城へ、攻め掛かる事になつた。明治六年、板垣が、政府を退いて、民選議院設立の建白で、騒ぎ出した時分に、廣中は、國許に居て、中央へは、出て来なかつた。それを説付けたのが、筑前の頭山藩であるから、話は益々、面白くなるのだ。當時の頭山は、自由民権の議を、主張した人であつて、全國周遊の時、三春に立寄つて、河野に面會した。其時に、河野と板垣の關係を知つて、頭山が、諄々として、河野を説いて、

『維新の際に、それだけの關係を、有つて居た、板垣は、今や、藩閥政府を倒さう、といふ爲に、民選議院設立の建白をして、自由民権の爲に、遊説して居るのだ。此場合に、お前が、板垣を助けない、といふ法は無いのだから、是非、中央へ出て、板垣と共に、進退を同じうせよ』

といふ、勸告をしたので、河野も、其氣になつて、乗出して来た、それが、國會請願者として、河野が、人に知られた原因である。

二二

會津藩が、如何に強くとも、朝敵の汚名を、蒙つた上に、而も、目に餘る官軍が、四方から包圍して来たのでは、何うする事も出来ない。縱令、連戦連勝の勢ひが續くとしても、限りある兵力を以て、長く其勢ひを保つ事は、決して出来ぬ。況して、一勝一敗は、戦ひの常であつて、勝ちつゞけても、長く續き得ぬ、兵力が、或は勝ち、或は敗けたりして居たならば、日に益々、力が衰へて行く、といふのが、自然の理である。

尤も、長岡藩が、非常な働きをして、官軍を、惱まして居たから、越後口から、攻込んで来る、官軍を防ぐ事は、長岡藩の努力に依つて、辛うじて、出来たのである。けれども、河合繼之助が斃れて、長岡藩は、總潰れになつた。頼みに思ふ、長岡藩の連中は、會津へ落ちて来る、といふやうな事になつて、今や會津藩は、天下の大兵を引取けて

籠城するの外はない、といふ、悲境に陥つてしまつた。
 河合に就ても、話せば長くなる。今は、それを物語つて居る場合でないから、略して置くが、當時の河合が、目に餘る、大軍を引受けて、越後口に、官軍を防いだ時の武者振は、千古に傳ふべき程、立派なものであつた、越後口から進んだのが、山縣有朋であつた。長岡藩の、頑強な防戦には、殆ど持て餘したといふことである。
 河合程に、戦争の大局に就て、活動はしなかつたが、桑名藩から、落延びて來た、立見尙文が、何時の戦ひにも、官軍を苦しめた、といふ事も、傳へて置く。當時、立見は、二十歳になつた位の、若者であつたが、戦さの巧かつた事は、實に驚くべきほどで、河合と、東西相應じて、官軍を挾撃つて、屢々、山縣を苦しめたのである。
 或時の戦ひは、山縣は、十分の勝利を得て、先づ一息と、參謀を率ゐて、草原の上に、休息して居た。其隙を窺ふて、一旦破れた、立見が手勢を率ゐて、俄に逆襲して來た。其勢ひの激しかつた事は、阿修羅王の暴れたるが如くて、流石の山縣勢も、是が爲に、散々の敗北を遂げて、山縣は、生命からく、逃げ去つた。所が、休息して居る時に、飄箆の酒を注いで、飲んで居た。それを、逃げる時分に、飄箆だけは放さずに、持つて逃げたが、肝腎の刀を、置いて行つた。といふので、立見が、明治政府に仕へてから、山縣に會ふと、其時の事を物語つては、
 『貴下も、あの時の逃足は、實に早かつた。殊に、腰の物を置いて、飄箆だけ握つて逃げたのは、なか／＼美事なものでござつたよ、ハツハツハー』
 と言ふて、嘲弄する事が、屢々であつた。見が爲に、長州派の軍人に、ひどく睨まれて、立見の出世が遅くなつた。されば、立見は、明治政府に、なつてからも、軍隊に這入り得ず、裁判所の役人になつて居たのだ。戦さをさせたら、日本一と、日清戦争の時に、外國人から稱讃され、横濱のメーブル新聞では、世界第一の用兵の大家であるとして、激賞した位であるが、裁判官になつては、何うにも、しやうがない。僅かな月給で、毎日裁判所へ出ては、コンコン働いて居た。或時、役所を退けて、宅へ歸らう、とする途中、神田の眼鏡橋まで來ると、馬に乗つて、やつて

來たのが、紀州出身の津田出と、いふ人であつた。
 此人は、紀州西郷と、言はれた位で、其晩年は、甚だ振はなかつたが、陸軍省が、出來た當時、津田の勢力は、非常なものであつて、流石の大西郷でさへ、津田の意見を聽いて、軍政の改革をした、といふ位に、陸軍の智囊と、言はれた人であつた。
 津田が馬に乗つて、通り掛かると、町の向ふ側を通るのが、何うも、立見に、よく似て居るから、馬を止めて、チツと、見て居ると、立見は、帽子を、深く被つて、面を背けて、行き過ぎやう、とした。見詰めて居た、津田は、早くも、それと知つて、立見の傍に進んで、
 『オイ、立見ぢやないか』
 聲を掛けられて、流石の立見も、眞赤な顔をして、
 『イヤ、津田か、暫くぢやつた』
 『暫くぢやない。君は、何うして居るのだ』
 『何うして居るつて、矢張り役人を、やつて居るのぢやよ』
 『此頃、聞いたのでは、裁判官をして居る、といふが、何で、そんな詰らぬ事を、やつて居るのだ』
 『別に、さういふ事を、したくもないが、政府が、それだけにしか、買つて呉れぬのぢやから、致し方がない。ハツハツハー』
 『俺が、心配をするから、一兩日の中に、是非、邸へ來て呉れ』
 『ウム、其中に行く事にしやう』
 其日は、これで別れたが、それから、津田が、心配を始めて、到頭、陸軍へ、立見を、入れる事にした。裁判官としては、一文の値打も無いが、軍人としては、大層な手腕があつたのだから、見る／＼中に、大佐にまで進んだが、

それから上には、何うしても、昇れなかつたのだ。そこで、陸軍部内の、口の悪い連中が、一生大佐といふ、名を付けた。立見も、是で一生を終るつもりで、覺悟はして居たが、時なるかな、明治十年の西南役に、出征を命ぜられた。其際に、功名をして、凱旋の後、少將に進んだ。日清戦争の際には、朔寧枝隊を率ゐて、元山津から大同江まで、非常な、險阻を冒して、駆付けた。其時に、丁度、大島義昌が、混成旅團長として、苦戦に踏り、今や討死をしよう、といふ揚合であつた。長岡外史が、參謀長であつたが、殆ど策の施すべきなく、大島と共に、戦死といふ覺悟をして居た。所へ、立見が、乗込んで来て、此苦戦の中から救ふて、敵軍を追散らしてしまつた。

斯ういふやうな事が、幾度か續いて、中將に進み、其後、日露戦争の際に、營口の一戦に、あの大道襲を受けながら、露軍を撃退して、其策戰の巧妙を、世界の武官にまで知られ、凱旋の後には、大將に進んで、今は、故人となつてしまつた。

此立見と、河合の二人が、踏張つて居たので、越後口の官軍は、一步も進むことが出来なかつた。又、板垣が、會津の城一つを、持餘して、長い間、戦つて居たのは、是が爲でもあつた。

四

會津城は、武家天下の時代には、五名城の一つに數へられて、黒川城の昔から、戦記の上に於ては、名のある城であつた。四方、山に包まれて、奥州の一隅に、偏在して居た爲に、一般の人氣は、質朴で、土風も、極めて堅實であつた。輕佻浮華の調子が無く、従つて、武藝の修練にも深い嗜みがあり、殊に、會津の槍組といふては天下に名のあつたもので、當時の諸藩を通じて、會津の武士といへば、なかく、強い者として、評判されて居た位である。

徳川宗家とは、姻戚の關係があつた所から、會津侯は佐幕の意見を固執して、薩長二藩とは、奮闘をつづけた。其心は、藩士の間にも傳はつて、藩主と、生死を共にするの志は、實に堅いものがあつた。

愈々、徳川が、江戸城を明渡し、慶喜は、水戸へ引退つて、謹慎を表する、となつた後までも、何とくして稱譽を挽回しやう、として、苦心の末、奥羽諸藩の聯盟を計つて、仙臺の如き大藩が、腰元危く、官軍に、降伏したにも拘らず、孤城を守つて、天下を對手に、戦ひを續けた。此一事は、理窟を外にして、痛快、壯烈の極みであつた。

密に、藩主と藩臣の間ばかりでなく、童幼婦女の末に至るまでも、皆其心になつて、よく奮闘を續けて居たのである。されば、板垣が、いかに戦さ上手であつても、正面からは、攻落し得なかつた。幸ひにして、河野廣中が、先導を勤めて、會津城の搦手から、間道を廻つて、火を放けたから、さしもに強かつた、會津兵も、兜を脱いで、降らねばならぬ破目に、陥つて了つた。

當時、白虎隊と稱して、青年の一團があつた十三四歳から、二十歳位までの、青年を以て組織された、兵團であるが、父や兄と、志を同じうして、最後まで奮闘して、愈々、城を開かなければならぬ、といふ場合になつて、憤慨の極、飯盛山へ登つて、未だ前途のある、青年が、枕を並べて、自刃して相果てた、といふやうな事は、千古に傳ふべき、壯烈な軍物語であらう、と思ふ。今も猶、劍舞や詩吟に使はれて、會津の白虎隊といへば、誰でも知つて居るのが、即ちそれである。

或は、藩士の妻女が夫の討死した後に、猶ほ生残つて、恥を晒すやうな事が、あつてはならぬ、といふので、壁間に、辭世の歌を止めて自刃した、とか、母や子供を、自からの手に掛けて、其場を去らず、自殺したといふやうな、健氣な婦人もあつた。斯うした心を、有つて居た者が多かつたから、會津の籠城は、あれまでに續いたのである。

順逆の道から論じて、會津藩を、朝敵として扱つたが、今にして之を思へば、會津藩士は、實に武士の中の武士として、稱讚すべきものがあつた。

會津藩が、官軍に抵抗したのは、何處までも、朝廷の御意に背く、といふ考へではなかつた。たとへ、錦の御旗を掲げ、朝廷の名に依りて、攻めて來ても、それは、薩長の二藩が、奸智を以て、朝廷を、欺き奉つて、斯ういふ事に

したのであつて、朝廷の御眞意は、茲に無いのである、といふ事を、飽までも信じて、奮闘をつゞけたのであるから、會津藩が、是までに戦ふた、といふだけの事のみを以て、純粹の朝敵として視るのは、間違つて居る。

會津侯が、城を開いて、官軍に降伏を決した。手代木直右衛門が、その名代として、板垣の許へ、通じて来たので、板垣は、手代木に面會して、開城の手續を運ぶ迄になつたが、茲に一つ困つた事は、是程の名城を、受授するのには、それぞれの式がある。それを、心得て居て、完全に、手續をなし得るものが、果して有るか、どうか。又、會津侯は、是までに戦ふて、朝敵の名は、受けて居ても、退いて考へて見れば、徳川宗家の爲に、最後の氣を吐いて、自分の名利を、擲つて掛かつた、のであるから、その志に對しては、板垣と雖も、同情して居たのである。従つて、城の受授に就ても、冷酷な取扱は出来ぬ。緩嚴、その宜しきを得て、充分に、禮儀を盡してやり度い、とは思ふが、實は、適當な人が無いのに、苦しんだのである。

時に、薩藩士の中村半次郎が、板垣に會ひたい、といふて来たので、すぐに面會する、と、

「城の受授は己どんが引受ける」と、いふのであつた。

けれども、中村は、戦陣に臨んでこそ、萬夫不當の勇者であるが、果して、城の受授に就て、適任の人であるか、何うかは、甚だ疑問であつた。派石の板垣も、躊躇して居る、と、中村は、

「是非、自分に、遣らせて呉れ」と言ふので、據所なく、許す事になつたが、板垣からは、充分の注意を與へて、冷酷の取扱を爲ぬやうにといふ事だけは、言ふて置いた。

然るに、中村と共に、副使のやうな、役目を以て行つたのが、豊後の竹田出身で、山縣小太郎と、いふ人であつた。是が後に、廣瀬中佐を、あれだけに、育て上げた人物であつて、學問に深く、武家の故實にも、通じた人であつたから、中村の及ばざる所は、山縣が補ひ、文書の上の事は、山縣が、すべて引受たから、城の明渡は、少しの滞りもなく済んだ。

中村の態度は、實に堂々たるものであつたが、同時に、寛嚴、宜しきを得て、弛める所は弛め、締める所は締めて、立派に式を終つた。會津侯は、菊一文字の短刀を贈つて、中村の情ある取扱ひに報いた、といふ、美談もあるが、中村は、後の桐野利秋である。兎に角、會津侯は、深く謹慎して、朝廷の御沙汰を、待つ事になつたが、此始末から、考へて見れば、何うしても、會津藩は取潰されて、藩主は、嚴罰に處せられる、といふのが、順序になつて居た。茲に於て、藩臣の中でも、段々心配する者があつて、せめては、會津の家だけを遣したい、といふのが、藩士を擧げての希望であつた。其中の一人、秋月梯次郎が、東京へ乗込み、要路の大官に會ふて、藩主の爲に嘆願をしやう、といふので、唯一人、密に會津を遁れて、東京へ出て来た。

五

徳川の親藩として、其存亡を、共にす可き、深い關係のあつたものは、實に、會津藩ばかりではなかつた。將軍の繼嗣が絶えれば、直に入つて、其繼嗣となるべき資格を有つて居た。御三家、御三卿なるものが、第一に腰を突いてしまつて、宗家に背いたのだから、酷いものだ。理窟の上からは、大義名分の爲に、止む事を得ない、とも言へやうが、併し、情の上に於いて、宗家を見棄てしまつたのは、決して感心の出来る事ではない。さうした、不人情な、親藩あるのに、會津藩が、獨り毅然として、飽までも、薩長二藩の壓迫に反抗して、戦ひを續けたのは、會津一流の片意地からだ、と言へば、それまでの事であるが、武士氣質の上から見れば、當然、履むべき道を、履んで来たものとも、言へるのである。

併、天下の事は、成敗を以て、定まるのである。勝利の地位を占めた、薩長二藩は、朝廷を擁して、天下の大

權を、握つて居るのだ。之に反抗して、長い戦ひを續けた、會津藩は、朝敵の名を以て、取潰されるに、極つて居る。會津侯が、大決心を以て、奥羽諸侯の聯盟を計り、さうして、矢弾も盡きれば、糧食も絶えると、いふまでに、戦ひをなした以上、其位の覺悟は、固より有つて居たに、違ひない。戦ひに敗れたから、といつて、泣言は、いふまいが、それは、藩主としての、會津侯の心であつて、藩臣の身としては、徒に腕を組んで、主家の滅亡を、見て居る事は出来ぬ。茲に於いて、主家を救ふべく、密に國許を忍び出て、それぐの筋を辿つて、哀訴の手續をする者も、少くはなかつた。

秋月は、廣澤富次郎、手代木直右衛門の二人とも相談して、單身、東京へ、乗出して來たのだが、誰を使つて、何ういふ風にして、主家の存續を圖らう、といふやうな事は、成算が立つて居なかつた。

徳川將軍家の膝下として、二百五十年以上も、太平を保つた、江戸の城は、今や、朝廷が、自から治す所となつて、何時の間にやら、帝都は、此處に移されて、東京と改稱されて居たのだ。ホンの瞬をする、瞬間の差ではあつたが、秋月も、東京へ、乗込んで來て、見る物、聞く物、何一つとして、感慨の種ならざるはなく、思へば思ふ程、残念な次第である、とは思ふが、今は、如何とも致し方なく、時世と、あきらめる外なかつた。

先祖以來の、宗家を振棄て、朝廷へ歸順といふ、耳ざりのよい、名目の下に、自家の存立を圖つた、三家三卿を見れば、唯、家名が残つた、といふだけの事で、新しい政府に對しては、何等の權能も、有つて居ないのだ。切めて、これに續つて、主家の再興を謀らうか、とも思つたが、是は、手を盡して、見るまでもなく、流石に、智慧の秋月と、言はれた程の、梯次郎の胸には、駄目だといふ事が、すぐ判つた。段々、人の噂に聞き、又、自分の見た所から、分別して見ても、舊縁のある、諸侯の手に續つて、何うするといふ事は、寧ろ考へぬ方がよい、と氣がついた。さうして見れば、薩長二藩の人に續つて、哀訴するの外は、無い事になる。けれども、會津藩の、今までの立場から、考へて見ても、それはしたくない。元來が、薩長二藩に對する、反抗から起した、軍だ。それが爲に、天下を騒がしてあれ

までの戦ひはしたのだが、一敗、地に塗みれて今は、悲惨な態に、陥つて居る。其藩臣ともあらう者が、如何に主家を、大切に思へばとて、不倶戴天の仇敵にも等しき、二藩の人の手に依つて、主家を救はう、といふ考へには、何うしてもなれなかつた。といふて今の天下の有様から言へば、何うしても、其外の手段は無いのであるから、秋月程の人も、殆ど途方に暮れて、薄暗い宿屋の、窓の下に、焦悶、煩悶して、日を送るのであつた。

長い間、降り續いた雨が、今日は、偶々晴れて、煌々するやうな、強い日の光が、窓から、射込んで來る。柱に凭れて獨り拱乎として居た、秋月は、思はず、頭を上げて、窓の方を、ヂツと、見て居る。所へ、這入つて來たのが、宿の主人だ、逗留が長くなつたので、主人とも懇意になつて、時折は、碁などを圍んで、樂む事もあつた。

「エー、御退屈様でござりませう、今日は思ひの外の上天気で、丸で拾物をしたやうでござります」

「オー、御主人か、如何にも今日は、好い天氣ぢやな」

「今日當りは、市中の御見物を、遊ばしては如何でござりますか」

「左様さ、餘り引籠つて居るのも宜くないから、今日は散歩にでも、出掛けて見ようか、と、實は思つて居た所ぢや」

「エー、御都合に依つては、私が、御案内を致しても、宜しうござります」

「そりや、御親切の事で、獨歩きよりは、却て對手のあつた方が、宜い。別に御差支が無ければ、御案内を願はうか」
「へい、宜しうござりますとも、何うせ、私が、宅に居つた所で、用をする譯ではなし、一切、家内と番頭に、委せてあるのでござりますから、却て私の居りませぬ方が、家の者は、喜んで居る位でござります。詰り申せば、邪魔者でござりますからな、ハツハツハ——」

流石に、商賈柄とて、如才がない。一つには、秋月の人品が、如何にも立派であるから、由緒ある人と見て、何れかの藩中に、重い役を、勤めた御方であらう、と、深く心に信じて、幾分は、崇敬の念を、有つて居たに、違ひない。

六

軀みづかて、秋月あきづきは、身支度みじだてを整ととのへて、

「サア、御一緒ごいっしょに参まゐらうか」

「ヘイ、それでは一寸、手前てまへも、支度しだてを致いたして参まゐりますから……」

「ウム、拙者ちつしやだけの、支度しだてが出来できても、案内者あんないしやの支度しだてが出来できぬては、困こまるのう」

「直ただてございますから、一寸、御待ごまちち下さいまし」

主人あるじは立つて、降りて行く。間まもなく、下女げぢよが、やつて来て、

「御客様ごきゃくさま、旦那だんなが、御待ごまちち申まをして居ゐりますから、御出ごいでて下さいませ」

「オー、左様さやうか」

是これから、秋月あきづきは、降りて来る、と、上あり框かまちに、腰こしを掛かけて、主人あるじは、待まちつて居ゐるのだ。

秋月あきづきが、泊とまつて居ゐた、宿屋やどやは、神田かんだの淡路町あはぢぢやうぢやうで、餘あまり上等じやうとうの家うちではなかつた。固まより世よを忍しのぶ身みの會津藩士あづまはんし、秋月あきづき次郎じやうと、知しれては困こまる事情じじやうもある。無む論ろん、變名へんみやうで、泊とまつて居ゐたには違ちがひないが、何事なにごとも、それそれに準じゆんじて、質素しつそを旨しとして居ゐたのであるから、宿やどの主人あるじには、さうした大切たいせつな、用事ようじの爲ために、來きて居ゐる、立派りつぱな人ひとだ、といふ事は判わから

いが、世よの變遷へんせんに連つれて、斯かういふ落目おちめになつた、武士ぶしの果はだ、とは、想像さうぞうして居ゐたのである。

「旦那だんな、何處どこへ、参まゐりませうか」

「左様さやうさ、何處どこに、致いたさうかな」

「全體ぜんたい、旦那だんなは、御言葉ごことばから考かんがへても、奥州あづちうの方かたとは心得こころえますが、江戸えどの事は、御存ごぞんじなのでせうな」

「左様さやう、少しは心得こころえでも居ゐる」

「餘あまり御尋ごたづね申まをすも、失禮しつれいと存ぞんじて、控ひかへて居ゐりましたが、矢張やはり、旦那だんなは、徳川とくがわ様の御盛ごさかんな時分じぶんには、槍やりを持もたせて、エー避よれつてな事を、仰おほしやつて歩あいた、御身ごみ分ぶんで、ございませうな」

「イヤ、それ程ほどの身分みぶんでもないが、矢張やはり刀かたなを差さして、歩あいたのぢや」

「さうでございませうとも、一寸見みましても、直ただぐ判わかりますからな、其時そのじぶん分に、江戸えどの方かたへ、勤つとめて御出ごいでてになつた

事ことも、あるのでございませう」

「半年はんねんや一年いちねんは、其時そのときの都合ごうあつで、居ゐた事こともあるが、大概たいていは、邸内やしちちで、日ひを暮くし、餘あまり外そとへ出でなかつたので、市街いちがひの様よう子こは、一向いかう暗くいのぢや」

「左様さやうでございませうか、それならば、上野うへのから向島むかうじまの方かたへ抜ぬける事こととして、其間そのあひだには、浅草あさくさの觀音くわんおん様さまもございませうか

ら、御参詣ごさんけいをなすつたら、如何いかでございませう」

「ウム、それが宜よからう。さういふ風ふうに、案内あんないを頼たのむ」

そこで、宿やどの主人あるじが、頻しきりに町々まちまちの事ことに就つて講釋かうしやくをしながら、段々だんぜん、やつて來た。はや、上野うへのの廣小路ひろこうぢへ來る、と、

正面しょうめんに見えるのが、山玉臺さんぎやうだいである。もう一歩いっほで、三橋はなはしへ掛かからう、といふ所ところであつた。

舊式きうしきの江戸見物えどけんぶつでも、新式しんしきの東京見物とうきやうけんぶつでも、大概たいてい、地方ちほうから來る人は、上野うへと淺草あさくさへ行くことに、誰たれが極きめたとも

なく、さうなつて居ゐる。花時はなじ分ぶんならば、向島むかうじまといふ事こともあるが、其他そこのの季節きせつでは、向島むかうじままで足あしを延のばす者は殆ほとんど無い。

未だ其頃そのころには、上野うへの山内やまうちが、今いまのやうに、公園こうえん地風ぢふうにはなつて、居ゐなかつたが、其代そのかたりには、大樹おほきが鬱蒼うつそうとして、

畫尙ゑいじやうは暗くく、何なんとなしに幽邃ゆうすいな、眺めはあつたのだ。幾いくら官軍くわんぐんの勝利しょうりとなつて、帝都ていとが江戸えどに遷うつり、名なこそ東京とうきやうと改あらまつても、三百年さんひゃくねんの間に、注つ込まれた、徳川とくがわ様が有難ありがたい、といふ頭あたまは、なか／＼に變からない。東照宮とうしやうみやうが、上野うへにある、

といふので、一層いちじやう、江戸えどつ子の足あしは、其方そのほうに向むかひのだから、自然しぜんと、地方ちほうから來る者ものも、いざ見物けんぶつとなれば、上野うへへ

行いつて、それから、淺草あさくさの觀世音くわんせおんへ、參詣さんけいに行く、といふのが、先まづ一般いぱんの慣なひに、なつて居ゐたのだ。

秋月は、江戸詰の時分に、屢々、上野へも来たし、淺草の方へも、廻つた事はあるが、斯ういふ風に、時勢が一變してから、上野へ来るのは、初めてであるから、一旦、國を失ふて、他國へ走つた人が、又、故國へ、歸つて来て、昔の風物に接して、何とも言へぬ、感慨に打たれた、といふのと、同じやうな感じを以て、山玉臺の方を、ヂツと、見上げて居る。徳川全勢の時に、輪奐の美を極めた、吉祥閣は、哀れ、彰義隊の一戦に、煙となつてしまつた。纒に、黒門の太い柱には、彈丸の撃込まれた孔が、無數に穿いて居る。

「旦那も、御承知でございませうが、是が三橋でございませう。彰義隊の戦の時には、私も、見に参りましたが、大層な事てございませうよ」

「フ、ム、お前は、態々、あの戦さを、見に来たのか」

「へい、そりやア、何と言つたつて、徳川様の御旗本が、もう今日限りといふ、戦さをするんでございませうもの、江戸つ子の、身に取つちやア、何んなに、胸を恟かせたか、知れやしません」

「して見ると、お前も、徳川眞か」

「エイ、別に徳川眞と、いふ譯でもありませんが、それでも、官軍なんぞが、肩へ錦の布を、付けて、威張つて来た時には、癢に觸つて、遠くの方から、草鞋を打付けてやりませうよ」

「お前は、なか／＼元氣な事を言ふ。今のやうな世になつて、そんな事を言ふて居るのが知れる、と、飛んだ目に遣ふから、決して戯談にも、さういふ事は、言はぬが宜いぞ」

急に氣が付いたやうに、宿の主人は、口を押へて、周圍を見廻した。幸に通る人も無いので、

「本當に、さうでございませう。此處へ来る、と、口惜しくなるもんですから、思はず官軍の事を、悪く言ふやうに、なつちまうんで、ペラペラと、やつちまひました。併し、旦那、彰義隊は、強いもんでしたな。あれだけの官軍を、前に控へて、斯んな小ぼけな、山と云へば山ですか、實ア、地面の溜みたやうなもんでさア、この狭い所に立籠つ

て、一日の間、官軍を困らせたんですから、今から思つても、強いものですなア」
「お前のやうに、言ふて呉れる者がある、と、徳川の爲に死んだ、忠義な武士の魂も、浮はれるといふものぢや」
所へ、何處で飲んだか、岡部六に酔ばらつた、官軍の兵士が七八人、濁聲揚げて、流行歌を唄ひながら、やつて来るので、秋月は、密と、路を避けて、其後から附いて、上野の山内へ、這入つて来た。

七

此間の戦ひに、踏み荒されたまゝの山内が、大分取片付けられて、綺麗にはなつて居るやうなもの、何處となく、血腥い風が吹いて、悲惨の趣がある。纒に兵火を免れた、寺院も、門や塀には、銃丸の撃込まれた迹が、残つて居るので、當時の戦争が、如何に激しかつたか、といふ様を物語つて居るやうにも、思へる。幕府の最後に、氣を吐いた。彰義隊の、強者の靈魂を、慰むる者もある、と見えて、昔の山玉臺の後に、型ばかりの墓がある。線香の煙が、咽ぶやうに、立上つて居るのは、流石に、暴威を振つて居る、薩長二藩から出た、役人の力でも、制する事が出来ぬ、と見える。

秋月は、暫くの間、其前に佇んで、合掌した儘、口の中で、何かムグ／＼、言ふて居る。脇で見て居た、宿の主人は、不思議に思ひながら、秋月の顔を、覗き込むやうにして見る、と、頬の邊りに、涙が傳つて居るから、偕は、此人は、泊つた時から、大概さういふ身分の人だらう、と思つた通り、矢張り、徳川様の家來に、違ひない。言葉の訛りが、奥の人のやうだから、事に依つたら、會津藩邊りの人ではないか、と思ひながらも、尙ほ其様子を、見て居ると、臆て、秋月は、二度、三度、頭を下げて、體の向を變へたので、宿の主人と、顔を見合せた。

「オー、お前、未だ其處に、立つて居つたのか」

「へい、旦那が、動かないのですから、私も、動く事が出来ませんから、矢張り、拜んで居りました」

「お前も、拜んで呉れたか」

「へい」

「何うか、此先とも、家業の合間には来て、拜んで下さい」

「宜しうございますとも、そりやア、旦那が、さう仰しやらないでも、終始參つては、拜んで居るのでございますから……それにしても、旦那は、彰義隊の御方に、何か御身寄の者でもあるんでございますか」

「別に身寄と、いふほどの者は無いが、同じ流れを汲んだ、徳川の家來ぢやからね」

主人は、手を拍つて、

「さうでございますか。私も、大概そんな事だらう、と思ひました。何でも、貴下様は、徳川様の御家來で偉い御方だな、と、私も思つて居りました。矢張り、さうでございますか。よく、それでも、私に打明けて、徳川様の御身寄だ、といふ事を、仰しやつて下さいました。有難うございます」

唯聞けば、何の事もないが、徳川の流れを汲んだ、武夫だ、といふ事だけで、宿の主人には、何れ程、有難く聞えたのか、判らない。秋月は、之を思ふに付けても、徳川が、二百五十年の太平を保つて、江戸の町人に興へた、御恩澤は、斯んな下々の者にまでも、浸込んで居るが、今は滅亡にも等しい、御宗家の徳を慕ふて、徳川の家來だ、と言、名乗つたばかりで、斯んなに嬉しがられる。町人の心には、存外に嬉しい所がある。それに付けても、先祖以來、徳川の食祿を食んで居た者や、御親藩の中に、宗家の滅亡を、他處に、一身の安全を、圖つた者のあるのは、苦しい事である、と、復び無量の感慨に打たれて、秋月は、思はず、足を止めて、立つて居ると、

「ネー、旦那、斯うして立つて居ても、仕様がありませんから、彼處の腰掛で、一服やることにしやうぢやございませんか」

「ウム、それが宜からう」

葎藤張の掛茶屋があるから、それへ這入つて、暫く休息する事になつた。

秋月が、此處へ休む前から、四五人連の町人が、休んで居た。銘々に、大きな飄箆を、下げて來たのは、花見時と違つて、時候外れの感はあるが、餘程、酒好きな連中が、申合はせてのブラ／＼歩き、東照宮參拜の歸りに、息やすめの酒宴を、やつて居るらしい。

「ネー、源兵衛さん」

「何だね」

「何と言つたつて、權現様は、有難いね」

「そりやア、さうだとも、今更、お前さんが斷らなくたつて、昔から有難いものに、極つて居ませア」

「オヤ／＼、妙に喧嘩腰で、御出でなすつたね」

「別に、喧嘩腰つて譯ぢやないけれど、今更のやうに、權現様を有難がるから、少し穢に觸らアね、ハツハツハー」

「成程、此奴ア、さう言はれても、仕方が無いね。權現様の有難いのは、昔から極つて居るんだ。アツハツハー」

其中の一人が、口を容れて、

「源兵衛さんや、又吉さんは、權現様の有難いよりは、此飄箆の方が、有難さうだぜ」

兩人は、一時に手を拍つて、

「成程、此奴ア一番當てられたか。アツハツハー」

八

今も今とて、亡き彰義隊の、強者の後を弔ふて、散々、泣いて來た、秋月は、此腰掛に、休んで居ると、又、徳川鼻眞の、江戸ツ子に、泣かされるのであつた。

「時に、又吉さん、私達にやア、御上の事ア解らないが、何うです、會津様は、何うなるだらう」
 「さうだね。何うなるか判らないが、何でも、人の噂ぢや、會津様は、取潰しになる、といふ事だ」
 「へ、一、そんな譯ですかね。そりやアさうかも、知れないね。あれだけの戦さをしたんだから……、官軍が、幾ら強い、と言つたつて、會津様を、持餘したんだからね。其憎しみでも、取潰し位の事にやアなるだらうよ」
 瓢箪の冷酒を、互に酌をしながら、飲合ふて居る。散歩に疲れた、空腹の加減でもあらうが、もう大分、酔が廻つて居るだけに、周圍憚らずの高調子になつて、居るのだ。源兵衛と、呼ばれて居る人は、一番に年を取つて居るので、其話振にも、分別臭い所がある。

「マア、斯んな事を、大きな聲で、話す事も出来ねいが、私なんぞの考へぢや、會津様が、あれだけに戦つたにもしろ、そりやア、心から朝廷様に双向つた、といふのぢやなし、薩摩や長州の人達が、餘り徳川様を、酷く押へ付けるから、それがどうも、癪に觸つてならねい、といふので、始めたやうに思はれる。さうして見りやア、何も、此先、會津様ばかりを憎んで、人身御供に、するにも及ぶまい。さういふ風に、徳川様に、忠義な人は、打つて變つて、朝廷の御家來になりやア、矢張り朝廷に、忠義をするに極まつて居るんだから、こりやア一番、朝廷の方でも奮發して、會津様を、助けるのが一番だ。それにしても、會津様の御家來が、何ういふ譯で、朝廷へ願つて出ないのか。それとも、願つて居るのか、我々にや判らないが、何も、戦さに敗れたから、といつて、そんなに小さくなつて、御沙汰を、待つて居るにやア、及ばねい。會津様が、御自分から、そんな事を願つたら、意氣地もない、と笑はれやうが、其家來が、願つて出りやア、主人の爲だから差支なからう、と思ふが、我々が、有難いと思つて居る、徳川様の、御先途を見届けるまで、戦さをして呉れたんだから、會津様は、矢張り有難い、と思つて居るんだ」
 酒の機嫌も、幾らか手傳つて居るだらうが、元來が、お喋りの人だ、と見えて、源兵衛さんは、盛に氣焰を吐出した。

「オイ、戯談ぢやねいぜ。そんな事を、公然に話をして、若し役人にも聞かれたら、それこそ騒動だ。お前さんが、幾ら心配したつて、會津様が、助かるものではない。詰らねいこつちやねいか」
 「オイ、又吉さん、戯談いつちやいけねいぜ。何も、俺が、會津様を助けやう、といふのではないが、愚痴のやうだが、其御家來のして居る事が、齒痒くて堪らないから、ツイ斯ういふ事を、言ふやうになるのだ。少しも遠慮には及ばねえのだから、朝廷へ、願つて出たら宜からう、といふのだ。假令、官軍の方の人に聞かれても、悪いことでもなからう、と思ふんだ。あれだけに、意地張つて戦つたら、もうそれで、溜飲も下つたらうから、會津様の御家來だつて、何も薩摩や長州の人を、忌嫌つて居るにも及ぶまい。御主人を、助けてから後で、舌を出したつて濟むんだから、木戸さんだ、とか、西郷さんだ、とかいふ、偉い人に、あの時は、斯ういふ譯でございましたから、何とか分別をして下さい、と、頼みに行つたつて、別段、それが男の顔に拘る、といふ譯でもなからう。そんな事を思ふと、何とかいひたくなるのだ」
 何でもない事を、言ふて居るのだが、今、目の當り、會津侯の身の上に就いて、町人風情の、下々の者までが、斯んなに心配して呉れるのか、と、これを思ふて見る、と、秋月は、泌々と嬉しくなつたが、それに付けても、今日まで、自分が、人の選嫌ひをして、躊躇して居たのが、恥しいやうにも思はれた。成程、今も町人が、言ふた通り、主人の家を救ふのは、家來の役であるから、詰りは、主人の面目にさへ觸らなければ、自分が、何ういふ卑しい事をしたつて、忠義の爲にすることだから、差支へはない譯だ。薩摩と長州の人が、天下の大權を、握つて居るのだから、其人達の袖に纏らなければ、御家の危急を救ふ事は、出来ないのだ。それを、何の當もなく、徒に思案に暮れてばかり、居た所で、致し方が無い。聞く所に依れば、西郷は、今、國へ歸つて居る、といふ事であるから、こりやア寧ろ、長州の木戸に纏つて、御家の復興を、圖る外はあるまい、と、心算に決して、宿の主人を促して、茶店を出ると、時刻が移つて居て、夕陽は、本郷臺に、落ちやうとする時であつた。

九

秋月と木戸は、全く知らぬ間柄ではない。一度は、互に敵視して、智慧袋を絞つて、喧嘩した事もあるのだ。文久三年の、京都の政變が、即ちそれであつた。

其時は、廣澤富五郎と、秋月が、力を合せて、到頭、薩藩を説き付けて、遂に毛利を、京都から追出して、木戸の如きも、一時は、一身の置場にも、困る位の悲境に、陥つたのである。それは、秋月と廣澤のやつた事であつて、恐らく木戸の一生を通じて、あの時位、口惜しい事はなかつたらう。それ程にまで、木戸を苦しめた、秋月が、今は、涙を呑み、膝を屈して、木戸に縋らなければ、主人の家を、復興する事は出来ない、といふのであるから、その昔苦んだ、木戸よりは、今の秋月の苦しみが、一層の苦しみであらう。互に敵視して、あれまでの戦ひはしたやうなもの、文久の昔、一度は聯合した、縁故から言へば、薩摩の方に縋つて、救ふて貰ふのが、順序のやうではあるが、西郷の居らぬ以上は、木戸に、縋るの外は、ないのだ。極端まで争ふて、壽命の縮まる程に、苦しみを與へた、木戸に縋つて、今の境遇を話す方が、却て活路を求めるとは、近いかも知れぬ、と考へた事は、度々あつたけれども、流石に、それと決心し得なかつたのである。所が、上野へ、遊びに行つて、腰掛茶屋の酒宴に、氣焰を吐いて居た、江戸の町人が、言ふた一言は、秋月の胸に、深い感慨を與へて、遂に秋月は、木戸に縋つて、主家の危急を救ふ、といふ言に、堅い決心をしたのだ。

折柄、木戸は、箱根の湯治場に、行つて居ると、聞いたので、寧ろ、斯ういふ話をするのには、旅先の方が、却て都合の好い事が多い、とも考へて、秋月は、箱根まで、木戸を、訪ねて行く事になつた。

まさか、會津藩士秋月梯次郎と名乗つて、訪ねる事もならぬし、それに、自分等は、主人と共に、今現に、謹慎中であるべき身分であるから、公然と、新政府の役人に會ふ、といふやうな事は、出来ないのだ。若し、名前を名乗

つて、訪ねて行つても、門前拂ひを、されるやうな事があつては、却て後日の禍となり、取返し付かぬ事になつては、一段の迷惑ともなるから、深く考へて、工夫をした末、まだ其頃は、舊幕時代の風俗が、其儘に残つて居て、政府の役人でも、鬚を結んで居る者が、多かつた位であるから、近年になつてこそ、殆んど見えなくなつた、虚無僧になつて行くのが、道中筋は、安全であると、考へた。

それと打明けて、くはしい事は、いへぬが、旅宿の主人は、一風變つて、江戸つ子の氣象を、有つて居るのを、幸に、口實を設けて、虚無僧姿を、すつかり算段して貰つて、秋月は、全く虚無僧になり済まして、箱根へ、やつて来たのだ。

昭和の今日では、一般の人が、ヤレ避暑だとか、ソレ、避暑だ、とか、様々の名を付けては、湯治場歩きを、爲るやうになつたが、昔の人は、湯治場歩きなどを、無造作に、やつたものではない。尤も、今の湯治場は、遊び場所として、客を迎へるやうに、百般の設備が、出來て居るけれども、昔の湯治場は、本當に、病氣の療養に、行く者ばかりで、偶には、遊山半分に、出掛ける者もあつたらうが、そんなのは、湯治場で、餘り大切には、されなかつた。何うせ、温泉の涌出る所などは、都會の真中には、無いのであるから、人情や風俗も、極めて質朴で、縱令、金札を切つて、豪華を極める、客があつても、永久に、續く客ではない。と見て居るから、餘り大事には、爲なかつたものだ。却て、金の使ひ振りが、質素で、餘計な事はしないが、長く泊つて居て呉れる、眞の湯治客を、大事にしたものである。

されば、昔の湯治客は、病氣を治す爲に行つたのであるが、今の湯治客は、病氣を造る爲に行くのだ。出掛ける時には、ピン／＼達者で、行つた者が、歸る時は、顔の色も蒼く、頬骨も現れて、フラ／＼腰で歸る、といふやうな、馬鹿な事は、今の湯治場では、珍らしくない事だ。日本全國を通じて、湯治場の數も多くあるが、先づ箱根が、湯治場としては、第一となつて居る。

秋月は、漸く箱根へ着いて、直に木戸を訪ねやう、とは思つたが、若し断られる、と、後が面倒であるから、日頃嗜む、尺八を吹いて、宿屋の軒先に立つては、窺つて居たのだ。待てば海路の日和といふて、幸ひにも、尺八の秘曲を聴きたい、といふので、聘ばれた座敷が、弓矢八幡の引合せか、圖らずも、それが、木戸であつたら、秋月の喜びは、一通りでなかつた。

天蓋は、宗門の制規として、冠つた儘、席について居る。木戸から、望みて、これから吹きはじめた。

一曲二曲と、段々、吹奏んで行く。虚無僧の様子を、熟々、見て居た、木戸は、何となく氣を引縮られて、心も滅入るばかりであつた。尤も、同じ樂器でも、尺八は、琵琶と同じやうに、人の氣を引立てるやうな、派手なものではなく、悪く言へば、亡國の調がある。讀めて言へて、悲愴の曲とでも、言ふのだらう。殊に、之を吹いて居る者が、亡國の臣で、聽いて居る者が、時代の潮流を乗越えて、一時は、權勢並ぶ者なき、身分になつて、今現に、日本て三人と、稱へられて居る程ではあるが、却て、それが爲に、内外の心配も多く、殊には、頼みに思ふ、大村が、今日か明日かの患で、すつかり氣落ちをしまふた、木戸が、聽手になつて居るのだから、何うしても、尺八の音に、悲哀の調が、深くなるのも無理は無い。

「暫く御待ちなさい」

木戸が、斯ういふたので、虚無僧は、尺八の音を止めた。

一〇

何の爲かは知らぬが、木戸に、止められたので、虚無僧は、尺八を、右の手に持直して、ヂツと、木戸の態度を見ながら、

「此曲は、御氣に入りませぬか」

「イヤ、左様の次第ではない。餘り氣が減入つて來たので、暫く息ませて貰はう、と思ふてぢや」

虚無僧は、兩手を突いて、

「御病中の御慰みにもならず、却て御氣詰りとありましては、恐れ入りますから、此儘止めて下りませうか」

「それには及ばぬ。尺八の曲は、姑く措いて、何か珍らしい話でもあるならば、聽かせて貰ひたい、と思ふが、お手前等は、さういふ姿で、日本全國を、廻歴せられるのであるから、定めて面白い話の種も多くあらう。それを聽かせて貰ひたいのぢや」

「別に、是と言ふて、御話し申上げるやうな事も、ありませんが、折角の御尋ねでありますから、申述べます。實は先般、奥羽諸州を、遍歴いたした時分に、計らずも、會津の城下に参りました」

「ウム、會津の城下へ……」

と思はず、膝を進めた。虚無僧も、衣紋を繕うて、

「イヤ、大きな戦さの跡を見る程、悲惨なものはありません。殊に、一藩の力を擧げて、此處を、先途と戦ふたのが、敗戦に相成つて、藩主は、寺院に謹慎の身の上、藩士は、東西に離散し、今や、衣食にも苦む程の状態、見る物、聞く物、斷腸の種ならざるはなく、我等は、俗人に遠ざかつて、虚無僧寺に、人と成つた身なれども、目の當りに、其状態を見ましては、人事ならぬ、自分の身の上につつた、禍の如くにも思はれて、坐に哀愁の涙に、暮れて、参りました。それに引換へ、薩長二藩の御人は、順風に帆を上げて、今の勢ひ、凡そ天下の事、一として成らざるはなく、勝敗は、武門の常とは申しながら、斯うも違ふものか、と、東西を比較して、見れば見る程、會津侯が、今日の境遇は、何とも同情の念に堪へませぬ」

と、段々、説立て、來る、虚無僧の言葉は沈んで、眼には、熱い涙を、堪へて居る。其態度が、何となく普通ならぬに、木戸は、早くも氣が付いた。

「フ、ム、會津の城下に滞在して、それ程に、會津侯が、今の境遇を、氣の毒と御覽になつたか」
「ハイ、これは、私一人では、ありませんまい。縦令一度は、敵となつて戦ふても、苟も武士の情のある御方ならば、一度、會津の地に、足を踏込んで、あの悲惨な状態を、見た以上、尙ほ其上に、嚴罰を加へて、根も葉も枯らす、といふやうな、無様な事は、出来ずまい」
「そりやア、貴下の仰せの通り、或は其哀れな状もあらうが、併し、順逆の道を誤つて、王師に抗した以上は、其末路を見るのも、天の制裁で、止む事を得まい」
「何と仰せられますか、天の制裁と、ハ、一、斯やうなことを、天の制裁と申しまするか」
「仰せではござりますが、會津侯は、未だ曾て天に反いては居りませぬ」
「朝廷へ反いたのは、天に反いたのぢやないか」
「私は、左様には考へませぬ。會津侯の反いたのは、朝廷に對しては、ござりませぬ」
「然らば、何に反いたのか」
「薩長の二藩に、抵抗したのでござります」
「何と言はつしやる。薩長の二藩に：：ソ、そりやア、何ういふ次第で」
「今更申すも、愚痴のやうではござれど、薩長二藩が、時の勢ひに任せて、朝威を笠に、徳川幕府を倒さう、と計つた。其致方が、餘りに無慘である、といふ事に激して、聊か徳川の末路に、氣を吐かうとした。それが、騎虎の勢ひで、あれまでの戦ひに、なつたのでござります。會津侯の御本心から、朝廷に反き奉つたのではない、といふ事は、薩長二藩の雜輩は知らず、苟も上に立つ人ならば、解つて居るべき筈で、ござります。殊に、文久元治の昔から今日まで、會津藩が辿つて來た道に、二つはありませぬ。願ひ道かは知らねども、武士が、本來の情誼一

片から、徳川の御味方をした、といふ。それを天が憎しむ、といふ事もござりますまい、現に今、朝廷の御覺を目

片から、徳川の御味方をした、といふ。それを天が憎しむ、といふ事もござりますまい、現に今、朝廷の御覺を目
出度く、天下の事に、與つて居る、長州藩の人々でも、一度は、朝敵の名に依つて、都を構はれた、御方さへござ
らう。それとても、時勢の一變に依つては、又、順風に、帆を揚げて、今の位地にも、立つ事が出來たのぢや。順
逆、何れにもせよ、それは唯、巧に時勢の潮を、泳ぎ越すか、溺れるかの違ひで、別れるのでありませう。何う考
へても、會津侯は、不憫でなりません」
「お手前は、腕を組んで、聽いて居た木戸が、
「お手前は、會津侯に、因縁のある御方ぢやな」
「イエ、何ういたしました」
「イヤ、確かに、それと睨んだ、目は違はぬ。隠すとすれど現はるゝ、御國訛こそ、會津人の證據ぢや。それに何處
となく、言語にも、態度にも、覺えがある。差支なくば、氏名を御明し下され」
と、いはれて、秋月は、天蓋を脱いた。
「ハツ、恐れ入りました。御炯眼の通り、拙者は、會津藩の雜輩にて、秋月悌次郎と申します者——」
「エツ、何と言はつしやる。お手前が、秋月殿でござつたか」
「ハア」
「イヤ、絶えて久しい面會とて、年月は、多く經つて居らねど、其後の變遷が激しいのと、膝を交へて、長く懇談し
なかつた爲に、確と覺えて居らなかつたが、一兩度は、公式の席に於て、御目にも掛かつた事がある。秋月氏、久
しうござつたな」
と言ひながら、木戸は、寢床から立上がつて、秋月の手を執つて、上座へ直さうとした。

餘りのことに、秋月は驚いて、

「イエ、それでは、恐れ入りまする」

「マア、それに、御控へなさい。今は今、昔は昔、會津藩の重役として、當時、貴下の爲には、随分、苦しめられた桂小五郎、今日でこそ、木戸孝允と名乗つて、朝廷の御前は、勤めて居るが、成程、唯今の御説の通り、一度は、朝敵の名に依つて、主人敬親侯は、國許に蟄居を命ぜられ、拙者は、京都を追はれて、其儘立退くも残念と、三條の橋の下に、阿呆陀羅歌ふて、合力を求めた事もござる。成敗、地を變へるとは、即ちそれぢや。今日の御手前の、御身の上こそ、昔の拙者の身に引比べて、何とも御氣の毒に存ずる。此席へ参られた時から、由緒ある武夫の、成れの果と、豫め察しては居たが、秋月氏とは、氣が付かなかつた。會津侯の境遇に、同情しての御説、其話し振りが、會津藩に、由縁の御方と、見たればこそ、御尋ねもしたのぢや。よく名乗つて下された。サア打寛いて、緩り話さう」

貴様は、會津の家來か、穢はしいと言つて、追拂はれた所が、喧嘩にもならないのだ。それを、木戸は、昔の身に引比べて、大切に扱ふて呉れる、其心の底までは判らぬが、兎に角、秋月としては、非常に嬉しく感じたが、果して、藩主の身分に就て、嘆願の件を、木戸は、容れて呉れるか、何うか、それを思へば、今の嬉しさに引換へて、又、秋月は、氣が沈んで來るのであつた。

「思へば、もう六七年前の夢でござるが、文久の政變に、京都を追はれて、それより二年餘りは、流離困難、幾多の苦心をした甲斐があつて、幸に、今日の時勢を、造り出したのぢやが、それに反して、お手前が、昨今の境遇は、人事ならず、御察し申す。それに付けても、あれまでに、會津侯が、官軍に双向ふて、最後まで、徳川の爲に盡さ

れた。それは、順逆の道を誤つた。とは申せ、謂はゞ武士の意地から、起つた張合で、よくもあれまでに盡されたもの、と、蔭ながら敬服は、致して居るが、併し、今日の時勢と相成つては、表立つて、御褒め申す事もならず切て戦ひを開く以前に、歸順して下されたならば、今の窮命は、すまいものを、と、實は蔭ながら、思ふて居るのてござる」

「それまでに、御同情下さる、尊公の御志、嬉しく存じまする。就きましては、其情ある御言葉に縋つて、御願ひ申す一儀は、餘の儀では、ござらぬ」

と、秋月が、哀訴の次第を、言出さう、とすると、木戸は、それを押へて、

「イヤ、伺はずとも、大概、それと、推察して居る。まさかに、哀訴されたれば、とて、會津侯の罪は、免す譯にはなるまい」

「エツ、然らば、御救ひ下さる譯には、参りますまいか」

「マア、御待ちなさい。救ふと、救はぬとは、朝廷の御思召、一つぢや。縱令、哀訴嘆願の事があつたればとて、それが爲に、朝敵の罪を免す、といふ事にもなるまいが、マア、お急きにならず、と、拙者に、御任せなされ」

言葉の外に溢れる、木戸の同情は、流石に、秋月も悟つたから、

「それまでに、仰せ下さる思召に甘えて、何事も申しませぬ。此上ともに、主家の一條に就ては、御配慮の程、偏に願ひ上げまする」

木戸は、唯頷いて、何の答へも、爲なかつたが、其顔色で、秋月には、充分の安心が、行つたらしい。

「それにしても、御手前が、虚無僧姿は、何とも以て、合點が参らぬ。何ういふ事情から、左様な姿にはなられたか、御差支なくば承りたい」

「御不審は御尤もに存じまする。實は、主家の爲に、尊公の袖に縋つて、御願ひしたい考へてござつたが、何分にも

明白に名乗る事の出来ぬ、今日の身の上では、斯く姿を變へる外は、ござらぬので、フト思ひ付いて、虚無僧姿になり、拙なる尺八の一曲が、仲介して、此好機會を造つたのでござる。」
「ウムさういふ、次第でござつたか、返す返すも、會津侯は、良い御家來を持たれて、御仕合せぢや。それに付けても、智慧の秋月とまで、議はれた御手前が、今日の身の成行は、御察し申す。」
「御言葉で、恐れ入ります。」
木戸は、後を振向いて、

「松ッ」

「ハイ」

「豫て、お前にも話した、文久三年の夏の騒ぎぢや。あの時に、俺が、あれまでの苦みを見た、それは、此御方の、智慧の蛛網に引掛つて、到頭、拔差ならぬ躬の窮迫から、お前にも、甚太い厄介は掛けたが、今から思へば、夢のやうぢやのう。」

「それでは、あの時に、御話のござりました、秋月様と仰しやるのは、此御方でござりますか。」

「さうぢやよ。」

秋月は、不審の思ひ入で、

「して、奥様は、京都の御生れでござりますか。」

木戸は、軽く頷づいて、

「如何にも、三本木に、卑しい稼業をして居つた。幾松は、之でござるよ。」

「偕は、三本木の名妓として、全盛を極めた、幾松殿でござつたか。一兩度は、酒宴の席で、御目に掛かつたが、頓と、御見忘れをして、甚だ失禮をいたしました。」

松子は、顔を眞赤にして、

「御恥しうござります。」

「何の恥づる事が、ござりませう。浮川竹の卑しい稼業は、爲て居ながらも、あれまでに、木戸氏に、操を立て、御働ぎ、新選組の者ども、當時の貴女には、舌を巻いて、驚いて居りました。」

「何う致しまして、女だてらに、御恥しうござりました。」

是から、酒肴の用意が出来て、三人は、快う盃を取交した。

秋月は、安心の胸を撫下して、故郷の會津へ、晝夜兼行で、引返したのである。

一一一

秋月が、歸つた後で、木戸は、熟々考へた。維新の大局に、唯一歩を誤つたばかりで、徳川全盛の時代に於ける、東北第一の親藩たる、會津侯ですら、今日の境遇に陥るのだ。それに付けても、文久の昔を思ひ出せば、あれまでに追詰められた、毛利藩が、よくも其窮境を脱することが、出来たものだ。今や、薩藩と相携へて、新政府の實權は、全く二藩の手に、あるのぢやが、併し、それにしても、未だ全く安心といふ、場合には、ならないのだ。時勢の推移と、朝廷の御威光を、笠に冠つて、一芝居打つた。それが、美事に當つて、今日の舞臺には、なつたのであるが、其壓迫を受けて、泣く泣く従いて来た、諸藩の間には、尙ほ、舊幕の時代を、夢見て居る者もある。是から先、尙ほ進んで、廢藩の事も、行はねばならぬ。王政復古の實を擧げるには、様々のこともして、掛からなければならぬのであるが、其度毎に、天下は動揺して、どれ程の苦みを見るか、判らないのだ。就いては、維新の際に、唯一歩を、踏迷ふた爲に、會津侯と、同様な運命に、陥つて居る者もある。それ等の人を追窮して、嚴重に處分して行く、といふ事になれば、自然と、人心が、新政府を離れやう。斯かる場合には、何うしても、徳を施して置くが、肝要だ。されば

とて、十分の名義が立たないのに、會津侯を許すといふ事になれば、素直に附いて来た、諸藩の間に、不平も起らう。それ等の事情も、斟酌して掛かなければならぬのであるから、同情はして居るやうなもの、此處分は、非常に困難の事である、と、木戸の苦勞は、又一つ殖えたのである。四五日経つてから、気分も好くなつて来たし、病氣も、軽くなつたやうに思はれるから、もう大概にして、東京へ歸らう、と、考へた。

「松ツ」

「ハイ」

「俺の體も、此位になれば大丈夫だから、東京へ歸らう、と思ふが、お前は、もう少し保養をして行くが可い。何うぢや」

「イエ、郎君が、御歸り遊ばすなら、私も、御一緒に参ります」

「俺に、遠慮は要らぬのぢやから、お前も、多少の疲れはあらうから、保養して行つたら、何うぢや」

「何う致しまして、郎君を、御歸し申して、私が、暢氣に保養などは、爲て居られませぬ。それにしても、郎君は、さう輕卒になすつても、もう宜しいので、ございませうか」

「ウム、自分の心持で、もう大丈夫と、思つて居るのぢやから、宜からう」

「萬一、東京へ、御歸り遊ばしてから、復返へすやうな事が、ございませうと困りますから、郎君こそ、當分の間、御保養遊ばしては、如何でございませうか」

「そりやア、もう少し居たい、といふ氣もあるが、お前が、知つて居る通り、西郷さんは、國へ歸つて居るし、萬事は、大久保さん一人で、切つて廻して居るのぢや。政務の上に、心配は無いけれど、詰らない事にも、目眈を上げて騒ぐ、若い國の藏中が、俺の居らない爲に、薩摩の人と争ひても起すと、面倒ぢやから、寧ろ、歸つて見やう、といふ氣になつたのぢや」

「昔からの、御苦勞に引續いて、未だ今日のやうな、世の中になつても、御苦勞が絶えない、とは、何といふ事で、ございませう。それでは、御體が、堪りませぬね」

「イヤ、男といふものは、心配する事が多くて、始終、働いて居れば、却て丈夫になるものぢや。病氣は、詰り心の弛みから、出るのぢやからな、ハツハツハツ」

「それ程に、仰せ遊ばすなら、御歸りの支度に、掛かりませうか」

「ウム、さうして貰はう」

折柄、廊下へ、バタ／＼といふ、足音が聞える。木戸夫婦が、振返つた途端に、障子が、サツと開いた。

「一寸、申し上げます」

「ウム、用事か」

「ハイ、唯今、御訪ねになつた方が、ございまして、是非、御目に掛りたいから、さう申して呉れ、と仰しやつて、御出で、ございませう」

「フ、ム、して訪ねて来た人と、いふのは、名前は、何といふのか」

「廣澤様と、仰しやいました」

「廣澤様と、仰しやいました」

「木戸は、暫く考へて居たが、

「廣澤、ハテナ、兵介が、豈夫に来る譯もなからうが……ウム、兎に角、此方へ通して呉れ」

「ハイ、畏まりました」

下女は、足音高く、向ふへ行く。後影を見送つて、木戸は、獨語のやうに、

「可怪な事ぢやな、まさか通知もなく、廣澤が、来る譯も無からう。それともに、何か面倒な事でも出来たか」

松子は、手廻りの荷物の、支度をして居ながら、
 「本當に、御心配の事ばかりで、困りましたねエ」
 「何、まだ心配か、何か、會つて見なければ判らぬ。存外、面白い事で、来たかも知れぬよ」
 所へ、案内をされて来た、人を見ると、旅僧の姿で、而も二人連だ、一人は、見覚えのあるやうだが、確と記憶は無い。坊さんだけに、木戸は、一段の疑ひを以て、迎へた。

「サア、之へ何うぞ、御通り下さい」
 二人は、纒に鬨を跨いで、室の入口に、ピタリと坐つた。

「久しう、御目に掛かりませぬ。相變らず御機嫌で、何よりの儀と、存じまする」

「エツ、甚だ御無禮ぢやが、御顔に見覚えはあるが、確と何方か相判らぬ。して、貴僧は」

「御見忘れなされるも御尤、手前は、舊會津の藩士、廣澤富五郎でございます」

「ヤツ、貴殿が、廣澤氏であつたか、サア、先づ之へ」

と、木戸が、自ら座蒲團を取つて、上座へ直さうとする。廣澤は、頻に辭退して、

「イエ、それでは、却て恐入る。之にて御免蒙ります。昔と違ふて、今日では、日蔭の身でありますれば、結局、此方が勝手でございます。就きましては、御紹介申しますが、之に同道いたしました者は、矢張り同藩士の小出哲之助と申します者、何分、御見知り置かれて、今後とも、宜しく御願ひ致しまする」

「ハ、一、初めて御意得申す。拙者は、木戸孝允でございます。未だ桂小五郎の昔、廣澤氏には、色々、御引立てに、預つたものぢや」

「何う致して、御引立て申したなんぞとは、飛んだ事で、却て、あの砌には、時の勢ひとは申しながら、御無禮のみ働きました、定めて御恨み下さされた事と、存じまする」

「何の、あれしきの事に就て、明治の今日まで、恨みを遺す程に、小さな心でも、ござらぬ。マア、それ等の事は、後の話といたして、之へ御進み下さい」
 餘りに進められるので、二人も、稍々席を進んで、

「實は、折入つて、御願ひの申上げた、厚顔しくはござれど、態々、御訪ねいたしました」

「して、何ういふ御用か、一應伺ひませう」

一一一

木戸の、胸の中では、此兩人が、斯うした姿で、態々、自分を、訪ねて来たのは、無論、藩主の罪を謝して、朝廷へ、御取成を頼む爲に、来たのである、といふ事は、判つて居たが、先づ何ういふ事を言ふか、一と通り、それを聴いてみたい、と思つて、秋月に、面會した事などは、嘘にも出さないで、廣澤の發言を、待つて居るのだ。

「今日に相成つて、斯やうの儀を、申出づるのは、如何にも御恥しき事ながら、主家の存廢に拘る、一大事で御座れば、手を組んで、傍觀もなり難く、様々に協議を盡して、拙者と小出の兩名が、斯かる姿で、御訪ね致した次第でござるが、實は、藩主容保儀、長く王師に反抗して、あれまでの戦ひを、致したる以上は、武士の面目として、此世に長らへる、所存の無きは、勿論なれど、詰りを申せば、我々、左右に居ります者が、時勢を観るの明なく、唯、徳川宗家と、斷ち難き、因縁を思ひ、只管、幕府の再興を夢みて、あれまでの戦ひは、致しましたやうなもの、今になつて思へば、主人容保が、苦しき意中を推し測つて、何分にも其儘に、致し置き難く、我々共の生命に代へて、主家の存續が、出来まする事ならば、何時にても、切腹いたして、朝廷への申譯は、致す積りてござるが、何とか、尊公の御取成しを以て、主家の存續致すやうな、御取計ひの儀は、願はれまいか」

と、誠を表に現はして、哀訴されて見る、と、無下に、それを斷る、といふやうな、心にはなれない。のみならず、

前以て、秋月から、十分に話込まれてあるのだから、尙更に、廣澤の苦しい立場も、考へて見て、何とかしてやらう、といふ考へは、既に付いて居たのだ、が、自分の一存を以て、請合ふ事は、固より出来ぬ筈であるから、
 『イヤ、段々の御話は、よく相解つた。會津侯の御意中も、深く御察し申すが、今後の御處置に就ては、固より朝廷の思召し、一つにある事で、我等が、立入つて、彼是申すべき事もならぬ次第ではあるが、西郷や大久保の考へも、ござらうから、兎に角、拙者より、兩人へは、然るべく取次いで、成るべく、穩便の御沙汰があるやう、御取計ひ申さう』

文久の政變に際しては、自分と秋月の兩人で、此人を、ヒドク苦しめたのであるが、更にそんな事を、思ふて居るやうな、様子もなく、虚心坦懐、昔の恨みを忘れて、快く頼みを、受引いて呉れたのは、流石に、當時の三傑として、今、飛ぶ鳥を落とすやうな、勢ひを有つて居る、木戸だけの事はある、と、坐に廣澤も感心して、暫くは言葉もなく、木戸の様子を見て居た、小出も、膝を進めて、是から段々と、頼み込んだから、木戸は領いて、
 『もう、其事に就いては深く伺はずとも、我輩の心には、聊か期する事もあるから、處心配なく、御引取り下さい。併し、久振りの再會ぢやに依つて、今、酒肴の用意も、させてあれば、緩り話して、御別れ申すことに致さう』
 重ねて、優しい扱ひに、兩人は、涙の出る程、嬉しかつた。
 彼是する中に、酒肴は運ばれる、妻の松子が、盃盤の周旋をして呉れるのだから、痒い所に、手の届くやうな、扱ひ振は、流石に、幾松の昔が偲ばれて、廣澤等も、其時分の話をし掛ける。松子も、當時の事を物語つて、頻に興入つて居る。木戸は、盃を取つて、廣澤に獻した。

『時に、廣澤氏』

『秋月氏は、今如何にして居られるか、其後の消息は相判らぬが、矢張り、國許に御居てゝござるか』

廣澤は、俄に心配さうな、顔色をして、
 『其儀に就ては、小出と兩人、頻に心を苦しめて居るのでござるが、我等向様に、朝廷へ嘆願の途を開かう、とて、既に國許を去つてから、一月餘り、其後の消息が、更に無き故、我等も、斯やうに打揃ふて、上京いたした次第でござるが、其後の秋月は、何と致したか、一向に便りも無く、まさか、變心をするやうな人ではなし、さればとて、梨の礫の香沙汰無き所から、考へて見る、と如何にしたか、其邊の事も心配てなりませぬ』
 『ハ、ア、而て見ると、秋月殿も、矢張り御相談の上で、上京せられたのか』
 『無論、左様でござります』

『さうでござつたか、とは、聞いて居つたが、如何かと思ふて、ツイ御尋ねしたのぢやが、秋月殿は、無事息災で、御暮しになつて居るから、御安心なされ』

『エツ、秋月は、無事息災で居ります、と、さては、尊公、何方かで、秋月に、御會ひになりましたか』

『如何にも會ひました。而も、此座敷に於いて、兩三日前に、面會いたした』
 意外の答へに、兩人は、顔を見合せて、膝を進めた。木戸は靜かに、
 『實は、充分の御懇談をいたして、御別れしたのだが、御手前等と、何ういふ關係に、なつて居るか、其邊の事が、相判らぬに依つて、甚だ御無禮ながら、聊か試みたのぢやが、其御返事に依つて、安心致した故、秋月の御出でた事も、打明けた次第ぢや』

そこで、兩人も、大に安心して、十二分の馳走になり、後日の事までも頼んで、會津へ、歸る事になつた。それから、幾日かの後に、木戸は、東京へ歸つて来て、段々、大久保にも會ふて、事情を話し、それ／＼の路を渡つて、朝廷の御情に依り、何かと宥恕の途が、開けるやうにしてやつた。先づ取敢へず、三千石を興へて、朝廷の御沙汰の下るまで、當分は、謹慎して居れ、といふ事に計らうたのは、多くの家來が、尙、會津侯に、附いて居るのだ

から、其食扶持として、三千石を與へる事にしたのだ。木戸以外の人も、大きい心を以て、會津侯を、救ふ考へには、なつたのであるけれども、兎に角、斯うした事情から、木戸が、會津侯を、専ら救ふ事に盡力したのである。文久の昔を言へば、會津侯の骨を、ソツプに煮出して、飲んでも嫌らぬ程に、ヒドク窘められたのではあるが、其恨みを忘れて、木戸が、會津を救ふことにしたのは、洵に美談として、後世に傳ふべき事だ。是が原因となつて、會津侯は、今尙ほ華族の班に列して、立派に其跡は、遺る事になつた。

長州藩の脱兵騒動

明治元年の九月二十六日に、第一回の論功行賞があつて、其際に、木戸は、從三位に叙せられ、賞典祿は、千石以上を、賜る事になつた。昔を洗へば、毛利藩の醫者の件で、更に桂といふ侍の家へ、養子に行つた身が、如何に、風雲に際會して、立派な功を、立てたにもせよ。一躍して、從三位の肩書を得て、殆ど毛利侯と、肩と並べる程の、位地に昇つたといふのは、無上の出世と、言はねばならぬ。而も、天皇陛下の御前にあつて、天下の大政に參與するといふ今にして思へば、當時の木戸は、何れ程、得意であつたらうか。

然るに、木戸は御賞與の御沙汰に對して、再三辭退した、といふ事實がある。けれども、朝廷は、其辭退を許さず、木戸は、止むなく御受けをして其職に止まつた。何時の時代でも、大きな事變後の、論功行賞に就ては、何うしても、幾分かの不平等は免れない。隅から隅まで、論功行賞が、公平に行はれる、といふやうな事は、望んで得べからざる事である。日清日露の戦ひの時分にも、矢張りそれに就ての不平等は、あつたのだ。唯、表面に現れないで、上手に押へてしまつたから、そんな事は、無いやうに見えるが、其實を言へば、随分、激しい不平等はあつたのだ。何れ程、注意しても、多くの人の働きを、細かく知る事は

出来ないものである。

又其間には私心を以て、人の功罪を曲げて、報告する者もあるから、自然、論功行賞が、公平に行はれる筈のない事は、苟も當時の事情を、調べて見た者ならば、直に判る筈だ。

それであるから、維新の當時にしても第二回、第三回の追賞が、行はれた位であるが、尙ほ、それでも、不平は絶えなかつた。西郷は、早くから、之を見抜いて、朝廷が、容易に御許しが、無かつたにも拘らず、強て職を辭して、鹿兒島へ、一度引籠つたので、辛うじて、其失態を、世間へ知らせずに済ました。けれども、木戸には、其心はあつたが、西郷程に重くは考へて居なかつたので、長州藩の内訌は、段々高まつて来て、遂には大爆發を爲るまで、手を着けずに置いたのは、木戸の一大失策であつた、と思ふ。

尤も、西郷は辭しても、大久保は、残つて居るから、薩藩の方には、強味はあつたのだが、長州藩の方では、木戸が退くと、其後を引受けて、薩藩に、對立して行く者が無かつた、といふ事も、木戸をして、大決心を以て、職を退き、國へ歸る事を許さなかつた、といふ。茲に特別の事情も、あつたのだが、兎に角、長州藩に、論功行賞の不平から、私闘が起きた、といふのは、維新の功業が、長州藩に、あれだけあつたにも拘らず、此一事だけは、確に失策であつた、といふの外は無い。

殊に、隊士の間に於て、信用の厚かつた、山縣有朋は、既に洋行の途に、着いて居つたし、山田顯義は、東京へ出た切り、國へ歸らぬ、といふやうな譯であつたから、自然、國許の方には、不平連中を取締る、といふやうな者も無く、敢て放任して置いた、といふ次第でも、なからうが、取締を怠つた、といふ事は、言へるのだ。

茲に、富永有隣と、いふ者があつた。極めて智慧が深く、常に奇策を弄して、屢々、人を驚かす事があつて、藩の重役にも、其爲人を見込まれて、幾度か、重く用ひられた事もあるが、餘りに朝氣に富んで、野心が多かつた爲に、遂には遂げられて、不平の中に、目を送る事になつた。

學問も、充分にあるし、智慧は深い、といふのであるから、初は重費がられて、人にも喜ばれたが、少し長く交際つて居る中には、厭きられてしまふ。才に委せて、事を遣り捲くる、といふ所から、幾分か、人を輕んじて、高慢な所がある。其上に、品行が修まらないで、屢々、醜聞を、人に傳へられて、果ては、親類預けになつたり、或は、野山の獄に投ぜられて、謹慎させられた事もある。

其時分に、吉田松陰が、江戸から送還されて、野山の獄に入れられた。不圖も、有隣の居る室の、直ぐ隣に、入れられたのである。が有隣の才智を、活かして使へば、物の役に立つべき者だ、といふ事を見込んで、松陰が、隣室に居るのを幸ひ、屢々、書面を送つては、有隣を戒めた事がある。初めの中は、有隣も、深く心には、留めなかつたが、松陰が、赤誠を以て、戒めて呉れる、其親切に動かされて、遂には性質が一變して、松陰に依つて、事を成すの考へが、起つて来た。

其中に、松陰は、牢から出されて、親類へ預けられた。松陰の、身體の自由が、利くやうになつた所から、有隣をあの儘に、獄中に置くのは惜しい、といふ考へがあつたので、重役の間を奔走して、到頭、有隣を、救ひ出して、松下塾に置く事にした。

それからの有隣は、全く生れ更つたやうな人になつて、同人の間にも、推重されるやうになつた。所が、松陰は、安政六年の五月になつて、井伊大老の爲に、江戸表へ引揚げられて、遂に刑殺されてしまつた。

一一

それから後、有隣は、再び舊の不身持に復つて、晝夜、酒色に親しみ、放縱な生活を、續けるやうになつた。學問もあれば、武藝も出来る。武士一人としては實に立派なものではあるが、素行が修まらぬ爲に、有隣の信用は薄くなるばかりであつた。

けれども、本人は、存外に傲岸不屈の所があつて、縱令、多少は、さういふ傾きのある、といふ事は、知つて居ても、今更に、素行を改めて、人の信用を回復しやうとは、考へず、又、自分が、素行の一點から、多くの人に、忌まれて居る、といふ事なぞは、勿論、考へても居なかつた。

元來が、何事に付けても、人一倍の使途には、なるのであるから、維新の際にも出役して、相當の功勞は、立てゝ居る。所が、先輩の間に於ては、甚だ不信用であつたから、有隣の功勞は、認めて居ても、更に重く用ひて、他日の用に當てやう、とするものはなかつた。従つて、論功行賞の際にも、有隣は、遂に省かれて、殆ど路上の人を見るが如き、嚴しく排斥してしまつたので、有隣の不平等は、日一日と、昇まつて行くばかりであつた。

自分の不品行から、斯ういふ風に、一藩の人の、氣受けが悪くなつた、といふ事は、少しも省みず、同僚は、自分の、器量を忌み、先輩は、自分が、頭を上げるのを、邪魔にして、無理に押へ付けてしまふものである、といふやうな、勝手な解釋をして、

「よし、さういふ仕向けを爲るならば、自分の方にも、自ら考へがある。何かの機會に於いて彼等を、苦しめてやらう」

と、いふやうな考へになつて、密に其機會を、窮つて居た。

新政府が、出來た初は、殆ど火事が鎮つた後のやうで、其混雜は、一と通りでなかつた。一般の人に對する、論功行賞の如きも、甚だ不公平で、隅から隅まで、行届いて、誰一人として、不平の者が無い、といけやうな、仕向けは出來ないのであるから、各所に、不平が、起きて來た。それは、長州藩ばかりではないが、殊に、長州に於て不平連は多かつた。

西郷は、一旦辭職して、薩摩へ歸つてから後、更に朝廷の御召出しに依つて、再び朝臣となつた。其時、國許から率ゐて來た、兵士が、後に宮闕を守護する、御親兵になつた。土州と長州の二藩からも、同じやうに、御親兵を選抜

する事になつた。是が、近衛兵の基礎に、なるのであるが、兎に角、さういふ譯で、三藩から、相當の人数を引出して、組織する事になつたが、其際にも、長州藩士は、自分こそ、御親兵の列に加はるものと、思つて居た者が、存外に省かれたので、其不平が、強くなつて來た。尤も、御親共といふても、人数に限りがあるのだから、藩士の總てを連れて行く、といふ事を出來ないのだから、取残された者が、不平を言ふのは無理のやうではあるが、實は、先輩が、豫め其不平を察して、調和の策を、取つて置かなかつた、といふ、手落もあるのだ。

此機運を見て、有隣は、窃かに喜んだ。愈々、我時來れり、といふやうな考へで、窃かに同志の糾合に掛かつた。時に、有隣と、同じやうな境遇になつて、不平を懷いて居る者は、澤山にあつたが、其中に於ても、大樂源太郎が、有隣と、意氣が投じて、屢々、往來するやうになつた。

今日も、有隣の宅へ、大樂が、やつて來て、頻に密議を、凝して居るのだ。

「時に、富永、唯徒らに不平ばかり、唱へて居ても、詮の無い事であるから、何とかして、我等の乗すべき、機會を作らねば、面白くないと思ふが、足下は、何う考へるか」

「そりやア、無論、それに違ひない。全體、藩の先輩面をして、木戸を首め、一時の僥倖を私した、奴等が、時を得顔に天下を横行して居るのを、見るに付けても、胸の痛くなる程、不平は重なるのぢや。彼等が、維新の大業を、己等の手並でやり、遂げたやうに、考へて居るのが、間違ふて居るのぢや。自分が、危い時は、彼方へ逃げ、此方へ隠れして、愈々、時運が、廻り來た、と見て、何處からか、現れて來て、其儘、他人の春いた餅を、盗つて食ふた、といふ。其狡い遣方に對しては、充分に遣付けてやらぬ、と、我等と、同じやうな不平を、懷いて居る、一般の藩士の將來にも、害をなすだらうと思ふから、此際、一と奮發して、風雲を捲起してやるが、よいのぢや。それに、此不平は、我藩ばかりでなく、何れの藩に行つてもあるから、我等の遣方さへよければ、各藩の不平黨は、一時に勃然として、起つて來るに、違ひない。さうなれば、望みの通り、天下大亂になる。それから先は、我等の腕次第

で、僅かの功勞に、安逸を、貪つて居る、木戸や廣澤の一派が、尻尾を捲いて、迷廻るのを見るのも、一興ぢやらうよ。ハツハツハー』

昂然として、言放つた。有隣の一言には、何處となく、生氣がある。縦令、言ふて居る事は亂暴であつても、聞いて居る、大樂としては、此位に愉快な事はない。そこで、大樂も膝を乗出して、

『それに就て、斯ういふ事を、考へて居る。今國に、取殘されて居る、藩兵に、不平の奴が多いのだから、隊長から隊長へ、連絡を取つて、其指揮の下に、藩兵を、悉く脱走させる、といふ事が、最も妙策だ、と思ふが、足下は、何う考へるか』

『ウム、それぢや。それより外に、方法は無い。併し、それが、巧く行かうか』

『そりやア、巧く行くも、行かぬもない。豫て、此心があるから、拙者は、それ／＼隊長の中でも、不平の強さうな奴を押へて、既に説付けてあるから、愈々、足下が、宜いと思ふならば、一夜、何處かの酒樓で、足下と、其隊長と會見して、拙者が、立會になつて相談したら、それで、直に決する事だらう、と思ふ』

有隣は、膝を打つて、

『さうなれば、此上もない。是非、纏まりを付けて貰ひたい。拙者には、又其以外に、力を貸す者も、あるのぢやから、其取計らひだけは、仕て貰ひたい』

『宜しい。それでは、直に掛なる事にしやう』
其晩の相談は、それで終つて、是から大樂は、不平を唱へて居る、名隊の連中に、段々、連絡を付ける事にした。元來が、其考へがあつて、平生から、世話をして居た、といふやうな點もあつて、忽ちに不平連の、聯絡は付いてしまつた。是が有名な、長州藩の脱兵騒ぎ、といふ事になるのだ。

大樂は、梅田雲濱の門人で、文筆の才は、非常にあつた。殊に、辯舌に巧で、論議縦横、勢ひに乗つて、辯じ立てると、何んな者でも、心を動かす程に、人を説くに、巧であつた。併し、惜しい事には、幾分か輕躁の點があつて、落付いて事を爲る人とは、いへなかつた。雲濱の門人としては、あまりに輕躁で、且つ浮薄にすぎる點が、多かつた。要するに、雲濱の學問は、うけついたが、人格には、少しも觸れなかつたらしい。

雲濱は、若州小濱の浪人で、曾ては、江州大津の、上原甚太郎の門に入つて、陽明學を學んだ。上原は、當時の陽明學者としては、なかく、評判の人であつた。性質は、嚴格にすぎて、氣難しい所はあつたが、併し、人に接しては、暖味のある、大人の風もあつた。多くの門人の中で、一番の氣に入り、梅田源次郎である。

梅田が、嚴格な態度で、却々、人に許さなかつた、といふ點は、確に上原先生に、私淑する所があつて、性質の一部が、似通ふものだらう、と思ふ。雲濱は、非常に美男子で、何うかすると、人の噂にも上る位に、容貌が好かつた所から、同窓生の間で、頗る疑ふて、雲濱の秘密を探らう、とした。けれども、遂に異性に、關係して居た、といふやうな事は、無かつた程に、嚴格な性質であつた。學問も、門人の中では、一番に出來たし、先生の氣にも、入つて居たのだ。

然るに、誰言ふとなく、梅田が、或家の娘と、通じて居る、といふやうな噂が、ぱつと立つた。初の中は、梅田も、知らなかつたのだが、段々、人の噂するやうになつてから、漸く自分も氣付いて、甚だ怪しからぬ事だ、と思ふけれども、人が勝手に噂するのは、何うも致方が無い。自分が探りを、入れて見ると、其問題になつた、娘の家も判つたから、或日、學業の餘暇に、散歩に出掛けて、其家の前を、行きつ、戻りつして、居ると、廳で、窓の障子が、

さつと開いた。振仰いて見れば、妙齡の美人が、顔に紅葉の色を散して、恥し気に、源次郎の姿を、眺めて居る。ハハ是だ、と思ひながら、行過ぎやうとした。後の方で、チリーンと音がしたので、梅田が、振返つて見ると、其娘が、簪を、窓から落したのだ。思ふに、拾つて呉れ、といふ謎であらう。儲は、さういふ所から、因縁を付けて、掛り合ふのだな、と、疾くも、それと悟つて、梅田は、非常に憤慨した。「さても怪しからぬ、妖女である。身は深窓の下に、人となつた良家の少女でありながら、是までに、厚顔しい振舞をするのは、平生の品行も思はれて、汚らしい女である。よし、それならば、其やうに此方でも、斷りの仕様が有る」と、ツカ／＼と、窓の下へ、進んで来た。袴の紐を解いて、手早に、脱いでしまつた。娘の方では、變な事をする人だ、と思ふて、見て居る中に、クルリと、裾を捲つて踞む、と、洵に汚い話だが、黄金色の左振りを一山、異臭、鼻を打つて、迎も見て居られるものでない。娘は、ピタリと、障子を閉めて、姿を隠した。源次郎は、ニヤ／＼笑つて、其儘、馳へ、歸つて来た。

何んなに、惚れた女でも、斯んな馬鹿な事をされたら、大抵、愛想を盡して、しまふだらう。梅田が、女に想はれたのを斷るに、口を利かずと、尻て用を達した、といふのは、如何にも、奇抜な遣方ではないか。それから後は、其女の事に就て、悪い噂は、バツタリ止んでしまつた。

梅田は、物堅い性質であつたから、上原先生も、深く見込んで、將來、此藝を譲るべきは、梅田の外には無い、といふ事は、動もすれば、親友の間に、口走る位であつた。

人間は、病の器といふが、全く其通りである。今日は、達者で居ても、明日の事は、計り得ない。上原は風邪の心地と、床に臥したのが因で、一日と、病勢は、悪くなつて来た。多くの門人は、よく看護にも努めたが、もう回復の途は無い、と、醫者も、匙を投げてしまつた。別けて、梅田は、寢食を廢して、看護の勞に、當つて居た。或る時、枕許へ、梅田を呼んで、

「俺の生命も、且夕に迫つて来た。就ては、お前に頼みがあるが、聽いて呉れぬか」

「先生、氣の弱い事を、仰しやつてはいけません。醫者も、御重體とは申して居りますが、全然見込みがないとは、未だ申して居らぬので、ございますから、昔の諺にも、病は氣から出る、といふて居る位で、平生の御氣象にも似合はず、そんな氣の弱い事を、仰しやつてはいけません。御氣を丈夫にして、一日も早く、御回復を祈ります」

「イヤ、逆もいかぬ。多くの門人を集めて、古人の道を傳へる事を、職分として居る者が、自分の生命が、且夕に迫つて居る事を、知らぬ筈はない。もう、俺は、駄目なのであるから、そこで、お前に頼むのぢや」

斯う言はれて見る、と、梅田は、一言も無い。實は、先生の生命は、もう兩三日の中に、迫つて居るのだ、といふ事を、醫者から、聞いて居るので、胸が、一ぱいになつて、何と答への仕様もなかつた。

上原は、早く妻を失ふて、たつた一人の娘がある。其娘が、可哀といふ爲に、後妻を迎へずに、獨身で居たのだ。父の病氣に、顔の寝れる程心配して、枕許を離れなかつた、娘の信子も、聽いて居るのだ。上原は、絲のやうに、細くなつた腕を出して、娘の手を、確かり握つた。

「諸、源次郎、お前に頼み、といふのは、外の事でもないが、此藝を譲らう、とするのは、お前の外に無いのぢやから、是非、引受けて貰ひたい。それについては、娘の信ぢやが、お前の一生の妻として、娶つて呉れるやうに、俺から、頼み入る」

明白に、斯う言はれては、源次郎よりか、娘の信子の方が、何の位、體裁が悪いか、判らない。心配の中にも恥しい、といふ氣はある。眞赤な顔をして、下を向いてしまつた。源次郎も、此道に掛けては、極めて初心なことから、同じやうに、下を向いて居る。

四

暫く經つて、源次郎は、頭を上げた。

「先生の仰せでは、ござりますが、なか／＼以ちまして、私、風情が、此塾の後を繼ぐ、といふ事には、なりませぬ」
「そりや、何ういふ譯ぢや」
「別に、何ういふ譯といふて、仔細はありませぬが、私如き、未熟な者が、先生の御後を、引受けた所で、門人が、承知するものでは、ございませぬ。却て先生の御名を、辱めるやうな事があつては、一大事でございますから、御辭退申しまする」

「イヤ、其遠慮には及ばぬ。弟子を見ること、師に如かず、といふ格言もあつて、俺の眼から見れば、お前の外に、此塾を譲るべき者は無いのぢや。見非、引受けて呉れ、若し、お前が、承知して呉れぬ、と、可惜、今日まで築き上げた、塾を潰すやうな事にも、なるのぢやから、厭ひもあらうが、承知して貰ひたい」
暫く考へて居た、源次郎は、

「それまでに、仰せられる事ならば、止むを得ませぬから、御引受いたしますが、返す返すも、未熟な學問を以ちまして、先生の御後を繼ぐ、といふ事は、難しいのでござりますが、それまでに仰せられる、御心に従ふて、引受けは致しませう」

「ウム、それを聽いて、俺も安心ぢや。就ては、娘の方は、何うして呉れるか。それも、聽いて置きたい」

「最前から、段々と、有難い思召で、ござりますが、私は、少しく心に期する所が、ござりまして、尙ほ一兩年は、妻を迎へぬといふ、覺悟に、なつて居るのでございますから、其事だけは、平に御免を蒙りたく存じます」

「フ、ム、さういふ心願が、あつての事ならば、止む事を得ないが、今が今、直に同棲しろ、といふ譯ではない。一年でも、二年でも、お前が、待てといふまでは、娘にも待たせるから、承知したといふ一言だけは、聽かせて貰ひたいのぢや」

「先生が、左様な仰しやつても、御本人が、御承知下さらねば、此事は行はれないのでございますから……」

「ウム、それも、さうぢや。少し待つて居て呉れ」と、言ひながら、娘の方へ向直つて、

「これ、何うぢや。今、聞いて居るやうな次第ぢやが、お前は、何う考へるか」

總て、斯うした事は、世間一體に、女親の役目に、なつて居て、それも、對手になるべき男が、居ない所で、密と聽くのだから、娘の方でも、直に返辭はするが、如何に病氣で、且夕に迫る生命である故、此場で極めるのが、肝要だといふやうなもの、自分の眼の前に、婿さんと、なるべき人が、坐つて居る。そこで、一年なり、二年なり、待つた後に、同棲するといふのを、お前は、何うかといふて迫られても、直に返辭が出来程に、輕躁な娘なら、進も、其長い月日を、待つて居る譯もなく、その待てるやうな、堅い娘なら、即座に、返辭の出来る筈は無い。信子は、顔ばかり赤くして、下を向いて、更に答へがない。上原は、幾らか焦込んで、

「何故、返辭をせぬ。お前の答へ一つで、此塾が、立つか立たぬかの、瀬戸際ぢや。何分とも、返辭をしたら宜からう」

再三迫られて、信子は、

「ハイ」

と答へた。

「ハイと言ふのは、承知した、といふ譯か」

「ハイ」

「よし、それで、話は解つた」

梅田の方へ、又向直つて、

「お前も、聽いて居る通りで、娘は、承知したのぢやから、何うか、未長く添ひ透げて呉れるやうに、頼み入る」

『それまでの仰せて、御儀さんが、御承知とあるならば、私に於ても、違背はござりませぬ』
『オー、それを聞いて、俺も安心ぢや。今直に眼を眠つても、思ひ残す事は無い』
喜びの中にも、眼には、涙を湛へて居る。

それから、上原の枕許で、ホンの盃事の眞似をして、其日は、過ぎてしまつた。翌日の明方に、先生は、遂に眼を眠つた。前以て、門人を呼んで、其事は、申し聞かせてある。其日から、門人一同は、梅田を以て、若先生として、従ふやうになつた。梅田の平生が、行ひ正しく、學問の出来も、正に良かったので、迎も、自分達は及ばない、といふ事を、認めて居たから、存外に、後の纏まりは宜かつた。されば、上原の葬儀が、終つた後に、梅田は、塾の主人となつて、引受けた後も、段々、塾は榮えて來た程である。

所が、それは唯一時の事であつた。實を言へば、門人の中にも、二三の善からぬ奴があつて、頻に梅田の悪口を言ふては、外の溫和しい、門生を咬すのであつた。初の中こそ、そんな事は、受付けずに居た者も、色々な方法で、煽られて來ると、悪い方には、導かれ易く、一人減り、二人減りして、段々、門人は減る。遂には塾の維持も、出來ない程に、少數の門人に、なつてしまつたから、元來が、正直で、疝積の強い、梅田としては、もう堪へられなかつた。上原先生は、多年の功で、門人の扱ひ方が、巧かつたけれども、梅田の方は、何分にも書生上りで、一足飛の塾長である、何うしても、ヤンワリと、人に當る事が出來ない。元來が、厳格な性質とて、随分、門人に向つては、教授の場合にも、荒々しい叱言を、言ふことがある。そんな事も、不人氣の一つとなつて、何時か、上原塾は、閉鎖の外ない、非運に陥つてしまつた。

折柄、京都の友人で、二三の者が、訪ねて來て、頻に京都へ移つて來いといふて、勧めるのであつた。
『お前が來る、といふならば、我々が周旋して、例の望楠軒へ、入れるやうにするから、是非、さうしたら何うだ』
と言はれて、梅田の意は動いた。大津では、維持が付かなくなつた、折柄であるから、喜んで、其の勧めに従ふ事に

なつた。幾日かの後に、妻の信子を連れて、京都へ出ると、望楠軒に移つた。
望楠軒は、小濱藩の學塾でなつた。梅田が、小濱の出身であり、亡父は、藩士の一人であつた、といふ關係から、斯うした事にはなつたが、それも東の間で、梅田は、藩政改革の意見書を、酒井侯へ、上つた一條から、望楠軒を、逐はれてしまつた。

五

京都へ出てから、梅田は、追々と、交際の範圍が、廣くなつて來た。頼三樹三郎、藤森弘庵等を首め、諸藩の有志や、公家の諸大夫とも、交際するやうになつて、漸く諸人からも、重く視られて來た。元來が、朱子學を修めて、更に陽明學へ、移つて來たが、其上に、和學の造詣も深く、上原の塾生であつた時から、上原の仕込みで、勤王の志は厚かつた。

京都へ移つてからは、勤王派の志士と、交りが多くなつて來たから、益々、勤王の志は、固くなつた。
従つて、幕府に對する、憎惡の念が、深くなつて來て、盛に討幕論を、唱へるやうになつた。殊に、開國保約の一條から、朝廷と幕府の間に、火を擦るやうな、交渉が起つた。それ等の關係から、勤王派の唱へる、討幕の説が、強くなつて來る。梅田の如きは、最も激しい議論を、唱へる一人であつて、幕府の方からも、今の言葉で謂ふ、注意人物の一人に、なつて居たのである。

其平生が、最も眞面目な人であつたから、従つて、華奢風流の遊びなどは、絶えて爲なかつた人だ。

『苟も、天下の志士たる者が、遊里に出没して、卑むべき遊女に、接近するとは怪しからぬ』
といつて、同志の浪人を、戒める事なぞがあつて、それが爲に、同志の中では、梅田を、敬遠するものもあつた。
長州の久阪玄瑞は、年齢も若く、廿歳を超えたばかりで、殊に、才氣の走る男だけに、遊びの方にも、なか／＼發

展して居た。聲の美しいのを自慢にして、俗謡などを唄つて、三味線を弾いたり、太鼓を叩いたり、遊藝にも、器用であつた。それを見て、梅田が、
 「貴様のやうな奴は、口に、天下國家の事を語つても、行ひは、幫間に等しいのであるから、到底、志士の交りなすべき奴でない」
 と、言ふて、非常に辱めた。

久阪は憤激して、梅田を斬る、と言ふて、立ちかゝつたのを、外の者が止めて、漸く治つた事がある。其後、段々、交際つて来る、と、久阪は、年齢こそ若く、道楽こそしても、吉田松陰の高弟で、將來に、有望の志士である、といふ事が判つた。梅田は、自分の輕率にして、妄に人を侮つたのを恥ぢて、久阪を訪ね、前日の過言を謝した、といふ事がある。一寸した逸話にも、斯うした事があつて、梅田は、何處までも、眞面目な志士であつた。
 學者として、一つの塾を預り、多くの門人を集めて、書物の講義をすれば、謝禮を受けるから、生活には苦まぬが、何の資産も無く、門人も去つて、一個の浪人となれば、先づ覆ふて来るものは、生活難である。況して、明けても、暮ても、天下國家の事を、口にして居る、所謂、志士の境遇に立てば、其日の事に苦むのは、言ふまでもない。一方、交際が廣くなつて、梅田の名が顯れると、同時に、家の生計は、慘になつて来る。甚だしい時は、三度の食事にさへ、差支へる事がある。けれども、梅田は、更に頓着もなく、相變らず、勤王攘夷で、奔走して居た。
 其時分に、門人となつたのが、大樂源太郎であつた。才氣が溢れて、記憶が良い。將來に見込のある、門人と見たので、梅田も、目を掛けて、大樂には、よく教へた。梅田の前でこそ、上手に立廻つて居るが、大樂の性質では、逆も、梅田の衣鉢を繼ぐといふやうな、譯にはならぬ。流石の梅田も、大樂には、惚れ込んで居たのであるから、心中までは、見抜く事が出来ず、頻に力を入れて居た。
 其うちに、安政五年の、大疑獄が起つて、井伊大老が、老中の間部下總守を、京都へ上らせて、手入をする事にな

つた。第一に梅田が捕縛をされて、江戸表へ、監送された。評定所の調べも、幾度か受けたが、梅田は、極端な勤王討幕論を、有つて居たのであるから、評定所の訊問が、積に觸つて、係りの役人の前で、大氣焔を吐いて、幕府を罵つた。それが爲に、當時、繫獄された者の中で、一番に憎まれたのは、梅田であつた。自殺の恐れがある、といふのを、口實として、手足の爪を引抜き、上下の齒を、抜いて了つた、拷問苛責に遭ふたのは、梅田が、一番に酷かつた。といふ事である。

それか、あらぬか、遂に評定所の訊問中に、病を得て、小笠原の屋敷へ預けられ、衰弱の爲に死んだ。梅田は、何處までも、薄命な人であつた。
 劍舞の詩に「妻臥病床兒泣飢」といふのがある。それは、妻の信子が、幼兒を抱いて、病に苦しんで居る時、紀州沖に、異人の船が見えた、といふので、駆付けける時に、壁上に題した、詩である。
 熱烈、火の如き、志士として、而も、陽明學の造詣が深かつた、といふので、梅田の名前は、志士の間には、知られて居た。殊に、長州へは、吉田松陰との關係から、二度も、やつて来て居るので、有外に、長州人の耳には、梅田の名は、這入つて居る。大樂が、梅田の門人である、といふ事から、藩の先輩が、大樂を、極めて侮り輕んじて、動もすれば、排斥する風があつた。けれども、藩士の間には、存外に、信用する者もあつて、中には、書物の講義を聽いたり時勢の議論を聽いて、深く大樂を信じ、藩の先輩が、大樂を嫌ふのは、全く其才能を嫉んで、邪魔者扱ひにするのである、といふやうな、解釋をして居た者も、澤山にあつた。

六

唐人の詩に「一將功成萬骨枯」といふのがある。是は、何れの場合にも、其通りであつて、下積になつて居るものは、働く時は、命賭だが、御褒美といふ時になると、軽く取扱はれるものに、極つて居る。明治初年の、論功行賞

の如きも、實際に於て、赤分の働きはして居た者でも、平生の身分が軽く、舞臺の表面に、立つて居なかつた者は、何んな奇功を奏した所で、藩の人として扱はれ、賞與に外れる、といふやうな傾きは、多くあつた。賞典祿にしても、既に名前が、高くなつて居る者は、初から澤山貰つて居るが、さうでない者は、十把一東に、處分されて居る。従つて、分配高も少く、其行賞が、下公平に流れた、といふのも、實に不平を懐く者が、言ふばかりではなかつた。

當時、萩の藩廳に在つて、藩政に與つて居たのが、杉孫七郎である。藩に勢力があつて、天下の事にも與つた、といふやうな、偉い者は、東京へ、出て居て、國許には、重い者は居なかつた。何事も、起らぬ時は、杉一人の力で、何うか、斯うか、藩の治まりは、決して行くが、イザ事が起きた、といふ時になると、杉の獨力では、鎮撫し得る、とは、いへぬ。殊に、論功行賞に、不平を懐く者は、怒が手傳つての不平であるから、鼻息も凄まじく、理窟や情實で抑へつける事は出来ぬから、杉も、持論してしまつた。

先輩の排斥こそ、受けて居るが、富永と大樂の兩人は、存外に、不平連から、重く視られて居つたから、其言ふ所も、よく行はれた。大平無事の時に、机に向つて、事務を執らせたら、或は覺束ないかも知れぬが、斯ういふ風に、人心が、動いて居る所へ、飛込んで来て、煽動をさせたら、殆ど名人とも言ふべき、奇才を、有つて居た。此兩人が、盛に煽り付けるのであるから、不平連の鼻息は、荒くなるばかりであつた。

杉も、之に就ては、少からず心を痛めて、頻に鎮撫して廻つたが、なか／＼折合が付かない。そこで、據所なく上京して、木戸を首め、其他の有力者に、歸國を促して、此鎮撫をさせよう、といふ氣にはなつたが、偕て、自分が、此場合には、藩廳を棄て、縦令、暫時の間でも、居らなくなる、と、一層、騒擾を甚しくさせる事に、なるかも知れぬ、と、それやこれやを考へて、自分の行く事は止めたが、併し、それにしても、誰か遣る必要はあるので、野村靖と、三好重臣の兩人を呼んで、上京させる事にした。

兩人も、豫て心配して居たのであるから、杉の依頼を聽いて、承知したのであるが、東京へ着いて、第一に、木戸を、訪ねて見る、と旅行中で、不在であるといふから、據所なく、廣澤兵介や、伊藤俊輔、或は井上開多を訪ねて、段々、相談に及んだ。所が、兩人から、藩の事情を聞取つて、心配はして居るやうであるが、然らば、誰が歸國して、鎮撫の任に當るか、といふ段になると、一向に、話の運びが付かない。そのみならず、藩の先輩が、昨今の行ひを見ると、實に豪奢な、生活を極めて、一夜に、百金を惜しまぬ、遊びも續ける、といふやうな、實に羨ましい程の、全盛を極めて居る。國許に居た時は、不平連の鎮撫に、努めて居た、兩人も、暫く滯京して、此状態を見ると、國許の者が、不平を懐くのも、無理はない、と思つた。

維新の風雲に際會して、巧に難關を切抜け、幕府を倒して、今日の政府を造つた。其働きは、偉かつたにもせよ、自分等は、斯うした行ひを、仕て居ながら、國許の者には、申譯だけの追賞をして、それで、済まして居る、といふのは、良くない事だ。それが爲に、國許には、騒擾が起らう、として、其鎮撫に、苦しんで居る事は、屢々、申出て居るのであるから、それを知らぬ筈は無からう。然るに、木戸が、此際に旅行して、何時歸るか判らぬ、といふが如きは、甚だ以て、怪しからぬ事である、といふやうな事も、考へるやうになつた。

不平を鎮撫する爲に、先輩の誰かに、國許へ、歸つて貰はう、と、其使者の兩人が、不平を懐くやうになつて来た。従つて、政府の役人に、なつて居る、先輩や同志を訪ねても、不平連を庇護して、政府の役人に、なつて居る者の行ひが善くない、といふて、攻撃を爲るやうになつた。是では、鎮撫の依頼に來たのでなく、不平連の意見を、取次ぎに來たやうなものだ。

伊藤や廣澤が、頻に心配して、木戸の出先へ、人を走らせて、歸つて呉れ、といふて、促しては居るが、木戸は、急に歸りさうもない。そこで、兩人が、相談の上で、兎に角、野村と三好を慰めて、早く國許へ歸して、充分に鎮撫をさせて置いて、その後から、木戸をやらう、といふ事になつた。

長州藩から出て、第一に、参議の職に就いたのが、廣澤兵介である。廣澤は、非常に偉い人で、長く生きて居たら、木戸以上に、名聲を博したらう、と思ふ位に、立派な人物であつた。惜しいかな、暗殺の難に遭ふて、早く死んでしまつたが、それに就ても、誰が殺したか判らない、で有耶無耶の中に、事件は、葬られてしまつた。

明治政府に立つて、僅の年月であるが、廣澤の事は、後年になつて、其爲人を、褒める者が、多くなつた位だから、なか／＼の遺手であつたには、違ひない。それに比べると、伊藤の如きは、未だ三流以下の人として、餘り重きをなして居なかつた。伊藤が、那アした、氣象の人で、誰に向つても、圭角の無い、上手に立廻つて居た所から、廣澤の、他の長州人とは、よく衝突したが、伊藤とは、存外に美しく交際して居た。伊藤が、訪ねて来て、廣澤を説いた。野村と三好の兩人を慰めて、早く國へ歸さなければならぬ、といふ事を、頻に唱へるから、

『宜しい。承知いたしました。さういふ次第ならば、是から兩人で、何方かへ、彼等と呼んで、諭す事にしよう』

『何うか、さういふ事に、願ひたい』

『承知した』

是から、兩人は揃つて、料理店に来て、兩人を迎へにやつた。

七

暫くすると、野村と三好は、揃つて来た。伊藤は、兩人を見ると、

『ヤア、大層早かつたね』

『迎ひを受けたから、直ぐにやつて来た』

『今日は、廣澤が、是非、お前達に、懇談をしたい、といふので、俺も、話して置きたい事があるので、旁、一ぱい飲みながら、久し振りで、打寛いで話さう、といふ積りで、聘んだのぢや』

兩人は頷きながら、席に着いて、ヂツと、廣澤の方を見た。

そのうちに、料理が運ばれる。美しい藝者も、出て来る、といふやうな譯で、忽ちに席は賑つた。今の鳥森の待合で、有名な演乃家の女將が、未だ其頃には、お濱と、いふ、有名の藝者であつた。又、陸奥宗光の夫人が、柏家の小兼といふて、賣出しの時分だ。或は、江藤新平の愛妾、お駒や、板垣退助の惚込んだ、小清などが、全盛で居た時分だから、同じ藝者にしても、其頃の藝者は、有志家扱ひに、慣れて居て、大概の者は、一廉あつて男らしい、氣象を有つた、藝者が、多かつたものだ。

近年をなつて、新橋も、不見轉の本場と極つて、オキヤアセの名古屋種が、跋扈を極める、といふやうになつて、迎も、御話にはならぬが、未だ其頃の新橋は、深川の羽織衆から、轉じて来たのが多く、地味な、結城の着物に、引掛帯で、意氣な吾妻下駄を、素足で、空いて歩く、といつた、倅な風俗が、藝者の見得に、なつて居た時代だ。都々逸の三味線さへ、調子が合はない、といふやうな者は、薬にしたくもなかつた。世に時めいた、顯官や、土地に評判の、富豪よりも、年中、短い袷天一枚で、スウ／＼言つて居た、粹な蔦の阿兄などを、情夫にして、人知れぬ苦勞に、頬の瘦せを、見せて居た、といふ。其意氣は、何時か消えて、今では、一から十まで、金次第になつて、張も意氣地も、絶えて見る事が、出来ぬ。残念な次第ではあるが、時勢の壓力から、さうなつて来たので、致方が無い。

盃の數は廻つて、座敷は、何となく浮いて来た。けれども、野村と三好の兩人は、嚴しい顔をして居て、なか／＼打解けた様子は無い。

『貴下、一つ頂戴ませうかね』

年上の藝者が、野村の前へ坐つて、盃を貰はうとするのだ。

『ウム、一つ遣はさう』

野村は、グツと、盃を獻して、

「イヤ、酌は、拙者がしてやる」
 「何うも濱みませんね。旦那の御酌では、本當に酔ふでせうよ、ホ、、、」
 「巧い事を、言ひ屠る。國からポツト出の侍は、其口先に掛かつて、ツイ迂闊々々と、尻が落付いて、國の事などは、忘れてしまふのぢや。ハツハツハツ」
 三好も、合禮を打つて、

「同じ國の者でも、東京に来て居ると、國に居るとでは、雲泥の相違だ。斯ういふのを對手に、毎日、飲んで居たら、そりやア、面白くて堪るまいよ」

兩人は、悪い氣があつて、言ふのでもなからうが、聽かせられて居る、伊藤や廣澤には、何だか當擦りを、言はれるやうな、氣も篤る、廣澤は、左まで氣にも、仕ないやうだが、伊藤は、頻に氣を揉んで居る。

「オイ、野村、貴様も、東京の方へ、出て來ることになったら、何うぢや」
 「ウム、出て來たくもあるが、今の國元の状態では、一寸、出難いからなア。何うだ、貴様達ア、少し入代つて、國

詰になつたら、何なものだらう」
 何と思つたか、廣澤は、藝者に向つて、

「お前達は、少し遠慮して呉れ」
 「ハイ、御用がありましたら、御手を鳴らして下さいませ」

「よし、話が濟んだから手を鳴らすから、直ぐ來て呉れ」
 之を機會に、藝者や女中は、立つて行く。後は、四八の差向ひだ。

廣澤は、膝を正して、兩人に向つた。
 「此間から、段々、聽かされた、國元の騷擾は、我々とても、心配せぬ譯ではないが、何分にも、大政府の基礎も、

未だ固くないし、役人の數は多いが、仕事の段取りも、思ふやうに付いて居らぬ。早く申せば、未だ火の消え切らぬ火事場で、働いて居るやうなものぢやから、何事も、思ふに任せぬ。従つて、國元の事を、忘れて居るといふ次第ではないか、何となく、疎にもなつて居るのぢや。其邊は、貴様等も、察して呉れなけりや、困る。就ては、大樂や、富永の奴等が、何ういふ事をして居るか、其精しい事も、實は、聽いて見たいのぢや」
 三好は、膝を進めて、

「大樂と富永の兩人があつて、説き廻るのぢやから、堪らない。さうでなくとも、不平満々で居る者が、巧い煽動されるのぢやから、追々、仲間も殖える、道理ぢや。杉や我々が、如何に煩悶しても、容易に治まりの付くものではない。木戸か、御手前が、歸つて呉れねば、治まりは付くまい、と思ふ」

「ウム、さうか。俺は、今、何うしても、手を抜く事が、出來ぬのぢや。といふものは、大きな聲では言へないが、薩藩の野心家が、存外に、深い企畫を、爲て居るやうでもあるし、容易に、留守には出來ぬのぢや」

「フ、ム、此方には、さういふ事情もあらうが、併し、國元も、大切ぢやからな」
 「そりやア、さうぢやとも、兎に角、木戸が、一日も早く、此方へ歸るやうにして、それから、相談の上で、國元へ差向けるから、骨折でもあらうが、一先づ立歸つて、木戸の行くまでの間、何とかして鎮撫方を、引受けて貰ひたい」

「さういふ次第であるならば、引受けぬ譯もないが、併し、考へて見れば、國元に居る奴は、貧乏餓を、引いたやうなものぢやからなア、ハツハツハツ」

「イヤ、さう厭味を言はれては、話が出来ぬ。マア、兎に角、國元へ引取つて、鎮撫方を、やつて呉れ」
 「よし、さう話が分つたら、我々は、身を粉にしても、働いて見よう。けれども、御手前等も、少しは國元に居る者の身を察して、斯うした不平が、起きぬやうにして呉れぬ、と、徳川は、漸く倒しても、まだ薩藩もあれば、土州

藩もある。其他、佐賀からも、なか／＼の者が、出て居るのぢやから、國元の動搖なぞを見せて、内兜を見透され
ては、充分に、權勢を張る事も出来まいから、考へて貰ひたい』
『宜しい、よく解つた』
そこで、藝者を聘んで、復た酒宴に移つた。殆ど夜通しの騒ぎをして、野村も、三好も、漸く機嫌が直つて、翌日
は、國元へ歸る事になつた。

八

木戸は、漸く旅から、歸つて来て、今、旅装を解いたばかりである。
『ハツ、申上げます』

『何ぢや』

『廣澤參儀が、御出になりました』

『オー、廣澤が、さうか、御通し申せ』

今、歸つて来たばかりの所へ、早速、廣澤の來訪は、自分の歸るを、待受けて居たものに、違ひない。大方は、此
頃の書面で、承知して居るが、國元の一條だらう。流石に、木戸も、夫と悟つて、廣澤の來るのを、待受けた。

『ヤー、大分長かつたのう』

『ウム、存外に、手間取つてな。サア、それへ……』

廣澤は、設けの席へ着いた。

『書面を、見て呉れたらうか』

『ウム、皆見た』

『國元が、あアいふ状態に、なつて居るのぢや』

『困つた事に、なつたのう』

『此間も、三好と野村の兩人が、やつて来て、話より何より、厭味が先ぢや。之には、俺も、困つたよ』

『さうぢやらう。俺も、それを聴くのが厭さに、實は、愚圖々々して居たのぢやが、漸く歸つて来たのぢや』

『兩人に、聞いて見る、と、我々が、想像して居るよりも、面倒になつて居るやうぢやから、一日も早く、何とかし
て、鎮撫の方法を、講じなければなるまい。表面の騒ぎになつては、第一、薩藩の者共に對しても、面目ないから
な』

『そりやア、さうぢやとも、併し、富永や大樂が、例の悪戯から、由ない事を仕出來して、唯、我々を、困らせて喜
ぶ、といふのぢやから、手の着けやうも無い』

『大分、火の手が、激しいやうぢやから、貴下、一度、歸つて呉れぬか』

卒然として、木戸の、歸國を促した、廣澤の一言には、流石に、木戸も、答へは無く、腕を組んで、暫く考へて居
た。

『何うぢやらう。貴下が、歸れぬとなれば、何とか都合して、俺が歸らう、と思ふが、此鎮撫は、俺が歸るよりは、
貴下の歸つた方が、效能があらう、と思ふ。貴下の考へは、何うぢや』

『左様さ。そりやア、何方が歸つても、同じ事だらうが、大樂は、姑く措いて、富永の奴は、我輩の行つた方が、都
合が宜からう。何とか都合して、歸る事にしよう』

『是非、さうして貰ひたい』

其日の相談は、それで済んで、廣澤は、直ぐに歸つた。

木戸は、朝廷へも、歸京の届けをして、旅行をするにも、病氣の爲に、湯治に行く、といふ事が、理由になつて居

るのだから、全快届を出して、兩三日は、政府の勤めを、續けて居た。それから、段々と、國許の事情を、他からも聞いた。殊に、伊藤は、木戸の乾兒であるから、それからも聽いて、詳しく事情は判つたが、自分が歸らなければ、此治まりはつくまい、といふ考へになつたので、朝廷へは、歸省の願ひを、出す事にした。

未だ新政府を設立して、草創の事であるから、内外多端で、容易に、歸國は許されなかつた。段々、騷擾が大きくなつて、今にも爆發しさうだ、といふ、公報さへ来るやうに、なつて来たから、そこで、朝廷からも、特に御許があつて、木戸は、歸省の準備に、掛かつた。所へ、田中不二磨から、書面が来たから、披いて見る、と、

『此度、歸國せられるに就ては、其前に、御話して置きたい事があるから、御都合で、今晚にも、今戸の有明樓邊りで、一酌やりながら御話したい、と思ふが、如何であらうか』

と、認めてあつた。恰度、木戸も、別に約束が無く、田中には、頼んで置きたい事もあるから、承知の旨を、答へてやつた。

田中も、一度は、大臣にまでなつて、相當に世間からも、尊敬せられた人物である。尾州藩では、身分の高くない武士の伴であるが、累進して、内閣の一人になつた。

著者が、明治十八年に、名古屋の獄に、這入つた時の事であるが、合監した一人に、紙屑屋の間屋があつた。其時の話に、斯ういふ事を、聞いて居る。

『名古屋からは、田中不二磨さんといふ、偉い人が出て居る。而も、此人は、表面は、武士の子供といふ、事になつて居るが、實は、さうぢやない。俺と同じ、紙屑屋の伴で、四十二の二歳子は、家に調をする、といふので、可愛い子供ぢやが、打棄てる事になつた。けれども、唯棄てるのも可哀想だ、といふので、段々探つて、或る武家が、子供の無いので、神信心をして居る、といふのを聞出して、其家の前へ捨てた。子供が欲しい、と思つて、神信心を仕て居る位の武家であるから、門前に、子供の泣聲が聞えたので、出て見ると、可愛らしい子供が、箆に入れて

ある、着て居る、着物も、相當のものであるから、是は、何か仔細のあるものに、違ひない、と思ひ乍らも、拾ひ取つて、それから、自分の子として、育てる事にした。それが、田中といふ人で、拾ひ取つた子供は、實子として、藩廳の方へ、届け濟みになつて、育て、見ると、物覚えも宜ければ、伶俐でもある。親も、實子同様に、可愛がつて、到頭、家の相續までさせるやうにした。それが、今の不二磨さんだが、本當の武家の種でないだけに、尙ほ偉いぢやないか。而も、それが、紙屑屋の子供と、いふのだから、本當に、是が層の中からの、掘出し者だ、と言つても差支なからう』

果して是が、眞の説であるか、何うかは知らぬが、満更、嘘でもないやうに、聽いて居た。餘り深入をして聽かなかつたから、其實の親といふ、紙屑屋の親の名も知らなければ、町も知らないが、一説として、傳へて置くのも宜からう、と思ふし、又、斯ういふ話は、よくある事だから、或は是が、眞實であるかも知れない、と思ふ。何れにしても、不二磨は、名古屋種としては、無上の出世をした、一人であるには、違ひない。

九

同じ、長州藩の中でも、色々に、派が分れて居て、其軋轢は、なか／＼に酷かつた。殊に、維新草創の際に、腕前を現はして、立身出世をした、連中であるから、それ／＼に、特色を有つて居る、従つて、讓合つて居る、といふやうな事も、出来なかつたのである。それにしても、木戸は、長州出身の政治家としては、第一人者であつて、薩藩の西郷大久保に對して、太刀打の出来る者は、此他には無かつたのだ。縱令、木戸以上に、實力のある者が、居たにせよ、まだ、それだけの身分に、なつて居なかつたのだから、位地の上に於て、西郷、木戸、大久保には、對立して行く事は、出来ないのだ。何うしても、此點からいふと、木戸が、長州藩の代表者として、然るべき位地に、なつて居たのである。

併しながら、廣澤の材幹は、非常に優れて居て、或は長生をして、政治に與つて居たならば、木戸を凌いで、廣澤が、將來の長州藩を、代表する人物になつたかも知れない。それ位に、遣手であつただけに、圭角も多く、野心も太かつたから、何うかすると、木戸を凌いで、事を爲る、といふ風があつた。そこで、木戸の一派は、廣澤を、喜ばぬやうになつて、何となく、兩者の間が、圓滿でなかつた、といふのも、事實である。

長州藩の中で、友達同志が、暗闘して居る。又、其側面には、徳藩の人でありながら、或は木戸に、味方する者もあれば、廣澤を、鼻眞にする者もあつて、それが自然と、同じやうに暗闘して居るのだから、面白い。田中は、深く木戸を信じて、終始、木戸の爲に、盡した人であるから、今度、木戸が、國元の騷擾に付いて、之を鎮撫の爲に歸國する、といふ事を聞いた。而もそれが廣澤の、勸告から決した、といふので、一段と、危険を感じたのである。木戸の發心から、歸國する事になつた、としても、田中は、甚だ喜ばなかつたのだ。然るに、廣澤が勸告して、木戸の意が動いた。といふので、一層、其歸國を、嬉しく思はなかつた爲に、一應、木戸に會ふて、話して見やう、といふ考へから、書面を飛ばして、都合を、問合せた所が、承諾の返辭が來たから、自分は、時刻を早めて、先に有明樓へ來て、二際の一室で、待受ける事になつた。

今では、隅田川沿岸の地も、頗る俗化してしまつて、昔の面影は止めないが、竹屋の渡しを、向ふに見て、後に、待乳山の森が、鬱然と繁つて、夕陽を庇ふやうになつて居る。有明樓の二際の眺めは、又一段と、評判になつて居た。

此家に、有名な娘があつた。それが、お菊さんといふて、後に、助高屋高助の妻に、なるのだが、一枚畫にも出る程の美人で、お菊さんの爲に、有明樓が、賑ふたものであるが、遂に助高屋の妻となつて、其間に生れたのが、今の澤村宗十郎である。今では、震災の爲に、跡形もなくなつて、那の邊は、一帯に、公園地になつてしまつた。著者が育つ時分には、未だ盛んにやつて、居て、今月といへば有明樓、有明樓といへば今月といふて、人が聯想する位に、

評判の家であつた、市中に、澤山の料理屋や、食席はあるけれど、少し込入つた、秘密の語でもしやう、といふものは、大概、此處まで、やつて來たものだ。隅田川を距て、向島を眺めながら、人待顔に、茶を喫つて居るのは、田中であるが、例のお菊さんが、出て來て、頻に話對手になつて居た。所へ、梯子を上る音と共に、御連様、といふ聲が聞えたので、お菊は立つて、梯子の上り口へ來る。途端に、上がつて來たのは、木戸である。

『オヤ、御前様で、ございますか。田中の御前が、嘘ばかり仰しやつて、あなた様の御出でだ、といふことは、仰しやらないので、ございますよ』

『ウム、さうか、田中は、全體、嘘吐きぢやからなア、併し、名古屋の人は、口前が巧いから、ウツカリ掛かると、酷い目に遭ふぞ、ハツハツハー』

捨白詞の、戯談を言ひながら、木戸は、席に着いた。

『やア、大層、早かつたのう』

『ウム、最前から、待受けて居つたのぢや』

『急の手紙で、何事かと思つて、やつて來たのぢやが。マア、兎に角、一ばいやる事にしやうぢやないか』

『宜からう』

『もう、甘い物は、誂へたのか』

『今、八百善へ、何か注文したやうぢや。一切、お菊さん委せに、してあるのぢやよ。ハツハツハー』

木戸は、肘掛に凭り掛りながら、窓越しに、向島の方を見て、

『何時來ても、悪くないのう。黄塵萬丈の江戸の、市中の中にも、斯ういふ所が、あるのぢやから、時折は、魂の洗濯に、斯ういふ所へ來るものも宜いのう』

其中に、酒肴の用意も出來て、豫て、お菊の計らひと見えて、柳橋から、二三の美形も、現れる。互に戯談口を叩

きながら、盃の數は進んだ。

一〇

木戸が、お菊に、耳打を、すると、聽て、藝者の姿は、座敷から、消えてしまつた。

『今日の話は、何ういふ事か、先づ、それを聽いてから、緩つくり飲む、と仕やう』

『それぢや、御話ませう』

『ウム、何ういふ事か』

『愈々、國許へ、行くのですか』

『サア、何うしても、行かなければ納まりが付かぬ、と思ふから、一寸、行つて見やう、と思ふ』

『そりやア、宜くなからう、と思ふ。實は、歸國の事を、不圖、耳に挿んだので、今夕の催しをしたのぢや』

『フーム、國へ歸つては悪い、と言ふのか』

『マア、さうぢやのう』

『そりやア、何故か』

『聞く所に依れば、廣澤が、貴下に勧めた、といふ事ぢやが、そりやア、本當の事かね』

『廣澤ばかりが勧めた、といふ譯でもないが、併し、主として、廣澤から、話は、あつたのぢや。長い間、旅行して居つて、歸つて来る、と、早速の語であつたが、實は、君等に話すのも、面目ない事ながら、國元の内訌といふのは、なかく、根強い様子で、杉の獨力では、鎮撫が出来ぬ、といふのぢや。そこで、我輩が行かなければ、といふやうな、話の段取になつて、到頭、承知したやうな譯ぢやよ』

『そりやア、強ひて貴下が、行かぬでも宜いさうなものぢや』

『イヤ、我輩も、行く事は好まぬのだが、何うしても、我輩でなければいかぬ、といふので、承知したのぢや』

『其が、少し可怪しい、と思ふ。此場合に、貴下を、是非、やらなければならぬ、といふのは、何ういふ必要があるのか、我々には、計り知る事が、出来ないのぢや。左なきだに、長州藩士の間には、様々の暗闘があつて、貴下に對する、嫉妬偏執の念は、各所に起つて居るやうに、聞いて居る。現に、在官者の中にも、多少は、其氣分の現はれて居る事は、我々、局外者には、よく見えるのぢやから、それを知りながら、貴下に、廣澤が、歸國を勧めたといふのは、其間に何か、深い企みが、あるのではなからうか、と思ふ。茲まで露骨に言ふのは、不謹慎のやうてはあるが、餘りに不思議に思ふし、心配でもあるしするから、一應は、貴下の耳へも、入れて置かう、と思ふて、言ふのぢやから、悪く聽かれては、困る』

田中も、露骨に過ぎる、とは思つたが、其處に迄、突ツ込んで、話すのでなければ、逆も無駄だらう、といふ考へで、思ひ切つて、露骨に、話し掛けたのだ。木戸は、剛巧な人であるから、田中が、親切の心から、期う言ふのであつて、決して離間や中傷の爲に、言ふのではない位の事に、解つて居るし、自分にも、多少、其懸念はあつたのであるから心の中では、感謝して居るが、まさか、長州人として、それに同意する事は、出来なかつた。

『我輩の身を思ふて、それまでに、言ふて呉れるのは、忝ないが、併し、如何に、暗闘はして居ても、顔を見合はせて、話して見れば、直ぐ解る事ぢやから、左までの心配はなからう、と思ふ。兎に角、我輩は一旦、國へ行つて来る積りぢやから、後の事は、貴下等に、頼んで置くから、然るべく頼む』

『然らば、何うしても歸國する、といふのですか』

『愈々、それと極めて、御上の御許しさへ、受けてしまふたのぢやから、今更に、變更は出来ぬ』

『併し、今暫く、模様を見る事にしたら、何うですか』

『サア、それは、宜いかも知れぬが、若し、さういふ事をして、却て疑惑を、惹起すやうな事がある、と、面白くな

い、と思ふから、寧ろ、此際に行つてしまふ事にしやう。萬一、我輩が行かぬ、となれば、自然、騷擾が、甚だしくなるに違ひない。さうなつてからでは、尙ほ治め難くからう、と思ふから、今の中に、行つた方が、宜からう」
「それまでの決心なら、止む事を得ないが、騷擾が、大きくなるのを待つてから、兵を向けて、一氣に討つてしまふ方が、過ちは少からう、と思ふが、何うてせうか」
木戸は、暫く考へて居たが、

「そりやア、面白くない。廣澤首め、一同が、我輩を、國へ歸す、といふ事に、疑ひを置いて見れば、多少の疑ひも起るが、併し、猜疑は、總ての事を誤る、といふ諺もある。まさか、彼等は、さう悪い事を、考へても居るまい。殊に、兵力を以て、國の者は、討ちたくないから、出来る事ならば、我輩の一身が、危い位の事は忍んでも、兵力に依らずして、治めて見たい、と思ふ」

「それでは、もう何も言ひますまい」

「どうか、さうして貰ひたい。併し、貴下の親切は、決して無にはせぬ」

「此の以上、何も言はぬが、併し、注意をするだけは、充分に注意して貰ひたい」

「それは、言ふまでもない」

それで、話は済んで、是から藝者が、出て来る、お菊は、勿論のこと、盃盤の間に周旋をして、面白さうにして、夜の更けるまで、兩人は飲んだ。

斯ういふ事情で、木戸は、愈々、國許へ歸る事になつたが、茲に、もう一つ面白い事が、擲んで来た、といふのは、其前に、西郷が辭職して、國へ歸つたに就て、段々、政府の内部では、入釜しい議論が、出て来て、何でも、西郷を呼び返さなければならぬ、といふやうな説が、多數になつて来て、遂に御上へ申上げると、御許しを得たから、岩倉右大臣が、勅命を蒙つて、西郷迎ひの使節と、いふ事になつて、木戸、大久保の兩人が、同行する事になつた。木戸

は、國元の一條もあるから、表面は、其名義を利用して、途中から、萩へ這入る事になつたのである。

一一

西郷が、明治二年に辭職して、國へ歸つたのは、第一に、自分は、維新の功業を、成し遂げて、既に論功行賞の際に、無上の御沙汰までも蒙つて、既う此上に、出世の希望は無い。従つて、一旦は高踏勇退して、後進の途を開く、といふ事が、趣意になつて居た。又、第二には、此後に起る、第二の維新に對して、其用意をする必要がある、といふ事を、考へて居たのだ。

第二の維新とは、何であるかといふに、王政復古の昔に復つて、政權は、朝廷の手に歸した、とはいふやうなもの、未だ三百諸侯が、頑張つて居て、中央の政府から、達した政命が、直に行はれる、といふやうな事には、なつて居ないのだ。されば、近く之に就て、一大革新が、行はれるに違ひない。其際には、時の勢ひで、押付けて来た、第一維新の革命に、不平を懷いて居た、連中が、必ず蜂起するに違ひないから、それに對する、備へを置かなければならぬ、といふ事を、深く考へて居たのである。それから、もう一つは、論功行賞に對する、不平と、早く中央へ乗出して。意外の出世をした者に對する、國許の不平連が、猜忌嫉妬の眼を以て、何事も、悪い方から、解釋して居る。是が何時か一度は、爆發するに違ひない。して見れば、之は對しても、豫め備ふる所が、なければならぬ、といふやうな事も、辭職歸國の理由には、なつて居たのである。西郷の外にも、是だけの考へを、有つて居た人は、あるだらうが、此人のやうに、潔く身を退いて、國へ歸る、といふだけの決斷は、出来なかつたのだ。

薩藩の微臣から、身を起して、陸軍大將近衛都督兼參議官正三位といふ、偉い肩書の有る人が、繼令、國家の前途に就て、前に言ふやうな、色々な考へがあつて、辭するにもせよ。斯う潔く辭する、といふ言は、餘程、名利の念に、離れた人でなければ、容易に決行する事は、出するものでない。

然るに、西郷が、去つた後の政府は、随分、色々の情弊に纏はれて、大久保や、木戸が、苦しんだ事は、一通りでない。上の方には、三條、岩倉といふ、すぐれた人物もあつて、よく其間の調和は、取つて居たやうなものゝ、何うしても、西郷を引出して、再び之を現職に就かせなければ、すべての纏まりは決かぬ、といふ事を見て、協議の上で、勅命まで蒙つて、岩倉以下の人が、薩摩へ、急行する事になつた。

是は、後の話だけれども、序に言ふて置く。岩倉の一行が、鹿児島へ着いてから、西郷に、掛合つて見ると、西郷の説は、

『徳川幕府を倒して、王政一新にした、根本の御趣意が、追々に、無くなつて来て、矢張り、舊幕時代と同じやうな、政府の弊害に、忍ぶ事が出来ないの、罷めて来たのであるから、今更に、復職する事は出来ぬ』

と、いふのであつたから、岩倉は、之れに答へて、

『如何やうにもして、改革は遂行するから、是非、歸つて呉れ』

と、いふのであつた。それに對して、西郷は、

『よし。それならば、歸る事にもしようが、何ういふ風に、改革するつもりであるか』

といふ、一段になつて、岩倉の一行は、その答に苦んだ。そこで、西郷の意見を、求める事になると、西郷の答は、

『薩長の二藩が、維新の功業を、成し遂げる、原動力には、なつて居たにもせよ。是れあるが爲に、天下の政權を私する、といふ事は、宜しくないから、少くも土肥の二藩位には、其權力を分つて、出來得る限り、廣く人材を、各藩から求める、といふやうな事にして、總ては、廢藩置縣の事も、行はなければならぬのであるから、今から、其支度に掛かる、といふだけの心組を以て、當るのでなければ、逆も、復職しても、前途の見込がない』

と、いふのであつたから、流石に、岩倉は、大きい所があつたし、附いて居る、大久保も、此意見に對しては、左までの反對は無かつたので、相談は纏まつて、西郷は、遂に復職する事になり、東京へ、歸つて来たのだ。

其途中、長州にも立寄り、木戸の案内で、毛利侯に拜謁して、意見を述べ、又、四國へ渡つて、土州の山内容堂侯にも目見えて、纒々、意見を述べた所から、容堂侯も、西郷が、公平の取計らひには、頗る感心して、土州からは、大参事の板垣退助を、上京させる事に、約束が成立した。

斯うした事が動機となつて、政府の組織を、西郷の歸京と、共に改めて、西郷、木戸、板垣、それに、肥前の鍋島藩を代表して、大隈重信の四人が、参議になつた。

話は、前に戻る。

木戸は、歸國の支度に掛かつた。折柄、西郷迎ひの勅使が立つ、といふ事になつたから、其一行に加はつた。是を、表面の名義にして、實は、途中から別れて、萩へ直行して、脱兵騒ぎを鎮めやう、としたのである。何處までも、表面には、脱兵騒ぎの爲に歸る、といふ事を、見せなかつた所に、木戸の苦心が、現れて居る。

田中が、木戸に向つて、此際の歸國を止めやう、としたのは、長州の脱兵騒ぎが、單に普通の不平だけであるならば、格別の事だが、若し、藩から出て、大政府に仕へて居る、大官に對する不平があつて、それが爲に、勃發した不平だ、とすれば、第一に、憎まれて居るものは、木戸に違ひない。或は、邪推して考へれば、木戸に反對の、長州人が、其間に、小刀細工を行つて、斯うした騒ぎを、計畫して置いて、木戸を歸國させてから、危険の位地に、引張り込むのでは、なからうか、といふ事にも、思はれるのだ。田中は、それを、心配して居たのである。そこで、木戸に向つて、歸國の延期を促した、のであるが、木戸は、左様な處が、多少あるものとしても、此場合に、歸國を阻む事は、出来なかつたのである。又、廣澤に向つて、鎮撫を引受けた以上、今更に、田中の忠告に由つて、歸國を思ひ止まる事は出来ないのであつた。

まだ、其頃には、今のやうに、電報の便利が無かつた。國元へ歸るについても、充分の打合せを、仕て置いてから、といふ譯には、ならないのであつた。其代り、反對の者が、豫め木戸の歸國を、早く報じて置いて、途中で、待伏せをするといふやうな、手筈を、自由にする事も、出来なかつたのだから、祕密に歸國する、といふ段になれば、却て其時代の方が、便利であつた。

大阪までは、岩倉の一行に、伴いて来て、それから、木戸は、一人別れて、汽船に乗り、三田尻へ着いた。此處には、藩の海軍省の如きものが、出来て居て、長州藩の、海軍根據地に、なつて居たのだ、又、城下へ這入るのには、此處から上陸するのが、一番に好都合であつた。

小舟に乗つて、木戸は、頻りに船頭を急がせて、海岸へ近付くと、今、船の着いたばかりで、相當に上陸する人もあるの、海岸通りは、色々の人が、往來して居る。遙に見ると、其中に、一人の武士が居て、折しも、春寒の海風を避けやう、としてか、頭巾を被つて、木戸の小舟が、著くのを窺ふて居るやうである。

「ハ、一、是は、何が仔細のある、奴だな」

と感して、窺に刀の目釘を極めて、萬一の覺悟をして居た。木戸は、齋藤彌九郎の門人で、擊劍に於いては、日本で幾人といふ、指折の使手であつたから、イザとなつて、立合ふ時は、腕前のある者を、三人や四人、向ふに廻して、切捲くる位の事は、何でもなかつた。自から好んで、切合をした事はないが、途中で、喧嘩を賣掛けられて、止むことを得ず、人を斬つた事も、二度や三度はある。されば、腕に覺えのある人だけに、其覺悟で、小舟が横付けになる、と同時に、ヒラリと、海岸へ、飛上がった。すると、例の怪しい武士が、ツカ／＼と、側へ寄つて来たから、木戸は、一と足下つて、身勝へをした。

「ヤアー、木戸さんでしたか」

狎々しい一言に、木戸は、尙ほ油断なく、ヂツと、其男の様子を見ると、臆て、頭巾を脱つて、

「よう御出でしたな」

見れば、野村和作であつた。

「ヤアー、野村か、何うして、此邊に居つたのか」

「實は、貴下が見える、といふので、此間から、此處へ来て、待合はせて居たのぢや。船の着く度毎に、それとなく、見張つて居たのだが、ようこそ、お出でした」

怪しい奴、と見たのは、却て味方の野村であつたから、木戸は、漸く胸を撫下した。

元治元年の、堺町御門の戦ひで、戦死を遂げた、入江九市の實弟が、野村である。當時は、まだ和作と、いふて居たが、其後に、靖と改めて、遂に政府に入つて、最初の驛遞總監になつたのが、此人だ、前の相外、本野一郎の未亡人は、野村の娘である。晩年は甚だ振はなかつたが、一時の野村は長州派の政治家の一人として、相當に、人にも知られて、可なり勢力も、有つて居た。元來が、吉田松陰の門人で、兄弟とも松陰には、可愛がられた。

安政の昔に、間部下總守が、江戸から京都へ、乗込んで来る、といふ事を聞いて、松陰は、何うしても、間部を刺してしまへ、といふ考へを、有つて居た。同時に、藩侯が、上京せられるといふので、今の場合、藩侯の上京は、宜しくあるまい、といふ意見で、藩侯へ、意見書を捧げやう、としたが、使者に行く者が無い。松陰は、牢屋に、這入つて居たのであるから、入江を呼んで、之を命じた。所が、入江は、極めて貧乏な、生計をして居た、輕輩であるから、唯一人の母親を、抱へて居て、之を棄てて去るに忍びなかつた。さればとて、先生に、申付けられた事に、背く事もならず、獨り苦んで居た所へ、弟の和作が、訪ねて来たから、涙ながらに物語る、と、

「宜しい。さういふ譯ならば、拙者が、兄上に代つて、參る事にしやう」

和作は、健氣な覺悟を以て、斯う答へた。入江は喜んで、

『それでは、さういふ事にして呉れ』

と兄弟の相談は定まつて、野村が、松陰に遣ひに来て、此事を語つた。和作は、十九歳の時であつた。松陰は、深く兄弟の志に感じて、詩を作つて、野村の行を壯んにした。

斯うした履歴を、有つて居て、それから後は、東西に奔走して、維新の變亂にも、相當の功を立てたが、中央に出ないで、國元に、引込んで居たのである。三好と共に、東京に出て来て、木戸の歸國とまで、運びを付けたのは、即ち此男だ。

『マア、兎に角、其邊の船宿で、話す事にしやう』

『それが、宜しうござらう』

と、野村は、先に立つて、案内をする。海岸の方へ向いて、一軒の船宿があるから、其二階を借りて、這入つた。

『廣澤と、堅い約束はして来たが、容易に、御出でにはなれませう、と思つたが、それにしても、あれまでに、話して、来たのであるから、或は御出でに、なるやうな事もあらうか、と思ふて、實は、心待ちに、待つて居たのでござる』

『ウム、俺も、色々の御用があつて、東京は、離れ難いのであつたが、廣澤から話もあつたし、足下等が、心配して居る事も聞いたから、まさかに、打棄て、置く事も出来ず、歸つて来たのぢやが、何うぢや、其後の脱兵騷ぎは』

『ハ、、、それ程の事か』

『例の大樂や富永が、無茶な事ばかり、言ひ居つて、それに、若い者共が、附利雷同して居るのであるから、如何とも、治めやうがない。流石に、杉も、匙を投げて、今は、傍觀の體でござるよ』

『フ、ム、さうか、夫では取敢ず、山口へ行かうか』

野村は慌て、之を押し止めた。

『いや、そんな氣樂な、沙汰ぢやない。貴下が、今、山口へ這入れば、直ぐ彼等の爲に、害を加へられる。兎も角、下關へ廻つて、あれから道を變へて、萩の方へ、這入るのが、宜からう』

『さうか。それぢや、さういふ事にしやうか』

相談が極つて、野村を案内に、下關へ、向ふ事になつた。

一一一

毛利の城下は、萩であるが、藩政の實權は、文久の頃から、山口へ移つて居た。幕末の頃は、藩士が、天下の事に携はつて、大に活動した、本部とも言ふべき所に、なつて居たのは、下關であつた。地勢の上から言ふても、下關は九州へ渡る者と、九州から出て来る者と、必ず通らねばならぬ土地であるから、此處に、頑張つて居れば、通行の有志を、押へ付けて、何んな事でも出来る。此上もない、都合の好い、地點になつて居た。されば藩士にして、少しく志があつて、重役等と、意見の合はぬ者は、大概、下關へ、落ちて来て、此處で、諸藩の有志が、落込んで来るのを、對手にして、色々な計畫を、立て、居たのである。殊に、高杉が、奇兵隊を、組織してからは、一層、下關の名は、諸藩の有志の間に、重きをなしたのである。

藩の有志で、眞に活動した者は、多く松陰の門から、出た者であつた。萩には、明倫館といふ、藩塾もあつて、三十六萬石の威勢で、建てた學校であるから、其規模も、大きかつたのだが、實際に於て、偉い者が出たのは、却て松陰の塾からであつた。松陰の塾に、居た者には、輕輩の子弟が、多かつた。昔も、今も、其點に於ては、變りは無だが、時勢の上に、動搖を來して、變亂が起らう、とする時、其渦中に飛込んで、眞の仕事を爲る者は、身分の輕い者

から、多く出る。却て、相當の、位地を、有つて居る人の、子供なぞには、活動の出来るものは、殆んど無いに、極つて居る。輕輩の子弟が、藩の權勢を恐れず、向ふ見ずに、活動するといふのは、何う間違つた所で、現在の身分より、外に落ちる事もなく、巧く行けば一步を進めて、何かを掴み得るのであるから、所謂、捨鉢の相撲を取るのと、同じ事で、何うしても、身分の低い者の方に、眞の活動者が現はれるのは止むを得ぬ事だ。

松陰の門下で、一番に、年齢の若かつたのが、品川彌二郎である。松陰が、深く愛したのも、彌二郎であつた。安政六年に、愈々、松陰が、幕府の命に依つて、江戸表へ、監送される事になつた。松陰の監送は、極秘のうちに取扱はれたが、忽ちにして漏れた。之れを聞くと、門人の憤慨は、一と通りでなかつた。彌二郎は、未だ元服前の、少年であつたが、此事に憤慨の餘り、參政職、周布政之助の邸へ、飛込んで來て、何でも面會したい、といふ。周布の家來は、頻に拒んだけれども、肯かない。遂に押問答の末が、周布は、不在である、といふから、そこで、彌二郎は、『宜しい。御不在とあらば、止む事を得ないから、御歸りまで待受ける』

と言つて、一旦、邸外へ出たが、廳で、歸つて來ると、大きな徳利を、下げて居た。無論、其中には、酒が這入つて居る。廳で玄關の式臺へ、胡坐をかいて、徳利の口から、冷酒を飲み始めた。周布の出來も、厄介な餓鬼だ、とは思つたが、對手になるのも、面倒だから、棄て置くと、彌二郎は、飲みつけない酒を、冷で一升餘り、やつたのであるから、頭は、グラ／＼して來て、眠は、チラ／＼する。逆も、坐つて居られなくなつた。自分の丈よりも長い、刀を引抜くと、

『御當家御家來に、御斷りを致す、彌二郎は、酩酊を仕つたから、是より醉狂を致します。御免候へ』

と、言ひ終ると、其長い刀で、襖障子の嫌ひなく、片端から切捲くる。何しろ、酔つぱらつて、氣が違つた、といふ、前觸をして置いて、爲るのであるから、何うにも、仕様がなかつた。殊に、子供ではあるし、旁周布の家來は持餘して、此旨を、周布に告げると、周布は、苦笑ひをして、

『何うも、あの惡戯小僧には、困つたものぢやが、さういふ譯なら、會ふてやらう』

と言ふて、面會を許した。

何故、周布が、品川を避けて居たか、といふと、松陰の門人には、一切會はぬ事に、極めて居たからである。松陰が監送される、といふ事を聞いて、其門人に、攻掛けられては堪らぬから、周布も、此際は、成るべく會はぬやうにして、居たのであるけれども、彌二郎の遣方が、餘りに露骨であつたから、却て可愛らしいやうな、感じが起つて、面會する氣になつたのだ。其時に、彌二郎は、涙を流して、

『松陰先生が、江戸へ送られるのを、何うか、貴下の力で、中止するやうにして、貰ひたい』

と言ふて哀訴するのであつた。周布も、同情の念には堪へなかつたが、此時には、もう如何ともする事が、出來なかつたのであるから、色々に慰めて、

『成るべく、其希望に反かぬやうにする』

と、ほどよく言ふて、返してしまつたが、併し、折角の彌二郎が苦心も、水の泡になつて、松陰は、江戸へ送られる、と、傳馬町の牢で、首を斬られてしまつた。

それから後の、彌二郎は、先生の書遺したものを讀んだり、或は、膝下に呼付けられて、始終、訓戒された、先生の意見に基いて、段々、有志の交際をしながら、到頭、一人前の志士となつて、押も押されもされぬ、身分になつたのである。

木戸と野村が、下關へ、やつて來た時には、彌二郎が、昔の奇兵隊の、殘黨を集めて、幅を利かして居た、時であつた。野村は、其事情を、よく知つて居るから、下關へ着くと、木戸を勸めて、先づ、品川を説付けて、諸隊士の間、聯絡を取らせて、鎮撫の手先に、使ふ事にしたのである。

明治二十五年、選挙干渉の大事件は、彌二郎のやつた事であるが、随分、惨虐を極めたものであつた。當時、民黨、吏黨の、兩派に分れて、鎬を削つて居た時であるが、議會が解散になつて、臨時選挙が行はれると、彌二郎は、内務大臣として、二十五萬圓の官金を散布して、盛に吏黨の候補者を、擔ぎ上げて、一方には、警察權を濫用して、民黨の候補者を迫害し、其運動員なぞで、或は斬られたり、或は家を焼かれて、悲惨な境遇に、立つた者は、少なくなかつた。

併しながら、天は、斯くの如き、暴虐なる政治家に、與するものでないから選挙の結果は、品川の豫想とは、全く反對に、吏黨として、當選した者は、衆議院の椅子、四分の一を占むるに、過ぎなかつたのである。其時分に、此男の、指揮の下に、吏黨の候補者となつて、善良なる選挙民に、危害を加へた者が、今日になつて、民黨面をして居る奴もあるから、可怪なものだ。

此一事から見ると、品川は、惨忍な政治家のやうではあるが、併し、それは、時の勢ひで、所謂、行掛りなるものが、其處までに、やらせたのであつて、實際に於ての品川は、存外、情にも厚かつたし、涙もあつたし、人間も正直であつた。それだから、是までに露骨な、選挙干渉も、やれたのであらう。其失敗に懲り、是は何うしても、政黨の力を以て、立つてなければ、議會政治の下には、何うする事も出来ない、と考へて、それから組織したのが、例の國民協會である。

何ういふ考へからかは解らないが、西郷従道が、道伴になつたのは、不思議な對照である。火のやうな品川と、水のやうな西郷が、一つになつて、而も、政黨運動を始めた、といふのだから、可怪しいぢやないか、到頭、是が爲に西郷は、高輪の家も地所も賣拂つて了つた。それでも、ホンの二十人か三十人の議員しか、引込む事が出来ないで、

國民協會は、無惨な有様で、後の穢多村へ、引繼ぐ事になつた。この連中が、柱の麾下に馳參じて、新政黨組織の一部分になつて居る。これが、再轉三變して、今の民政黨の幹部に、なつて居るのだ。

話は、少し横に外れたが、品川の話が出たから、序に言ふて置いたのだが、晩年の品川は、斯んな調子で、方向を誤つて、その末路は、甚だ淋しかつたが、よく松陰の遺訓を重んじて、眞面目な働きをした、品川を見れば、さう憎むべき所は、無いのであつた。

野村から、迎ひが来たから、直に訪ねて行く、と、意外にも、其席には、木戸も居つて、非常な、款待を受けた。

『全體、何ういふ譯で、貴下は、御出でたのか。未だ東京に、居られる事とのみ、心得て居たが、何時、此方へ歸られたか』

木戸は、稍微笑を浮べて、

『イヤ、今日は、君に、降參しに来たのぢや』

『エツ、降參とは』

『兜を脱いで、品川の陣門に降る、一幕ぢや。ハツハツハ』

何の事か、品川には、少しも解らない。

『何ういふ御話ですか』

『外の事ではない。例の脱兵騒ぎぢや』

『ハ、ー、それが、何うしましたか』

『まさか、君は、やつては居るまい、と思ふが、あアいふ事をされては、洵に困るのぢやから、我輩も、それが心配で、歸つて来たのぢやよ』

『成程』

『それに就ては、是非、君の力を借りて、其鎮撫を、引受けて貰ひたい、と思ふのぢや。實は、我輩の力にも及ばぬのであるから、否應なしに、今日は承知させようと、いふので、野村も、斯うして一緒に來たのぢやから。此際は我輩を助けて、鎮撫に努めて、貰ひたいのぢや』

『フ、ム、そりやア、全體、何ういふ譯なんですか』

『別に、何ういふ譯と、いふ事もないが、今の場合に、長州藩から、脱兵騒ぎなどが始まつては、それこそ、千仞の功を一簣に缺く、といふもので、御維新の際に、あれまでの働きをした、長州藩が、同士打の騒ぎで、醜態を曝露する、といふやうな、事は、御互に慎まなければならぬ。それやア、不平を、言ひ出したら、皆、あるのぢや。今騒いで居る人々は、我々に對して、不平を、有つて居るのぢやらうが、我々とても、亦相當に不平はあるのぢや。今日の位地に昇つたから、それで満足か、といふに、決してさういふものぢやない。或は、何等の位地も得ないで國許に、安靜に暮して居る人で、却つて、其境遇は、喜んで居る者もあるだらう、と思ふ。苦情や不平は、言ひ出したら、限りのないものぢやから、氣長に、其欲を満足させる、考へて居て呉れよば、我々、が悪くは取計らはぬのであるから此際に於ては、何うしても、暴動などを起されては、困るのぢや。それを治めるのに、我輩の手を以てする事は、難かしいのぢやから、君等の力に依つて、之を成し遂げたい、と思ふ。それで今日は、斯うしてやつて來たのぢや』

是から木戸は、頻りに品川を、説き始めた。其間には、野村も、口を添へて、或は理を以てし、或は情を以てし、様にして説付けた。元來、品川といふ人は、情の人であるから、到頭、動かされてしまつて、木戸の爲に、一臂の力を貸す、といふ事になつた。

品川は、存外、若い連中の間に、勢力があつたので、諸隊士との連絡も、巧く取れたし、又、鎮撫の上に於ても、便宜を得たのであつたが、併し、時の勢ひは、なかく、そんな事で、一旦、燃上がらうとした、火の消えるものでは

ないから、矢張り、錢砲を撃つまでの騒ぎにはなつたが、一時は、是で頗る、便宜を得たのである。

相談は、斯う極つたが、茲に一つの難儀は、充分の活動をするには、金が不足だ。それに就て、木戸は、頗る苦しんで居た。所へ、折好くも、此事を心配して、東京から、井上馨が、乗込んで來た。長崎の方へ、政府の御用で、出張する途中であつたから、井上が、存外に、大金を所持して居たので、是が又、木戸の爲に、一つの幸ひになつた。

一五

井上が、長崎へ行く用事は、政府の内命に依つて、軍器買入の爲であつた。其頃の政府は、漸く陸軍の制度が極つたばかりで、各鎮臺へ對する、軍器の供給が、充分に出來なかつたのであるから、是が爲に、井上は、軍器買入の役を申付かつて、長崎へ行く途中、國元の事が心配になるから、態々、下關へ、出て來たのだ。所が、野村と木戸が、來て居て、頻りに脱兵鎮撫に付て、相談して居る、と、聞き出して、訪ねて來たのである。

木戸は、品川を説付けて、鎮撫の手傳を、爲せる事にしたが、何れにしても、金が先に立つのである。實の所を言へば、木戸は、今までの報告を、過大に失するものとして、歸國するにも、充分の手當をする丈、金を持つて來なかつた。野村や品川に會つて、段々、聽いて見ると、評判よりは、騒ぎの方が、根強くなつて居るので、初めて驚くやうな始末であつたから、兎に角、此場合は、充分の金が無ければ、動きが取れない。其前に、井上が長崎へ行く事は、知つて居たのであるから、従つて、井上の手元には、何れだけの金が、有る位の事は、よく判つて居たのだ。

『ヤア、御心配でした』

と言ひながら、井上が、席に着くの待兼ねて、木戸は、

『オイ、井上、好い所へ、來て呉れた。實は、困つて居た所ぢやから、君の來たのは、此上もない仕合せぢや』

『ハ、一、何か、我輩でなければならぬ、用事が出來たのかね』

「別に、君が居らなければならぬ、といふ事ではないが、兎に角、君の手に、政府の金があるだらうから、それを、少し置いて行つて、貰ひたいのぢや」

「ウム、そりやア、持つて居るが、金を何うしやう、といふのか」

「品川を説付けて、漸く味方にはしたが、併し、騒ぎの範囲が、擴がつて居るから、何うしても、金を持つて居なければ、手を着ける事が、出来ないのぢや」

「そりやア、困つたでせう。宜しい、何程でも置いて行くから、使つたら宜いでせう」

是から段々、井上と相談して、相當に金は受取つたから、木戸も、漸く是で一と安心した。品川や野村の活動も、従つて充分に、出来るやうになつた。

有體に言へば、此時代が、政府の、最も苦心した時で、表面に於てこそ、天下泰平を諱ふて、新政府の基礎は堅いやうな顔をして居ても、其内部へ這入れれば、随分、様々の分子があつて、何時それが、衝突して、何んな騒ぎになるか、判らないのであつた。後に精しく述べるが、其頃から、征韓論が、頭を持上げて来て、久留米の佐田白茅が、曩に征韓の建白をして居た關係から、再び政府に召されて、外務省の役人となり、同時に、森山茂といふ人も拔擢されて、佐田の相役となつた。此兩人が打揃ふて、朝鮮へ行く事になつて、朝鮮政府と、撮合つて見ると、無法な事ばかり、言ふて居て、到底、話は平和の中に、治まりさうも無いから、據所なく、歸つて来て、此旨を、政府に復命したが、之が爲に、征韓論を唱へる者は、倍々、多くなつて来て、それを幸ひに、征韓論を煽りつけて、何か一と仕事しやうとする連中も、出て来る、政府の方では、色々な、改革やら計畫の爲に、金を要するので、征韓の事は、少く進まない。従つて、それに對する、不平が、大分酷くなる。其上に、帝都を、東京に遷した、といふに就ての不平を、懐く者もあつて、是は、公家の愛宕通旭を、中心として、與黨も多く居た。其他、様々の事が、原因となつて、到る處に、謀叛の萌が、現れて來た。長州の脱兵騒ぎも、幾分か其方に、關係があつたのだ。それであるから、此騒

ぎが大きくなつて、長く續くやうな事になれば、其警は、全國へ及ぶのであるから、木戸等の苦心したのも、決して無理は無いのである。

井上が、長崎へ行くのは、左までに、急ぐ用事でもないから、兎に角、當分は、木戸の手傳をして行く事に、なつたので、此上もない。幸であるから、長府、岩國、徳山の各支藩へ對して、竊に井上から、手を入れて、側面より、木戸の鎮撫を助ける、といふ手續が取れた。

一切の手續が付いて、木戸は、密に萩へ行くのであるが、直に萩へ行くのは危険であるから、努めて、他に知られないやうにして、一先づ、山口へ、やつて来て、藩廳へ這入つた。木戸が來たといふ、事が知れると、騒ぎが大きくなるのを、虞れたからである。丁度、其時に、杉孫七郎が、山口へ、來て居たので、木戸の顔を見ると、今まで困つて居た、杉も、漸く安心の胸を撫下した。

「何うも、今度位、困つた事は無い。何方を見ても、同藩士で、唯一時の考へ違ひから、斯ういふ事になつたのであるから、さう手荒な事も出来ないし、さればとて、棄て、置けば、騒ぎが大きくなるし、何うにも、斯うにも、手の手着けやうが無くて、此位、困つた事は無い、貴下が見えたのは、此上も無い、好都合であつた」

「我輩も、早く來やうとは、思つたのぢやが、東京の方でも、なか／＼面倒な事が、續いて居て、容易に出る事が出来なかつたが、漸くにして、やつて來たやうな譯ぢや。何しろ、困つたものぢやな」

「大樂と富永の奴が、あの不思議な、辯才を以て説廻るのぢやから、如何とも、手の手着けやうがない」

「そりやア、さうだらうとも、さういふ事に掛けたら、實に巧な奴等だから、定めて困つたらう。併し、品川に申付けて、置いた事があるから、其返辭を待つてから、手を手着ける事にしやう」

と、互に鎮撫の方法に就て、相談を始めた。折柄、俄に喊の聲が起つて、銃聲さへ聞えるので、兩人は、思はず立上つて、窓から戶外を見ると、意外千萬にも、澤山の兵士が集まつて、ワイ／＼いふて居るのだ。

富永と大樂は、各隊の兵士を煽動して、今にも騷動を起させやう、として、晝夜を掛けての奔走であつた。所へ、品川がやつて、来た、といふので、無論、是は自分達の、應接の爲に、來たに違ひない、といふ鑑定から、非常に歡んで、品川を迎へた。

品川は、木戸から頼まれて、實は、鎮撫の目的で、やつたのであるが、富永と大樂が喜んで、自分を迎へて呉れたから、此調子では、巧く話し込む、と、鎮撫の目的を、達する事が出来る、と思つて、心密に喜んで居た。富永は、膝を進めて、

「オイ、品川、お前が、下關の方に、頑張つて居て呉れるから、我々も、安心して居たのぢやが、斯うして、山口まで、乗出して來て呉れた、といふのは、如何にも有難い事ぢや。サア是からは、一緒にやる事に、しやうぢやないか」

大樂も、共に口を添へて、
「我々、兩人の所へ、品川が、加はつて呉れれば、鬼に金棒ぢや。此上の事は、我々三人の思ひ通りになるのぢやから、都合に依つたら、此勢ひで、東京へ、乗出して行つても、面白からうよ」

非常に乗込んで、話し込むので、流石の品川も、鎮撫に來たのだから、そんな相談には、應ぜられないとも言へず、聊か面喰つて、兩人の顔を見て居る、と、

「時に、品川、下關の方の隊士は、何ういふ風になつて、居るか。此方は、もう今夜にも、事を起すやうになつて居るのぢやが、實は、各地から相應じて、同時に、やる方が、都合が宜からう、と思ふから、お前が、來たのは幸ひぢやから、其打合せも、スツカリして置いて、お前と一緒に、兩人の中、誰か行く事にしても、宜いが、下關の

都合は、何んな事になつて、居るか」

と、言はれたので、品川も、何とか答へをしなければならなくなつたが、唯一つ、茲に慮るべき事は、今夜にも、事を起して、差支が無い、といふのは、それまでに、準備が整つて居るのか、と思ふと、木戸の身の上も、案ぜられなければならない。何とか、口實を設けて、一兩日は、事を起すのを延期させるのが、差當つての必要があらうと、早くも考へて、

「マア、さう急がずとも、宜からう。輕卒に、事を起して、大事を誤まつてはならぬから、もう少し、熟議を遂げて、徐に事を起す事にしたら、何うぢや」

何事に就ても、機敏な大樂は、何うも、品川の調子が怪しい、と睨んだ。

「品川、貴様、何時もの元氣に似合はず、大層、弱い事を言ふな」

「別に弱くはないさ」

「イヤ弱いと、俺は見た。何故、さういふ弱い音を吐くか。斯ういふ事は、勢ひを以て、進んで行くに限るのぢや。熟議などいふ事をして居たら、それこそ、目的を誤る事に、なるのだ。既に機は熟して居るのだから、我々が、ソレやれと、聲を掛ければ、それで大事になるのぢや。先づ取敢ず、事を起す事にしたら、何うぢや」

もう此處まで、話が進んでは、品川も、頭巾を被つて居る事は出来ぬ。何とか、本音を吐かなければならなくなつた。

「全體、君等が、事を起す、といふのは、何をしようといふのか、それから、聽かなければならぬのであるが、政府に對する不平は、それとして、兎に角、何の爲の不平であるか、といふ事を、明かにして掛からなかつたならば、唯、無謀に事を起した、といふ事になつて、悪い名前ばかり、取る事になるだらう、と思ふが、其邊の考へは、何う付いて居るのか。それを聴きたいのぢや」

『そんな老人じみた事を言ふて、愚圖々々して居ると、何事も、出来ぬやうになる。貴様の、平生にも似合はぬが、何うして今日は、そのやうな意氣地の無い事を、言ふて居るのか』

『別に、意氣地の無い、といふ事はないのぢや』

『それならば、我々に、同意してしまつたら、宜からう』

『併し、一旦、事を起したら、其成敗で、我々の浮沈が極まるのぢやから、輕卒な事は、何處までも出来ないさ』

富永は、腕を組んで、大樂と、品川の押合を、聽いて居たが、卒然として、

『オイ、品川』

『何ぢや』

『貴様、木戸に、會つて来たな』

『イヤ、會はぬ』

『會はぬ事はない。必ず會つて来て居る。それで、さういふ弱腰になつたのぢやらう』

品川を指されて、品川も、聊か驚いたが、素知らぬ顔で、頻に辯解はするが、平生の品川に似合はず、今日は、受

太刀になつて、答辯は、左支右梧であつた。

斯ういふ事情であるから、何時まで、押問答をした所で、果しが付かない。そこで、富永と大樂は、相談こそせぬが、此場合に、品川を手放しては、不利であると、考へて、何でも構はぬから、品川を、抑へて置くに限ると、決めた。品川が、歸らうとするのを、無理遣に、押付けてしまつた。それであるから、品川は、兩人に會つた状況を、木戸へ報告すべく、約束はして来たのだが、外へ出る事が出来ないから、木戸の方へ、今夜の中に、或は事が起きるかも知れない、といふ知らせを、爲る事が出来なかつた。されば、藩廳へ、やつて来て居た、木戸が、四方を取捲かれて、喊の聲や、鐵砲の音を聞いてから、初めて驚いて、身動きも付かないやうな、破目になつたのも、此手違ひか

らであつた。

偕て、藩廳にあつて、四方を圍まれたので、木戸は、茲に至つて、進退窮まつた。尤も、包圍して居る、脱兵連は、木戸が、藩廳に、来て居る事は、未だ知らなかつたのであるから、それだけに、其攻撃方は、幾分か弱かつた。若し、其時に、木戸が、来て居ると、判つて居たならば、それこそ、木戸の身は、何うなつたか知れない。

一七

深い才智のある、木戸が、斯うしたへまを働いたのは、詰り、敵を侮り輕んじたからである。富永や大樂が、何う逆さになつて、騒いだ所で、大概、知れたものだと高を括つて掛かつたので、斯かる破目に、陥つたのである。

各隊の小隊長以上の者が、不平を懷いて居たのは、事實であつた。富永や大樂が、如何に煽動を、巧にした所で、自身に、不平の無い場合に説かれたのでは、それ程に、感激もしないが、各々、相當に、不平を懷いて居る、所へ、大樂や富永の説方が巧かつたから、そこで思ふ壺に嵌つて、此騒動が、起つて来たのだ。

何等の防禦準備も無い、藩廳の中に圍まれた、木戸は、袋の中の鼠である。若し、木戸が、藩廳に来て居るといふ事は、判つたならば、一氣に、攻込んで来て、木戸の生命は、無かつたかも知れないが、まだ其事が知れずに居た、といふのは、木戸の武運が、あつたのだ。併し、何れにもせよ、此難關を切抜けて、善後の策は講じなければならぬのであるから、何とかして、圍みを脱れて、一旦は、何方かへ、引揚げたいものだ、と、頻に苦心して居る所へやつて来たのは、藩廳の雇吏になつて居た、藤井八十枝と、いふ人であつた。

此人は、木戸が、會談の二藩から、苦められて居た、文久の昔から、懇意になつた人で、元來が、長州藩士では無い。それが、不圖した縁で、木戸と、懇意になつてから、深く其爲人に服して、頻に木戸の爲に、働いた所から、木戸も、藤井に對しては、充分に援助を與へて、何れ、東京へ呼出す事にしても、それまでは暫く藩廳の役人として、

其時の来るのを、待たせて居たのである。

「意外の珍事が出来て、定めて御困りて、ございませうな」

「ウム、藤井か、今宵に追つて、斯んな騒ぎが、始まらうとは思はなかつたので、頗る閉口ぢや」

「何となさる、御積りですか」

「サア、今、何うするといふ、考へも從いて居らぬが、兎に角、此處を、一時脱れたい、と思ふが、何とか工夫はあるまいか」

「ハ、一時、藩廳を脱れて、何とかなさらう、といふのですか」

「さうぢや。此處で、圍まれて居ては、何うする事も出来ぬからな、我輩が、一日、圍まれて居れば、それだけ脱兵騒ぎが、激くなるのぢやから、一刻も早く、圍みを脱れて、鎮撫方を計らひたい、と思ふのぢや。お前の分別で、宜い方法は無いかな」

「さうでございますな」

と言ひながら、藤井は、暫く考へて居たが、

「斯ういふ事になさつては、如何でございますか」

「ウム、何うしよう、といふのか」

「私が、是から廳内に病人があつて、薬を取りに行く、といふやうな、風を装うて、門を出ますから、必ず脱走兵が、之を拒むに、違ひない。そこで、私が、極力争ひます。詰り、病人の爲に、薬を取りに行く、といふのを、拒むのは怪しからぬ。と言ふて争ふたらば、段々、騒動が大きくなつて、斯ういふ場合ですから、他の方面に居る者も、表門へ集まるやうになりませう。其間に、何處からでも、遁れる事になすつたら、如何でございますか」

「そりやア、面白い考へぢやが、併し、萬一、お前の一身に、危い事でも始まる、と、困るからね」

「そりやア、構ひませぬ。私は、一旦、危い目に遭ふて、一身の方向にさへ、迷つた場合に、貴下の御助勢に依つて、生命を助つたのですから、惜しい生命でも、ありませぬし、薬取りに行く者を殺す、といふやうな、無法な事もしますまいから、私が、程よく争ふて、成べく多く人を、其處へ集める、といふやうな、騒ぎ方をしますから、是非、貴下は、其間に遁れて戴きたい」

木戸も、暫く考へて居たが、それより外に、遁れる途が無い。

「それでは、氣の毒ぢやけれども、さうして貰ひたい」

「承知いたしました」

是から、藤井は、身仕度を整へ、薬嚢を持つて、表門から、出掛けて行く。藩廳の役人の中にも、多少は、元氣なものもあつたのだから、藤井が、門前で、争ひを始めたならば、一同が出掛けて、藤井の加勢をしやう。さうして、争ふて居る中には、騒動が大きくなつて、夜の事でもあるし、旁、敵も、味方も、滅茶々になつてしまふから、一時に、門前へ、集まつて来るに、違ひない。其隙を見て、木戸が逃げたならば、或は巧く行くかも知れない、といふやうな譯で、藤井は、表門へ、出て來た。是を見ると、早くも見張をして居た、兵士が一人、ヅカ／＼と、側へ寄つて、

「オイ、何だ、貴様は」

「ヘイ、私は、小使でございます。唯今、病人がございますので、薬取に參る所で、ございます」

「持つて居るのは、何だ」

「ヘイ、薬の嚢で、ございます」

「何ぢや、薬の嚢ぢや。何れ見せろ」

藤井が、持つて居た、嚢を奪つて、頻に見て居たが、臆て、傍の石を望んで、パツと打付けたから、嚢は粉々に、

なつてしまつた。藤井は、之を見ると、眼の色を變へて、
 『貴下は、何をなさるんですか』
 『何をするかつて、此騒動の最中に、薬などを取りに行く、といふのは、飛んでもない奴だ。門を出す事は、罷りならぬ』
 『そんな、亂暴な事は無い。縦令、戦争の中でも、病人があれば、勞つてやる、といふのが、武士の道ではありませぬか。況して、戦さといふのではなく、貴方等は、何かの願ひの筋があつて、斯うして、藩廳を、取圍んで居るのてせう。それが、薬取に行く、といふのを妨げて、而も、薬壘まで壞してしまふ、といふのは、怪しからぬ事だ』
 『何だ、貴様は、小使の癖に、生意氣な事を吐すな』
 と言ひながら、藤井の頭を、一つコツンと、やつた。
 『是は怪しからん。貴方は、亂暴をするのですか』
 と、呷鳴つた。藤井の聲が激しかつたので、豫て打合せをして置いた、廳内の十四五人の者が、各々得物を携へて、バラ／＼と、駈付けて來た。

一八

井上は、下關で、木戸に別れる、と、直に長府へ、乗込んで來た。脱走兵の騒ぎは、山口が、中心點になつて居たのであるから、何うしても長府で、之を牽制する、必要がある。従つて、長府の藩士を説いて、此方面を、巧く押へて置けば、山口の方へも、其響きて、牽制の效が現れるのであるから、井上は、頻に盡力して居る傍、味方の者を使喚して、城下の四方に張番をさせ、往來の者を、一々誰何して、萬一にも、山口の脱走兵と、連絡を通ずるやうな者があれば、片端から押へて、檢束する手順を、付けて居たのだ。

然るに、或日の夕方に、一臺の早籠が、山口の方から、やつて來たから、豫て井上に、申付けられて居る、張番の者が、直ぐ之を取押へて、有無を言はず、井上の前へ、同道して來た。そこで、井上は、籠に乗つて居る者を、取調べる事になつた。
 『拙者は、井上といふ者であるが、お手前は、何れの藩士で、姓名は、何と仰しやるか』
 『おいどんな、薩藩の者で、ごわす』
 『ハ、一、薩摩の御方で、ござつたか』
 『左様』
 『薩摩の御方が、何ういふ譯で、今頃に乗打をせられるのか。其次第を、承知いたしたい』
 『實は、西郷先生の申付によつて、山口の城下に、先般來、潜んで居たのでござるが、其要件は、豫て噂のあつた、脱兵騒ぎが、何ういふ風になるか。それを、見届けて參れ、といふ事でごわしたから、唯今まで、潜んで居つたのぢやが、既に昨夜來、澤山の脱走兵が、藩廳を取圍んで、大い騒ぎを、やつて居るから、取敢ず其趣を、西郷先生の許へ、御知らせ致さう、と思ふて、是から下關へ、向ふのでござす』
 井上は、初めて聞いた、山口の脱走騒ぎ、豫てさういふ事が、あつたらば、直に知らせて來るやうに、それ／＼手順は、付けてあつたのだが、未だ通知の來ない中に、此薩人から、斯ういふ話を聞かう、といふのは、意外の事であつた。併し、前後の態度から、又、其口調から察するのに、語る所に、偽は無いやうにも、思はれた。
 そこで、井上が、如何にも、不安の念に堪えないのは、今頃は、木戸が、山口の藩廳に、行つて居る時分であるから、若し、此者の、言ふ通りに、脱兵騒ぎが、始まつて居るならば、木戸は、既に藩廳で取圍まれて、苦しんで居るに、違ひない。さうなつて見ると、一刻も早く、木戸を救ふ、計畫を立てなければならぬ。それにしても、西郷が、斯ういふ小さな事に迄、深い注意を拂つて、配下の者を、山口へ、入込ませて置いた、といふ、其遣口には、唯感心

するの外はなかつた。

『西郷さんの御注意から、貴下を、山口へ、潜めさせて置いた、といふ事は、今、聴くのが初めてで、更にさういふ事は、承知して居らなかつたから、強ひて此處まで、御連れ申したやうな譯ぢや。御無禮の段は、何うか御免し下さい』

井上が、慇懃に挨拶して、無禮を謝する、と、薩人も、多少は、不満は懐いて居たらうが、此挨拶では、怒る事もならぬ。

『斯やうな、騒ぎの折柄、早籠で、乗打を致したので、ごわすから、多少の疑を受けるのも、無理の無い事でごわす。併し、先を急ぐ者でごわすから、此儘、御許しを願ひたい。如何てごわすか』

『サア、御隨意に、御出立下さい。御歸國の上は、西郷さんにも、よろしく申上げて下さい』

そこで、例の薩人は、籠を急がせて、下關の方面へ、立去つた。

所へ、山口の方から、急使が来て、脱兵騒ぎの模様を、詳しく報じて来た。それに依つて見ると、井上の想像通り、木戸は、確に山口の藩廳に取圍まれて、困つて居るに、違ひない。流石の井上も、木戸を救ひ出すに就て、苦心して居る、と、下關で別れた、野村が、三好を連れて、やつて来た。

『やア、好い所へ、来て呉れた。早速 相談があるから、マア、其席へ、着いて呉れ』

兩人は等しく、井上の前に並んで、

『大分、騒ぎが大きくなつた。今、斯ういふ次第で、山口の藩廳が、脱走兵の爲に取圍まれた、といふ事が判つたのぢやが、さうなつて見ると、何とかして、木戸を、救はなければならぬが……』

井上の言葉が、終らざる中に、三好は、膝を進めて、

『もう、此上は、致方が無いから、唯一戦に、脱走兵を打破つて、木戸を救ふの外は、あるまい。若し、拙者に、一隊の兵を、與へて呉れたならば、美事に、木戸を、救ひ出すが、何うであらうか』

野村も、之には同意であつた。

『ウム、そりやア、宜からう。何うぢや、井上、三好に、一切を委せる事にしたら、何うだらうか』

井上は、手を振つて、

『イヤ、そりやア、いかぬ。それまでにせずとも、木戸を救ふには、道があらう。又、木戸が、藩廳に居る事を知つて、圍ふて居るのか、それとも、知らずに圍ふて居るのか。其邊の事情も、明かでない。若し、外部から兵力を以て、ひどく攻付けると、苦し紛れに、亂暴を働くやうな事にならうから、折角、無事に救ひ出さるべき、木戸を傷けるやうな事にもなるから、出兵する事は、考へものぢや』

『フ、ム、さうして見ると、木戸を救ふには、何うするのか』

『マア、待て、無論、取圍まれて困つて居るだらうが、木戸は、容易に平を束ねて、殺されるやうな無策の男でもないから、何とかして、遁れもするぢやらうし、又、圍まれて居る中に、ムザと、敵手に生命を奪られるやうな、拙な事もすまいから、兎に角、我々が、是から山口へ、向つた上で、一策を講ずる事にしよう』

斯う言はれて見れば、それにも、一分の道理はある。強て、出兵の説を、唱へる事は出来ないで、井上と同行して、山口へ行く事になつた。

一九

秋穂といふ所まで、船で行つて、それから陸行する事に極めて、三人は、長府を出たのだが、折柄の逆風に、何うしても、船を進める事が出来ず、是が爲に、一日遅れて、翌日になると、矢張り同じ逆風に、何うしても、船を進める事が出来ぬ。そこで、野村は、頻りに躁り出した。

「オイ、井上、さう落付いて居ちや困る。木戸が、何れ程、才智のある男にもせよ、澤山の脱走兵に、取圍まれて居る以上は、容易に切抜ける事は出来まいから、萬一の事でもあると、取返しが付かぬに依つて、一刻も早く、山口へ、乗付なければならぬ、といふのに、風が悪いから、船が出ない、といふて、風の治まるのを、待つて居る、といふやうな、迂闊な事は出来ない。是から、陸を行く事にしようぢや、ないか」

三好も、合槌を打つて、
「それは、無論、さうしなければなるまい。若し、愚圖々々して居て、木戸を、殺させるやうな事があつては、一大事ぢや」

茲に於いて、井上も、其氣になつて、慇々、陸行と決した。是から仕度して、出掛けやうとする所へ、一挺の早籠が、やつて来るから、チツと、其方を見て居ると、意外にも三人の前で、籠が下りた。垂を開けて、出て来たのは、今の今までも、心配して居た、山口の藩廳へ、取圍まれて居るべき筈の、木戸であつたから、三人は、夢かとはばかり驚いた。

「ヤアー、木戸か」

「ウム、何うも、遠くから見たのに、貴様等のやうぢやつたから、兎に角、籠を止めさせたのぢやが、何處へ行くのか」

三人が、心配して居た程ではなく、本人の木戸は、一向平氣で、更に脱走兵に取圍まれて、苦んで居た、といふやうな様子もないから、三人は、聊か案外の思ひをした。

「貴下は、山口の藩廳で、取圍まれて居た筈ぢやが、何うして、此處へ來なかつた」

「ウム、其一條か。イヤもう、實に閉口した。何しろ譯も分らずに、騒いで居るのぢやから、重立つた者に會ふて、利害を論じて、解散させるといふやうな、手順も付かず、それに、我輩が、藩廳に來て居るといふ事を知らずに、

取圍んで居たらしい。彼是、考へて見ると、矢張り此騒ぎは、我輩が、顔を出さずに、置く方が宜からう、と思つて、何とかして、圍みを通れやう、と思ふたが、何うにも、方法が付かぬ。所が、折好く、藤井八十枝と、いふ者が居つて、是が、京都以來の關係で、我輩の爲には、何んな苦しみも、忍んで呉れるので、本人の考へから、藩廳内に病人があつて、其藥を取に行く、といふやうな、風を裝ふて、表門へ出ると、一時に脱走兵に圍まれた。そこで、藤井が、極力抵抗して、段々、騒ぎを大きくする。それに、藩吏の中にも、手傳をする者があつて、四方を圍んで居た、脱走兵が残らず、表門の方へ集つたので、裏門の方に、脱走兵の居らなくなつた。其際を見て、遁れて來たのぢやが、實に危い事ぢやつた」

三好は、眼を丸くして、
「フ、ム、して見ると、矢張り圍まれて、居たのですな」

「さうぢやよ」

今更に、三人が感心したのは、それ程の苦しみをして居た、人のやうでもなく、強て尋たから、物語るやうなもの、木戸の方では、却つて三人が、何で此處に、來て居たかと、いふ事に、不審を懷いて、其事情を質問するほどに、落付いた様子を見ては、流石に、文久以來、屢々、逆境に處して、難關を切抜けて來た、苦勞の果の、木戸が思はれて、感心するの外はなかつた。茲に於いて、四人は、船宿の二階へ上つて、今後の策を講ずる事になつた。

そこで、段々、相談に移ると、木戸の意見は、
「脱走兵の騒ぎは、意外に大きく、擴がつて居るやうぢやが、幸ひにして、之を統率して、秩序ある働きをする者が、ないのぢや。富永や大樂は、煽動して騒がせる事には、巧であるけれども、其勢力を繼めて、進んで行くといふやうな順序の立つた、藝當は出來ないのであるから、是から君等が、力を盡して、小郡へ、兵力を集めて、今にも、山口へ、攻めて行くといふやうな、様子を見せたならば、彼等は、唯一時の勢に乗じて起つた、連中で、更

に將來の考を、有つて居ない者共であるから、必ず小郡へ、一時に集まつて来るに、違ひない。さうなれば、山口の方が、空虚となるのであるから、其隙を以て、我輩は、萩の城下へ乗込み、先づ君侯に拜謁して、今の場合に斯やうな騒ぎを、長く續かせる、といふ事は、天下の爲に、ならぬ事であつて、折角に、我藩の力を以て、徳川を倒して、新政府を興し、天下太平の基を開いた、といふ、其功勞も、此一つの騒ぎに依つて、打消されるやうな事になつては、残念であるから、是非、君侯の御指圖に依つて、藩兵を貸して貰ひたい、といふ事を申上げたならば、必ず御承知になるに、違ひない。そこで、君侯、御聲掛かりの上で、鎮撫に行く、といふので、山口へ、乗込んで行つたならば、元來、之を統率する者もなければ、策を立てる者もなく、謂はゞ、烏合の衆が、一時の勢ひで、蜂起したのであるから、忽ちに鎮定するに違ひない、と思ふ。我輩は、斯ういふ風に、考へて居るが、君等の考へは、何うであるか』

と、木戸は、順序を立て、鎮撫策を講じたので、三人も、手を拍つて、賛成した。

『そりやア、宜からう。是非、さういふ風の方法を以て、治めて貰ひたい』

『君等に、異存が無ければ、我輩は、是から直に掛からう、と思ふ』

『是非、さうして貰ひたい』

『それでは、役割を極めやうでは、ないか』

『それが、宜からう』

斯ういふ、相談の結果として、井上は、兵站部を引受け、三好は、専ら兵士を指揮する方に廻つて、野村は、四方八方へ奔走して、味方も集めれば、敵も牽制する、といふやうな、役を引受けて、木戸は、即時に、萩へ向つて、出發する用意に掛かつた。

一一〇

木戸が、策を立てた通りに、井上等三人は、それ／＼手順を定めて、小郡へ、兵力を集める、と、果せるかな。山口の方へ、集まつて居る、連中が、小郡に向つて、押出して來た。そこで、三好は、兵士の指揮をして、頻に扱つて居る。何れにしても、同じ藩士の間柄であるから、三好も、氣を入れて、戦さをする、といふやうな、考へはないのだ。撃つても、撃たれても、味方同志であつて、斯んな馬鹿らしい、戦ひはないのであるから、唯、自分等の畫策通りに、木戸が、早く萩から、乗出して呉れれば、それで治まりは付くのであるから、それを待つばかりに、敵を扱らつて居れば、宜いのである。併しながら、斯ういふ戦さは、却て本當の戦さよりも、難かしいもので、三好の苦心は、一と通りではなかつた。

偕て、木戸は、萩の城上へ、無事に着くと、直に登城して、毛利侯に、拜謁した。

『オー、珍らしいのう。相變らず無事で、重疊ぢや』

『ハツ、君侯にも、何の御變りもなく、祝着至極に存じます』

『其方、此度、鹿兒島表へ、岩倉右大臣と共に參つたやうに、聞及んで居たが、如何いたして、歸國は致したのか』

『實は、岩倉公と共に、薩摩へ參るやうに東京は、出發したのでござるが、國許の脱走兵の騒ぎを聞及びまして、其儘にはなり兼ね、取敢ず事情、取調べの爲に、歸國いたしました』

『ウム、左様か』

『就きましては、此際、御願ひのございまして、拜謁願ひ出ましたのでございます』

『フ、ム、何ういふ事か』

『先般、山口の藩廳へ、參りました折柄、脱走兵の爲に取圍まれて、頗る迷惑を致しましたが、斯やうな騒ぎが、長

く續きまする事は、我藩が、今日までに立てましたる、功績を空しくする因で、ござりまして、一日も早く、鎮靜に歸せしめなければ、朝廷へ對しても、畏れ多い儀と考へまするが、夫に就て、君侯の御沙汰に依つて、幾何かの兵士を、私に御預け下さる事は、なりませんまいか、此儀、論に願ひ上げまする」

毛利侯も、今までは、脱走兵の事を、多少は聞いて居たが、左右の者が、強て申上げなかつた爲に、是程の騒ぎになつて居る、といふ事は、知らなかつたのだ。殊に、木戸が、山口の藩廳で、それ等の者に、取圍まれて困難した、といふやうな事も、今、本人から聞いて、初て知つたやうな譯であるから、聊か驚きの眼を見張つて、

「ハ、ハ、左様の椿事があつたのか、余は、少しも知らなんだ。尤も、大政府の御處之に就て、不満を懷いて居る者がある、といふ事は、承知を致して居つたが、それまでに、事情が逼迫して居る、といふ事は、今聞くのが初めてぢや、其方も、定めて迷惑を、致したであらう」

「御言葉にて、恐れ入ります。私の迷惑は、如何様にも堪へまするが、萬一、其累ひの君侯に及びまするやうな事がありましては、一大事でござりますから、何卒、前に申上げました、願ひの儀、御聽届の程、願ひ上げまする」

「よし、承知いたしました。其方が、望み通り、出兵いたして遣はす」

「然らば、早速に、係りの者へ、それ／＼御沙汰の程、願ひ上げまする」

そこで、世子の長門守から、其旨を、家來へ申付けたから、萩の兵を、繰出す事になつた。木戸に、勿論、其指揮をする、といふのではなく、唯、兵士の力を利用して、山口の藩廳を回復して、併せて、小郡に集まつて居る、脱走兵を鎮撫しよう、といふのが、目的であるから、蔭の人となつて、兵士に附添うて、山口へ、乗込んで來た。

木戸の見込は誤らずして、脱走兵の多くは、唯一時の、勢ひに驅られ、又、富永や大樂の煽動に乗つて、平生の不満が爆發して、騒ぎ出したのであるから、固より深い根柢が、あつての事ではない。殊には、澤山に、集まつて居る者を統率して、一纏めにする、といふやうな者は無いのであるから、騒ぎは大きかつたけれども、長く續くべき譯はない。殊更に、君侯の御沙汰に依つて、大兵が、山口へ迫る、といふ事を聞いて見る、と、小郡の方に、集まつて居る者は、自然に、後の方を、振返るやうな事になつて、思ふやうに、進む事が出来ない。彼是する中に、山口の藩廳は、一旦、乗取つたけれども、取戻されてしまつた。といふ事も、聞えて來る。旁、斯うなつて見れば、據るべき所を失ふたのであるからもう、解散をする外はないのだ。それに此以上、藩兵と、戦ふやうな事になれば、藩主に背く事になるのであるから、政府の敵となる事は、左までに恐れないが、藩主に双向ふといふ事は、未だ舊幕の時代の習慣が、頭に残つて居て、非常に恐れた時であるから、何時、散ずるともなく、段々脱走兵が、其仲間から脱走するといふやうな、譯で、小郡へ、集まつて居る者はチリ／＼バラ／＼に、なつてしまつた。

富永と大樂の二人も、左までに、深い根があつて、爲る事ではなく、謂はゞ、一時の勢ひに乗じて、面白半分に、煽動したやうな傾きもあつて、是までに、人を煽動する事は、上手であつても、偕して、其後を引纏めて、何うする、といふだけの力は無いのであるから、脱走兵が散ずると、共に、自分達は、何處ともなく、踪跡を晦ましてしまつた。

一一一

多數の人を煽動して、騒ぎを起させる、といふ事は、誰にでも出來さうであるが、なか／＼さうはいかない。併し、煽動に巧な人は、何うかすると、あるものだが、偕、其煽動してから後の、人を引纏めて、其騒動をして、意義ある騒動ならしむる、といふ事に、力を有つ人は、さう澤山にはない。昔からの英雄とか、豪傑とか、いふやうな、連中は、即ちそれであつて、唯人を煽て、使ふ、といふ事だけが、上手でも、仕事の纏まりを、付ける事の出來ない者は、中途で、挫折してしまつて、唯、煙花を揚げた後のやうに、一時はパツとして、綺麗で、人の喝采を博するが、間もなく、火が消えてしまへば、何の印象も、人の頭に遺さない、といふやうな事になる。されば、煽動に巧にして、尚ほ其上に、多くの人を、統率して行く、といふ事が出來れば、總て、其人は、歴史の上に、名をなす人になるの

だ。富永とか、大樂と、いふやうな人は、學問もあつたし、辯才もあつて、なかく立派な人物ではあつたが、煽動する事ばかりが上手で、引纏めをする事が、出来なかつたのであるから、到頭、名を成し得なかつたのみならず、其末路は、實に悲惨は極めた。富永は、其後、東京へ出て、例の愛宕通旭や、初岡敬次などに與して、政府の爲に捕はれ、詰らぬ最後を遂げてしまつた。大樂は、關門海峡を越えて、九州へ這入り、久留米の有馬頼成に依つて、事を成さうとしたのだ。

薩長二藩に對する、不平は、何の藩にも、あつたのであるから、巧に説いて行けば、大概な諸侯は、薩長二藩の排斥には、同意したのである。有馬の如きも、矢張り其一人であつて、中央の計畫には、同意して居たのだ。此人が上京して、澤主水正を説付けた時に、澤も、亦其企てに賛成したが、計らずも、澤の口から、秘密が漏れて、それから、政府の騒ぎになつて、到頭、一同が縛に就く事になつた。それは、後の話であるが、兎に角久留米へ乗込んだ、大樂は、色々な計畫をして、存外、藩士の間にも、同意者が出来たので、是から、九州の各藩へ涉つて、聯絡を付けて、大いに事を起さう、といふ考へを以て、頻りに奔走して居た。所が、藩主の中に、大樂の乗込んで來たのを、不快に思つて居る者もあつた上に、中央の計畫が破れて、段々、人が、捉へられる、といふ事も、傳へ聞いて、其累が、若し有馬家へ及んでは、それこそ一大事である、といふので、何うしても、此場合に、大樂を殺して、暗から暗に葬つてしまはなければ、有馬の立場が困る、といふやうな、考へを以て、偏に有馬侯の安泰を圖らう、とした、忠義な武士が、密に計つて、或る夜、大樂を誘き出して、途中でパツサリ殺つてしまつた。

それが、後になつて、大樂の殺されたのは、有馬の藩士が、やつた事だ、と判つて、政府から、嚴しい談判になつた。止む事を得ず、其下、手人を押へて、段々、取調べた、押へられた者の中に、松村雄之進が、未だ漸く十六七の少年であつたが、大樂を、斬る時に、連れ立つて行つた、一人であつた爲に、捕縛されて、非常な拷問に遭ふたが、松村はなかく利かぬ氣の男だから、少年ながらも、天晴な振舞をして、當時の關係をして驚かした、といふ事がある。

大きな板に、五寸釘を打付けて、其釘の尖つた上を、歩かせられたのだ。松村の物語に依ると、三足まで歩いたのは覺えて居たが、それから先は、夢中で判らなかつた。といふ事であるが、兎に角、五寸釘の上を、三足まで歩く、といふのは、實に偉い者だ。是が爲に、松村は、足が思ふやうに働かないで、大概の場合には、俾に乗つて歩く、といふやうな、當時の記念の傷が、足に残つて居る位であつた。それでも、白状せずに、到頭、命を助かつてしまつたのだから、六十以上の老骨になつても、尙ほ浪人組の旗頭で、幅を利かせて行けたのは、無理もない事だ。

富永と大樂が、脱走兵を煽動して、是だけの騒ぎを仕出來しながら、事が敗れて、切腹もせず、また、藩廳へ、自首もせずに、行方を晦ました、といふので、毛利侯は、非常な立腹で、直に藩兵を以て、跡を追はせやう、として、騒いで居る。それを聞いて、木戸は、御前へ出た。

「恐れながら、申し上げます。富永、大樂等の件に就て、非常に御立腹なさうに、ござりまするが、却て、兩人の行方を突止め、藩廳に於いて、自ら成敗を加へる、といふよりは、彼等の運命は、極まる所があるで、ござりまするから、打棄て、置いて、自然の成敗に、委せた方が、宜しうござりませう。又、一般の脱走兵に對しましては、御情を以て、撫育せられる方が、後日の御爲にも宜からうか、と考へまするから、此際に於いて、寛大の御處置こそ、偏に願はしく存じまする」

といふ、穩かな意見を聽いて、毛利侯も、其考へになり、脱走兵に對してはそれ／＼、呼出して、叱言も言ふたが、幾分の御手當も下さる、といふやうな譯であるから、一旦、騒ぎをした者も、大いに後悔して、藩侯の爲には、何んも苦しみも、忍ばなければならぬ、といふやうな、考へになつて、さしも世間に、評判の高かつた、脱走騒ぎも、是で全く、鎮靜する事になつた。

新聞發行及藩籍奉還

一

脱兵の騒ぎも鎮まつたから、木戸は、薩摩へ、渡る事になつた。岩倉右大臣の一行が、既に薩摩へは、行つて居るのであるが、是から出掛けて、一行に、落合ふ事が出来るか、何うかは判らないが、兎に角、先年來の、長州藩との行掛りもあるし、旁、一應は、島津久光にも對面して、毛利の名代として、一應の挨拶を述べて置く必要もある、といふやうな次第で、遅れ馳せながら、鹿兒島へ、乗込む事になつたのである。

聯合の事が成つて、愈々、時局は迫り、長州の藩士が、續々、京阪の兩地へ、入込む事になつた當時は、未だ、毛利侯の入京を、許されてなかつたから、藩士が、公然、京地へ、這入る事は、出来なかつたのだ。其場合に、薩藩の旗印を用ひて、表面は、薩藩士である、といふ風を、裝ふて行つたのであるから、縱令、長州藩との聯合を、保つ上に於ての必要から、左様した事になつた、としても、それまでの便宜を、與へて呉れた、薩藩に對しては、一應の挨拶をするのが、當然であつた。其他、長州征伐の時の一條といひ、旁、それ等の挨拶を、なさねばならぬのであるから、政府の使者と、いふ事の外に、毛利侯の名代といふ、資格も帯びて、木戸は、鹿兒島へ乗込んで、久光に對面して、直に其足で、東京へ、引返したのであつた。

歸京の後、極めて小さい事のやうではあるが、木戸は、新聞發行を思ひ立つた。此事を、簡単に述べて置く。今日の時勢になれば、新聞雜誌の必要は、言ふまでもなく、特に其必要を説く者があれば、却て、迂闊な人間のやうに、他からも思はれるほど、新聞雜誌は、欠くべからざるものには、なつて居るが、未だ明治二年の頃には、新聞雜誌の必要を、一般の人が、認めて居た、とは、いへぬ。廟堂の班に列して、政治家面を、仕て居た者でも、新聞雜誌の事なぞに、深い考を、有つて居たものは、殆んど無かつた、といふても、可い位である。

左様した時代に、木戸が、其處へ眼を着けた、といふのは、矢張り偉い所があつた。尤も、文久年間から、新聞雜誌は、既に發行されて、或は興り、或は倒れ、興廢、更に定まりなかつたが、兎に角、それに似寄つたものは、發行されて居た。けれども、一般の人から、注意を引くやうな、立派なものとは、いへなかつた。

徳川時代には、瓦版なるものがあつて、世間の耳目を、驚かすやうな出来事には、其日の中に、版を起して、極めて粗末な、印刷物を作つては、江戸、八百八町を、呼賣をさせたものだ。赤穂の義士傳に、俗説ではあるが、大竹重兵衛と、勝田新左衛門の話の時に、義士討入の状況と、其連名を、呼賣に來る、といふ一節がある。即ち、瓦版なるものが、それであつた。今日でいへば、新聞號外と、いつたやうなもので、迎も、今に比べたら、物には、なつて居なかつたが、兎に角、さうしたものが、行はれて居たのである。

それよりか、體裁の好いものにして、殊更に、大きな事件が、起きるのを待つまでもなく、日々、の出来事を報じて、傍、大政府の布達や、布告のやうなものを、掲げる事にしたならば、可からうといふのが、木戸の意見であつた。

併し、木戸が、自身に、其事に當るのでなく、相當の人を選んで、之をやらせよう、といふ考へになつて、漸く見出したのは、同じ長州人で、山縣篤藏と、いふ人であつた。學問もあるし、文筆も達者で、奇才のある上に、足を運ぶ事や手數のかゝる事を、少しも厭はぬ、といふ、重寶な男であるから、斯ういふ者なら、必ず成し遂げるに違ひない、と見込をつけて、木戸は、山縣を招んだ。

「急の御用でも、出来たのですか」
 「イヤ、外の事でもないが、お前に、少し相談したい事が、あるのぢや」
 「ハ、一、そりやア、何ういふ事ですか」
 木戸は、膝を進めて、

「西洋諸國には、毎日の出来事を、其儘に印刷して、多數の人に配る。我國にも、今までにあつた、瓦版の如きものがある。之を、ニュース・ペーパーと、いふて居るが、我國でも、さういふものを始めたら、よからうと思ふのぢや。第一に、大政府が、是から新に、布告を、人民に示す事が、頻繁に起つて来る。それに就ても、隅から隅まで、裏店の者にも行渡る、といふ位に、布告を示す、といふ事は困難であるが、今、言ふたやうな、ニュース・ペーパーの方法に依つて、一般の者に、政府の御趣意を行渡らせる事は、最も必要である。その上に、日々の出来事を、一般の人に、早く知らせてやれば、人智開發の一端にも、なるのであるから、是非、之を行つて見たい、と思ふが、お前が引受けて、やつて見る氣はないか。實は、之に當る可き人物を、考へて見たのぢやが、容易に、適當な者が見當らず、お前なら、確かに出来るぢやらう、と思ふて、呼んだのぢや。やつて見れば、どうぢやな」
 「成程、西洋には、さういふものがある、といふ事は、豫て聞いて居つたし、又、横濱のブラツクが、既に作つて居るのを、一兩度は、見た事もある。貴下から、さういふ御話なら、宜しい、やつて見ませう」
 「それは、辱ない。是非、やつて見て呉れ」

木戸は、五百兩の包みを二つ、それを山縣の前に並べた。
 「サア、此處に千兩あるから、之を受取つてくれ。此金は、生さうと殺さうと、お前の自由ぢや。我輩は、此事に、口出ししない積りぢやから、お前の思ふ通りに、やつて見て呉れ。其成行を見てから、又、金を出す必要があれば、我輩にも考へがあるから、今は取敢ず、これ丈を、渡して置く」

「承知いたしました。それでは、確かに御預りして、直に着手する事に致します」
 山縣は、新聞發行の手續に掛かつた。

一一

明治の初年に、千兩の金は、今日に比べれば、一萬圓以上の、比較は取れる。若し上手に使へば、今の十萬圓の働きは、なし得るのである。新聞に就て、大した知識も無く、唯、西洋には、さうしたものがあつた、といふ事を、知つて居る丈で、これを眞似て見よう、といふ考から、木戸が、千兩の金を投出して、何の干渉も爲すに、一切の事を、山縣に委せた、といふ處に、木戸の偉い所はあつた。

千兩の金を、投出したから偉い、といふのではない。金なんぞは、天下の涌物であつて、欲しいと思へば、幾らでも出来るもので、使はうと思へば、何んな馬鹿にでも使へるのであるから、只だ、金を出したから偉い、といふのではないが、兎に角、新聞事業が、何ういふものであるか、といふ事も、能く知らずに、是から、文明國の仲間入をする、日本の國としては、特に必要なものである、といふ事を、認めた丈で、直に大金を投出して、何等の干渉する所もなく、其者に、一切を委せた、といふ所が、偉いのである。

山縣が、木戸に答へた、言葉の中に、横濱のブラツク云々と、いふ事がある。それに就て、説明して置く事がある。ブラツクといふのは、イギリスの人である。その伴が、寄席歩きをして居た、落語家のブラツクであつた。そのブラツクは、詰らない男であつたが、親父のブラツクは、實に偉い者であつた。尤も、落語家のブラツクの弟は、サミュエル商會の、番頭をして、貿易商の間には、相當の勢力を、有つて居たが、落語家のブラツクは、大した代物ではなかつた。

父のブラツクが、出して居たのは、日新眞事誌と稱して、一口に、ブラツク新聞と、呼んで居た。有識者の間には、

勢力を有つて居た、新聞である。山縣は、それに倣ふて、發行の手續を始めた。發行する前から、山縣の苦心は、その名稱を、何としたものか、といふ事について、可成り悩んだが、結局「新聞雑誌」といふ名で、發行する事になった。印刷の都合もあるし、記事は、集めるのに骨が折れるから、當分の中は、毎月六回といふ事にして、神田の今川小路に、本社を構へて、日新堂といふ、看板を揚げた。

所が、山縣は、却々細かい事にまで、能く氣が付いて、非常に働きのあつた所から、到頭「新聞雑誌」が、成切した。其後に、木戸を訪ねて来て、

「ヤア、到頭、物にしましたよ」

「ウム、大層な評判で、實は蔭ながら、喜んで居るのぢや。此上共に、骨を折つて、立派なものにして貰ひたい。我輩は、未だ見た事はないが、敦敦タイムスといふのが、世界一である、といふ事を、聞いて居るが、それまでにならずとも、其半分位にまでは、進めて貰ひたいものぢや」

「ナアニ、四五年も辛抱したら、何うか、斯うか、物にはなるでせう。就ては、金も儲かりましたから、先生から、預つて置いた金を、半分だけ返す事にしませう」

と言ひながら、五百兩の包を、前に出した。之には、木戸も、意外の思ひをして、

「ナニ、さういふ事はせずとも、宜しい。我輩は、あれだけの金を、棄てた積りで掛かつたのぢやから、返して貰はうとは、思はなかつたのぢや」

「イヤ、さうでもありませんが、是だけは是非、御收めを願ひたい。私も、貴下から、金を貰つて、之れを起した、となると、心中、甚だ平ならぬ所が、あるのですから、この金子は、受取つて置いて下さい」

「さうか。さういふ事情なら、兎に角、預つて置く事にしよう」

「其代り、先生に、願ひの筋があります」

「何ういふ事か」

「半分だけは御返ししたが、尙ほ半分の金は、社の爲に使つてあるが、是は、寄附して貰ひたい。今後、何ういふ成行に、なるが判らないが、盛衰、何れもせよ、残る半分だけは、寄附といふ事にして、貰ひたいのです」

「そりやア、勿論の事、初めから千兩は、出す積りで居たのぢやから、宜しいとも、君が、よいやうにしたら、宜からう」

「それぢや、改めて、さういふことに、願ひ置きます」

「併し、山縣」

「ハイ」

「僅かな歳月に、何うして、それ程儲けたのか。あの位なものを、刷り上げて、一枚の代價も、僅少なやうであるが、また、發行の枚數も、大概は知れて居るが、五百兩といふ大金が、浮き出したのは、何うも可怪しい、と思ふが、何ういふ都合で、是だけの餘裕を見たのか。それを聴いて見たい」

山縣は、ニコ／＼笑ひながら、

「流石の先生も、是は解りますまい」

「ウム、何うしても、其事情が解らぬ」

「それぢや、御話いたしましたせう。紙に文字を刷つて、一枚何程と、代價を極めて、配つた所で、其紙代は、極まつて居るので、儲けは、固より薄いものです。併し、其外に、綺麗にして儲かる事がある。それは、廣告料といふものです」

「ハ、ア、廣告料といふと、何ういふ事になるのか」

「例へば、或商店が、一つの品物を賣出す。それを、紙上で吹聴して貰ひたい、といふので、その吹聴料を取る。そ

れが、場合に依ると、新聞紙を百枚二百枚と、賣つたよりも、澤山の金になるのです。人の目に付かないで、其收入が多いのぢや。又、依頼する方でも、新聞の上で、商品を褒めて、書いて貰へば、自然、其新聞を見た者が、商品を買ひに行くやうに、なるのぢやから、それを依頼して、書いて貰ふ、賃料は高いにしても、品物が賣れれば、何でもなく、回收が出来るのであるから、快く先方でも、之に對して、金を出すのです」

「成程、さういふ秘術もあるのか。お前は、兎に角、之をやつて行くが、宜からう」

未だ其頃には、新聞事業に就ては、少しも判らなかつた時代であるから、木戸の如き、才智の廻る人でも、廣告料の所までは、氣が付かなかつたのであらう。山縣が、早くも其處に、氣が付けて、新聞經營の上には、此收入に依つて、維持の策を、立てなければならぬ、といふ所へ、注意したのは、流石である。

二一

木戸が、山縣に申付けて、「新聞雜誌」を起した外に、尙、獨力を以て、新聞を出して居たものも、多少はあつた。其一人が、賣藥の精銚水を賣出して、評判を取つた、岸田吟香と、いふ人である。岸田も、既に故人になつたが、精銚水の評判が、あまり大かつた爲に、新聞の創立者として、岸田の名は、却て知られて居ない。僅かに、識者の間に、いくらかは、知られて居たが、兎に角、岸田は、新聞の創設者として、その一人であつたのみならず、今の新聞體の文章は、岸田に依つて、或る點まで、工夫されたのである。其後、福地源一郎が、東京日日新聞を、やるやうになつてから、岸田が、力を一つにして、兩人の間に、色々と研究されて、到頭、物になつたのが、新聞體の文章である。此點から言へば、福地と岸田は、實に偉い人であつた。我國の人は、斯ういふ事に就て、その功勞者を、重く見ない風があるから、何でもなく、見過されてしまつた。が、福地と岸田は、新聞歴史の上から見て、大なる功勞者であつた。

さうして見ると、木戸ばかりが、早く此事に、氣が付いた、といふ次第でもない。唯、在官者として、人に先んじて、斯うした事に、氣が付いたのは、木戸が、第一人であつた、といふ事になる。

月日の経つに従つて、新聞雜誌の効能が、判つて來たから、そこで、各所に、同じやうな企てが、起つて來た。福地が、堂々と、日日新聞を創めると、司法卿の江藤新平が、福地を訊ねて、三百兩の金を寄附して、歸つて來た。それが、どういふ人だか、よく判らなかつたが、後日になつて、江藤である、といふ事が知れて、福地が、態々、江藤の所へ、禮に行つた、といふやうな、逸話もある。して見れば、實に木戸ばかりでなく、在官者の中でも、新聞の必要を、認めて居た者は、いくらか在つたに違ひないが、兎に角、木戸の奨励に依つて、山縣の「新聞雜誌」は、成切したので。其後、明治八年頃になつて、山縣は、何ういふ事情からか、此「新聞雜誌」から、手を引く事になつて、青江秀といふ人が、其後を引受けた。それが後に、政題して「嶺新聞」と、なるのである。

新聞雜誌の必要が、斯ういふ風に、一般から、認められて來る、といふ時代に、なつたのであるから、何事に就ても、進んで來たには、違ひない。

所が、王政復古と、いふ名は行はれたが、其實は、更に擧がらない、といふ事に就て、段々、八釜しい議論が、政府の内部から、起つて來た。

それは、何ういふ事情か、といふと、昔の大名の如き、格式はないにしても、依然として、諸侯は、地方に分れて、領地を、有つて居たから、其領分の人民は、藩主の言ふ事てなければ、どうしても、肯かぬといつた習慣が、未だ残つて居て、藩主の方からも、自分の人民として、視て居たのである。斯くて、大名と、領地内の人民は、昔ながらの關係が、保たれて居たのだ。

尤も、幾百年といふ、長い歲月の間、其習慣で、育てられて來た、一般の人民の頭が、今俄に、王政復古に、なつたから、といふて、藩主の側から離れて、朝廷の方へ走る、といふやうな事は、なか／＼行はれぬ事ではあらうが、

それが爲に、大政府の威令と、いふものが、六十餘州に、治く行渡らない事になる。それと、猶ほ一つは、藩主と藩臣の關係も、なか／＼面倒であつた。動もすれば、藩主が、昔の主人風を吹して、大政府に、仕へて居る、藩臣を威壓する、場合がある。中央の舞臺へ乗出して、相當な官位を、得て居る者は、今までのやうに、只だ理由もなく押付けられても、容易に、藩主の言ふ事を、聽かうとしない。それが爲に、自然と、藩主、藩臣の間に、軋轢が起つて来て、何時も、其事で惱まされたのが、舊藩臣である。彼是する中に、世界の事情も、判つて来るし、智慧も、段々、進んで来て、此儘に、過して置く事は出来ぬから、是非、廢藩置縣の世に引直して、全然、封建政治を、廢てしまはなければ、王政復古の實は、擧がらないのである、といふやうな、議論が、其方此方に、燃え出して来た。是が體で、廢藩置縣の、運動の端緒に、なるのである。其前に、愈々、王政復古となつて、明治政府が出来ると、第一番に、播州の姫路藩が、藩籍奉還を、願つて出た事がある。詰り、藩の財政が、逼迫して居た折柄、王政復古といふ事になつて、藩主が、今までのやうに、隨意の行ひが出来ぬ、となれば、逆も、藩の獨立を、保つて行く事が、むづかしくなるから、寧ろ、藩籍を奉還したい、といふやうな、願ひであつた。

當時、兵庫の知事であつた、伊藤俊輔の手許へ、その願書が、出て来た。流石に、伊藤は、其時分から、新しい頭を、有つて居たから、之れを切ツ掛けに、時代の轉機を圖らう、と考へた。

『こりや面白い事が、始まつて来た。藩籍奉還を、官に姫路藩だけでなく、一般の藩にも及ぼして、全く封建政治の基礎を、破つてしまはなければならぬ。それをするには、絶好の機會であるから、是非、之を土臺として、廢藩置縣を、中央政府に、促して見やう』といふ考へになつた。

折柄、不平で、政府を辭して居た、陸奥陽之助が、和歌山へ、歸つて居たので、伊藤は、陸奥を呼出して、兩人が相携へて、東京へ上り、廢藩置縣の運動を始めた。

廢藩置縣の經緯

一

陸奥と伊藤が、連立つて上京した。姫路藩の、藩籍奉還の願出を幸ひとして、此際、全國の、廢藩を實現させやう、といふのが、兩人の意見であつた。

兩人は、相談の上、手を分けて、運動する事になつた。陸奥は、岩倉を説き、伊藤は、木戸を説く、事に、その分擔が定まつた。

いかに名論卓説でも、其時を得ざれば行はれぬ。兩人が、姫路藩の事から、廢藩置縣を、思ひ付いて、活動を始めたのは、流石に、一隻眼を有つた、遣方ではあつたが、まだ其時は、全般的の機運が、其處にまで、進んで居なかつた。折角の奔走も、其甲斐が無く、終つたのは、それが爲であつた。

伊藤が、木戸を、訪ねた時に、木戸の答へは、

『それは、よい所へ、眼を着けた。我輩にも、異存は無いが、未だ其時でなからう。實は、其件に就て、それ／＼に、取調べも終り、何時でも、差支の無いやうに手順は運んであるが、此事は、幕府を倒すよりも、猶ほ一層の困難がある。迂濶に、手を着けると、意外の變が起ると、思ふ、巧く行けば、何の苦もなく、スラ／＼と通過するが、一つ失敗したら、それこそ、一大事になるのであるから、餘程、其時を考へて、上手にやらぬと、徒に失敗する事にな

る。どうせ、長い事ではない、近く其時は来る、と考へるから、其時には、君等の骨折を、頼むやうになる。参考の爲に、見せて置くが、我輩は、是までに取調を、済ませてあるのぢや」と、言ひながら立つて、木戸は、大きな箱を、持つて来た。それを開いて、見ると、その中には、調査の書類が、一ぱい詰めてあつた。伊藤は、一々、書類を見て、更に驚いた。廢藩置縣に關する、一切の取調べが、總て書類になつて居るから、流石に、先輩の木戸は、偉ひ者だ、と思つて舌を捲いて、驚くのみであつた。

是までの調査が、済んで居るにも不拘、今は其時でないから、待つて居れ、と言はれたのであるから、それでも、即時に着手しろ、とは、いへぬのであつた。

伊藤は、姫路藩の、藩籍奉還に刺戟されて、急に思ひ立つて、上京して来ると、案外にも、先輩の木戸は、既に一切の取調を終り、偏に其時を待つて居ると、いふのであるから、其儘に、引取つて来たが、陸奥の方は、何としたか。それを聞いてから、第二段の策動に、移る外なかつた。

岩倉へ廻つた、陸奥は、鋭い辯舌で、頻に岩倉を説付けようとしたが、岩倉も、之には即答を與へなかつた。維新の大局に處して、あれだけに、立派な功績を、擧げた人であるが、諸藩の事情には、暗い所が多くあつて、今俄に廢藩置縣を實行する、といふ事は、斷言し兼ねて居た。

「貴下のやうな御方が、此際に、大英斷を以て、廢藩置縣の實行が、出来ぬやうな事では王政復古の實は、何時になつたら擧がるか、殆ど知る事が、出来ない。實は、薩長二藩の專横には、貴下も、苦んで居る事と考へるが、我等としても二藩の態度に就ては、甚だ不満に堪へぬ事が多い。今日の有様で、押して行つたならば、徳川幕府を倒しながら、それよりは、質の悪い、薩長二藩の政府を、迎へた事になつて、折角の維新も、何の爲か、判らぬ事になる。現に、今日の事が、もう其状態になつて居る。して見れば、速かに廢藩置縣を行ふて、普天の下、率土の濱、

ひとしく王土王臣たるの名の下に、彼等の頭を押へ付けてしまふ、といふ事は、何より先に、爲なければならぬ事であつて、貴下のやうな御方が、之を躊躇せられるのは、其意を知るに苦しむ」と、陸奥一流の辯舌を以て、捲し立てるやうに論じ詰めた。

伊藤と相談して、廢藩置縣の、運動に來た、陸奥が、岩倉を、説く場合に、薩長二藩の專横を罵つて、彼等を押へ付ける上から、廢藩置縣は必要である、と説いた所に、陸奥の本領が、現はれて居る。何處までも、藩閥打破で、固まつて居た、陸奥としては、當然の事でもあらうが、當時の岩倉を、此論鋒を以て、説き落さうとしたのは、無理であつた。薩長二藩に對する、感情は別として、廢藩の事は、急に行ふ可きであるが、前後の事情も、よく考へて視る必要がある、

岩倉も、此件については、可成り、大事を取つて居たらしい。

「足下の言ふところにも、道理はある。されど、今俄に、それを實行する、といふ事は、御約束いたしかねる。遠からぬうちには、さういふ事にも、ならうが、今は、其時機であるまい。まア、暫く待つが宜い。是だけの大問題を決するのには、西郷や大久保の、意見もあらう、と思ふから、何れ相談はする積りであるが、今が今、直ぐ返辭をしる、と言はれても、自分は、何とも答へる事は出来ぬ」

岩倉は斯う考へた。

陸奥としても、此上は、致方がないから、一時引取ることにした。伊藤に會つて見ると、木戸の返辭も、矢張り大同小異であるが、併し、木戸は、既に調査も、届いて居るのみならず、近く實行する覺悟である、といふ事を、確め得たので、態々、上京した甲斐は、あつたといふ譯だ。

此時に、一つの珍談があつた。陸奥が、小二郎と、いふて居た頃の事で、坂本海援隊に這入る、ずつと前、江戸に

出て、安井息軒の門に入り、修業して居る間に、放蕩を始め、到頭、退蕩させられると、悪い腫物が、體中、一ぱいに出来て、歩行にさへ惱むほどであつた。遇々、神田の花岡といふ、醫者に救はれて、厄介になつて居る中に、入院患者の一人、吉原の甲子樓の遊女で、歌川といふものと、好い仲になつた。歌川が退院してからは、日夜、甲子樓に、遊び暮して居た。果は、遊ぶ金に詰つて、歌川も、身揚りを、爲るやうになつた。歌川は、熱々、考へた末、年期を増して、二十五兩の金をつくり、小二郎に、異見を加へて、別れる事にした。歌川の戀は、冷めたものではなかつた。小二郎と、末を遂げられぬ、と視て、双方の將來を、想つた爲に、冷めぬ戀を、あきらめてしまつたのである。それから的小二郎は、京都へ引揚げて、父の宗廣にも逢ひ、義兄の五郎とも、相談の末、本統の浪士生活に入つた。坂本龍馬との關係は、それからの事である。

歌川が、普通の女郎と異つて、小二郎の前途を、考へてした事であるから、それ丈に、小二郎の頭には、歌川の事が、残つて居る。若し、自分が、志を得て、身分が出来たら、歌川には、酬いるつもりで居たが、今度、出て来たのを幸ひに、甲子樓へ行つて見ると、歌川の姿はもう、見えなかつた。

深川の假宅へ、行つたとも聞いて、ひそかに、探して見たが、どうしても、判らなかつた。今では、陸奥の姓を名乗つて、堂々たる身分にはなつて居るが、此一事は、氣懸りてならなかつたのだ。

或夜、伊藤と、酒を飲んで居る時に、此話を漏したので、斯ういふ事には、洵に親切で、物好きな所もある、伊藤の事であるから、頻に乗氣になつた。

『そりやア、面白い。俺が、手傳つてやらう』

と、頼まれもしないのに、馬に乗つて、陸奥と兩人で、毎日のやうに、歌川の行方を捜して歩いた。

歌川は、深川の假宅に移つて、名を改めて居たから、容易に判らなかつた。

それを、やうやく、捜し當てたので、兩人は、訪ねて行た。歌川には、二世と言交した、難吳服の商人が、あつた

ので、陸奥は、その男にも面會して、歌川の將來を頼み、改めて夫婦にしてやつた。商業の資本も興へたから、夫婦は共稼で、楽しい日を送るうちに、商運が、うまく巡つて、大きな店を、有つやうになつた。日本橋の横山町で、木綿問屋の何某と、人にも尊敬されるやうな身分になつて、晩年を、氣安く送つたが、廢藩置縣の運動に、出て來た、陸奥が、内密の仕事としては、斯ういふ事もあつた。

一一

岩倉は、公卿でありながら、何處となく、公卿離れがして、一種風變りの、人物であつた。徳望を擔ふて、内閣の首班に列し、偉い連中を、纏めて行く事は、三條の人格が、よく之を成したが、實際の働きは、岩倉の手に依つて、裁かれて居た。其代り、岩倉は、膽玉が太かつただけ、又、機略に富んで居ただけに、時には、機略を弄ぶの傾きがあつた。

三條と岩倉は、初め悪く、後に相和して、明治になると、復た脊中合せになつた。四年の頃には、三條の方で、岩倉を、避けるやうに、なつて居た。木戸と大久保は、西郷が、岩倉を喜ばなかつた程には、悪く視て居なかつた。後に征韓論で、此兩人が、岩倉と結ぶやうに、なつたのも、西郷が、岩倉を、悪く視て居た程に、兩人は、岩倉を、信用しなかつた譯でもない、といふ事が、想像し得るのである。

世の諺に、棺を覆ふて、名、初て定まる、といふ事がある。岩倉が死んで、既に四十幾年になるが、是非の評が定まらない、といふほどに、岩倉の人格にも陰翳が、多く在つた。大概な者は、その死後に、批評は定まるが、岩倉は、死して四十年の今日、尙、是非の評が、定まらないのであるから、怪物といふ可きである。

その岩倉でさへ、廢藩置縣の當時は、全く除外されて、三傑以外、その相談に與るものは、一人も無かつた。殆ど事後承諾にひとしき、取扱を受けたのに對しては、流石に、岩倉も憤懣に堪へなかつたが、胸を撫つて耐へた。三

傑が、若し岩倉に、相談するとなれば、勢ひ、三條にも、打明ける外なかつた。併し、此問題は、無事に、遂行し得てから、之を視れば、何でもない事のやうであるが、一步を過まれば、兵亂の禍になるのであるから、三條は、一切の責任を負ふて、必死の覚悟を以て、之に當つたのである。従つて、何人にも、それを知らさず、三條の專行で、やりつけた所に、却て苦心の深いものはあつたのだ。

三條は、温厚の長者で、敢て經世の才があつた、といふ次第でもなく、いづれかといへば、斯うして問題について、あまり有力な、相談相手でもなかつたから、岩倉にさへ、秘密にして居た以上、三條を除外したのは、當然の事であつた。

▲此問題に就て、三條の苦心、大久保と木戸が、西郷を憚かつて、容易に、手を下し得なかつた事や、長州派の人が、いかに活動したか、といふ、内情は、南洲傳を、参照せられたし。

西郷と大久保が、木戸の屋敷に集つて、大方針を定めて、翌朝は、三人が打揃ふと、内閣へ出て來た。今日は、大切な相談があるといふので、豫め、三條へ、通告して置いたから、三條は、岩倉と共に、待ち受けて居た。三條からは、廢藩置縣の、即時斷行を、持出した。岩倉は、苦い顔をして、三條の態度を、見詰めて居たが、三條は、眼を丸くして、

『そりやア、大い事を、極めなはつたのう。そないな事になつて居るのなら、前以て、相談をして下はつたなら、我等にも、考へはあつたのぢやが、今俄かに、そないな事をしなはつても、若し騒動が起きたら、どないにしなければ積りか、俺や、それが心配でならぬが、先づそれを、聽かせて貰ひたい』

木戸は、膝を進めた。

『其處ぢや。それは我等とても、同じ考へでござつたが、併し、其點に就ては、西郷さんが、一切を引受る、といふので、是までに相談を定めた次第ぢや。其席には、大久保さんも居られて、よく聽いて居つたのぢやから、間違ひ

は無い。又、引受けたのが、西郷さんだけに、俺も安心して、覺悟を強うしたのぢや』

三條が、誰を信じて居たか、と言へば、一番に、西郷を信じて居たのだ。西郷が、此事に就て、それまでに、踏張つて引受けた、といふのでは、此上、三條は押返して、異議を唱ふる氣もなく、黙つてしまつた。

是から、大久保が代つて、廢藩置縣を實行する、手順に就て、詳しい説明をした。莊重な辯舌を以て、諄々と、説いて行く。大久保の説明に、疎漏は無い。長い間、木戸が、苦んで調べて、大久保が、之を吞込んで、賛成したのであるから、此兩人が、代るべく説明をすれば、何んな者でも、切込んで行く際は、無い譯だ。況して、諸藩を廢して王政復古の實を擧げる、といふのに就て、岩倉や三條に、異議のあるべき筈は無い。強ひて言へば、自分等が、密議に、參加し得なかつた、といふ事であるが、それは、自分等の私情に過ぎず、此席に於て、論ずべき限りのものでない。殊に、實行の後に起る、騷擾の責任に就ては、西郷が引受ける、と聞いては、もう反對の餘地がなかつた。其處まで、三人が、取詰めた計畫をして、今、内相談をする、といふのであるから、流石の岩倉も、一言半句、故障のひやうがなく、此提議に、賛成する事になつた。

岩倉は、多少の不平があつても、いよく同意したとなれば、三條よりも強い所があつて、先づ内容の改造を、主張した。

『此問題は、維新の變革以上に大事件であるから、先づ各參議を、辭任せしめてから、更に三人が、新たに參議となつて、斷行の責任に當る』

といふのが、岩倉の意見であつた。

これには、相當に異論もあつたが、結局は、それと決して、三頭内閣が、茲に成立したのである。

凡そ天下の事は、其機運を見て、下シくやり付けければ、大概は、成就するものである。其機運を見ながら、徒に左顧右盼して居ると、何時か、機運が、通り越してしまつて、更に機運の到るを待つ、といふまでには、容易な事ではない。併し、其機運なるものを、見付け出すのが、なかく難かしい。成敗の跡に就て視れば、機運の去來は、よく判るが、實地に臨んで見ると、傍で觀る程、機運が乗ずる、といふ事は、やさしいものではない。維新の鴻業も、過ぎた跡から、理窟を附會すれば、何とでもいへるけれど、兎に角、幕府の力は、相當に強かつたのであるから、之れを易々と、押付けてしまふ迄には、可成りの苦心があり、只だ機運を捉へる事に、すべての知能を、働かした點は、敬服す可きである。廢藩置縣の如きも、洵に難かしい事があつたが、只だ其機運を、巧く捉へて、鐵石の如き、決心を以て、斷行し去つたから、美事に、成功したのであつた。

新政府の基礎は、追々に、固くなつて來て、もう廢藩を行はなければ、新政府の威令が、行はれぬ事になる。唯だ恐る可きは、その場合に、舊藩主や、藩臣にして、頑迷なる輩が、騷擾を引越す事である。然るに、政府には、それを鎮壓する丈の兵力がない。全國へ渡つて、一時に起る騷擾は、兵力に據つて、叩きつける外はないのだが、その出來ぬからは、危険、此上なき事である。

けれども、此一事は、何時まで待つても、同じ事であつて、廢藩を行ふからは、必ず一度は、避け難いのであるから、寧ろ、此際に、斷行してしまへといふのが、三傑の覺悟であつた。若し此時に、之を行はなかつたならば、或は十年の後になつても、尚行はれなかつたかも知れない。

表面に於てこそ、天下は穩かになつたやうに、見えて居るが、全國を通じて、未だ徳川の昔を、夢みて居るものは少なからず在つて、錆びた槍を、恨めしさうに眺めて居る連中は、頗る多く居たのであるから、一日も早く、廢藩置縣を行ふて、新しい舞臺を開けねば、却て、恐る可き、禍亂が起きて居たかも知らなかつた。於此、三傑の勇斷は、時機を得て居たと、いへる譯だ。

三條や岩倉には、其點に就て、暗い所があつた爲か、初めは、三傑の決心を、早計の如くにも思ひ、且、諸藩の反抗を恐れて居たが、西郷の保證で、いくぶんの安心もあつたのだ。

乍併、此事は、百官有司の間に於て、さういふ風に纏まつても、陛下の歡慮が、其處に及ばなかつたならば、矢張り行はれた事であつた。然るに、明治天皇は、御列聖中でも、殊に優れたる、英主にて、あらせられし爲めに、是程の大問題を、少しの御懸念も無く、御裁可に相成つたのは、實に難有い事である。三傑の苦心も、さることながら、明治天皇の御聖斷を、國民は、深く感謝しなければならぬ。

是程に、大きな問題でなくとも、陛下の御裁可を、仰ぐべき事柄に就ては、一切の書類を整へて、差上げる事に、なつて居た。従つて、書類を御覽になれば、少しの疑義も起らずに、御裁可が願へるやうには、仕組んであるのだが、如何なる問題に就ても、決して盲判をなさらぬ、陛下は、必ず何事かの御下問があつて、何時も、奏請者が、御答へに苦しむ、といふやうな事があり、殊に、大きな問題に就いて奏請のありし場合には、必ず急所を突いて、御下問があるの、奏請者は、御答に窮して、御前を下る事も、屢々、あつたやうに、漏れ聞いて居る。

況して、廢藩置縣の如き、國政上に、大變革を來す可き、問題に對しては、流石の二傑も、顔を見合せる程に、急所を突いて、御下問はあつたが、それには一一、御答へを申上げて、即日、御裁可といふ運びになつた。

一切の布令、其他の書類も整へて、もう是で宜しい、といふまでの臆立が出来てから、愈々、諸藩へ對して、御沙汰を下す事になつた。

第一に、藩長士肥の四藩主が、參内を仰せ付けられる。是が、明治四年の七月十三日であつた。

其時、四藩主に對して、下賜つた御沙汰の文意は、斯うである。

『天下の大勢に鑑みて、舊來の藩制を廢し、府縣を設けて、王政の普及を圖る。それに就ては、幾百年の因襲を、一朝にして打破るのであるから、汝等は、先づ以て、維新の鴻業に従ふた、精神を忘れず、飽くまで、此大令を覆賞

して、他の諸藩主をして、必ず過なからしむるやう致せ」
 既に覺悟はして居たであらうが、御沙汰を承つた時、四藩主の心持は、どんなであつたらう。三百年來、傳へられた舊領土は、此御沙汰一つで、全く失ふのであるから、所謂、藩主としての權威も、全く消えてしまふのだ。四藩主の感慨は、非常に深いものがあつたらう、と察せられる。
 それから、熊本、尾州、徳島、鳥取の四藩主へは、勅書を以て、御沙汰を下す事になつた。是等の藩主も、豫め覺悟して居たから、藩の代表者が、直に参内して、御受けをする事になつた。
 當日の宮中は、異常な忙しさを、何となく、重々しい空氣が、掩ふて居るやうな、氣がしたと傳へられてある。杉孫七郎が、今、御廊下を、急いでやつて來ると、向ふから來たのが、鳥取藩の沖操三と、いふ者であつた。杉の姿を見ると、沖は、ずつと進んで、

「イヤ、杉さんか」

「これは、沖さん」

「今日は、御目出度う」

と云ひながら、沖が、頭を下げたので、杉は、聊か面食つた。何が目出度いのか、杉には、判らなかつた。
 『今日は、廢藩の御沙汰が下つて、先づ王政復古の實も擧つた、といふものぢや。倒幕の御趣意も、愈々、相立つ事になつて、此以上の目出度い事は無い』

と、いふのを聞いた時には、思はず、杉が、一步進んで、沖の手を握つた。
 『イヤ、有難い。君から、其一言を聴かうとは、思はなかつた。斯んな嬉しい事は無いよ』

と言ふて、其日は別れたが、鳥取藩の沖は、有繋ぢや、といふて、其名が、漸く百官有司の間に、知られたとの事である。

四

人が、出世をする動機は、意外の所にあるものだ。前に言ふた、沖操三といふのは、後の守固の事で、鳥取藩から出た者は、其當時に、幅が利かなかつたのであるが、沖は、鯉昇りに出世して、神奈川縣令に迄なつた。其原因は、宮中の御廊下で、杉に向つて言ふた『お目出たう』の一言からである。

後年には、奥田義人と、いふやうな人物も、出て來て、大臣にもなれば、東京市長にもなつて、頗る評判は善かつたが、是は時勢が、人材を容るゝやうな、世になつた結果である。奥田に、それだけの値打があるから、それ迄になつたのも、當然であるが、まだ、明治の初めには、必ずしも、人材が登用される、とは限つて居なかつた。薩長二藩が、權威を專にして、之に次いで、土肥の二藩であつたが、兎に角、此四藩から、出た人ならば格別、其他の藩から、出た人は、大概な智者でも、昇進する事は、容易に出來なかつたのである。沖が、神奈川縣令まで漕付けた、といふのは、先づ異數の出世と、言ふて宜からう。

四藩主が参内して、御沙汰を受けた。其晩の事であるが、西郷の許へ、藩主茂久から、直に來い、といふ、使者が來た。猶は、此一條に就いて何か苦情があるのだな、と、其處は、西郷だけに、豫め覺悟して、藩邸へ、やつて來ると、直に拜謁を許される。茂久は、澁い面をして、幾分か精神も、興奮して居るらしく、顔は上氣して、赤味を帯びて居た。左右に控へて居る、家來は、恟々して居るやうに見えた。

『今日、御沙汰に依つて、参内致すと、藩制廢止に就て、御諒が下つたのぢやが、之に就ては、其方等は、豫て承知の事でもあらうが、何故に一應、余の耳に入れなかつたのか。其次第を聴きたうて、招いたのぢや』

西郷が、豫め覺悟した通り、矢張り其事であつた。

『恐れながら、御答へ致します。此事は、豫め申上げずとも、君侯に於かせられては、既に御承知の儀と、考へて居

りました」
西郷の一言に、茂久は、不審に思ふた。

「フ、ム、余が豫め心得て居つたらう、とは、何ういふ意味か」

「されば御座います。維新の際に、討幕の大義を唱へて、朝廷の御意に従ひ、出兵まで致して、各所の戦ひを、御引受けいたしたのは、ありや、封建政治を破つて、王政復古に、致す爲てござつた筈、して見ますれば、今日を待つまでもなく、既に廢藩の事は、行はれて居らなければならぬ譯でありました。それが、今日まで延々になつたのは、朝廷にも、御都合があり、又、諸藩の人心も、全く鎮靜に至らざりし爲て御座ります。斯くして、延び居りましたのが、今日になつて、やうやく行はれたまでの事で、敢て此件に限り、君侯の御耳に、入れるまでもなく、豫ての御覺悟と、考へて居りましたが、何故に、斯やうな儀に就て、御尋ねがあるので、ござりまするか、頼と御意が解りません」

斯う答へて、西郷は、茂久の顔を、じつと見詰めた。之には、茂久も、返す辭が無かつた。

維新の際に、討幕軍を、眞先に繰出した、薩藩は、廢藩置縣に、反對する事は、出来ぬ筈だ。維新の變亂に先立つて、王政復古の御沙汰が、既に出て居る。して見れば、廢藩置縣は、其時に、既に實行す可きであつた、と云へる。西郷は、洗石に、巧い所を捉へて、答へたものだ。けれども、茂久の、西郷に對する不満は、管にそればかりでなく、外にもあるから、簡単に、怒の解ける譯はない。

「其方が、申す所は、一應の道理がある。供し、徳川を倒した結果が、自然に、さうなつて来る、といふ事は、固より覺悟の上ではあるが、今日、俄に御沙汰が、下る前には、豫め其方等が、陛下に向つて、申上げた事は、判つて居るのぢやから、何故一應は、余の耳に入れなかつたか、それを、申して居るのぢや」
「ハツ、其儀に就ては、何とも申譯は、ございませぬ。廢藩置縣と、輕くは申しましても、實は、天下の一大事を、

斷行いたすのでありますから、晝夜をかけて、幾日かの會議でありました。様々の難關を押退けて、此處まで漕付けまするには、容易ならぬ苦心も御座りました。且つ、秘密の中に、急速に運ばなければならぬ、といふやうな、事情もござりました、前以て言上する事は控へましたが、それと申しまするも、既に君侯に於かせられては、其儀を御承知とのみ考へた爲めて御座います。併し、只今の御言葉、賜りましたに就ては、偏に私の手脱りて、ござります故、幾重にも、御詫びを、仕ります」
前には、強く答へて、後には、優しく謝つて行く。其應答は、如何にも巧妙であつた。茂久も、此以上は、叱り付ける事もならず、其晩は、それで免されて、西郷は、歸る事が出来た。

薩藩でさへ、斯ういふ事が、あつたのだから其他の藩にも、同じやうな事が、あつたには違ひない。是だけの事を、考へて見ても、廢藩置縣の、容易でなかつた事は、判るのである。

五

三傑のみが、參議として居残り、大體の方針が定まつて、再び内閣の改造が行はれ、これから、廢藩置縣の問題が、閣議に上つて來たのである。

その間に、奏請の事は、二卿三傑が、既にすまして居る。手續きとしては少し可怪しいが、當時は、さうした遣方をしたのである。

この閣議に、連なつた人々を擧げて見やう。土州藩では、板垣退助、後藤象二郎、福岡孝悌、佐々木高行、肥前藩では、副島種臣、江藤新平、大木喬任、大隈重信、薩藩では、西郷吉之助、大久保利通、長州藩では、木戸孝允と、いふやうな顔觸であつた。是等の人々で、やり付けてしまつたのだから、陛下の御裁下と同時に、迅速に、運びが付いて行つたのも、當然な譯だ。

乍然、諸藩の中には、動搖も起きて、激しい反對の議論を、唱へるものも出て来たが、此時分には、藩主の意氣込が、昔のやうでなく、それに恐ろしいものは、時勢の潮流で、多少は、世界の趨勢も、解つて居たから、何うか、斯うか、反亂を起す、といふまでには至らずして、存外に、軽く済んでしまつた。第一に、政府が、何處までも安靜を裝ふて、少しも遲疑なく、やり付けてしまつた、といふのが、是程の大問題を、手際よく片付け得た、一つの原因にもなつたのである。

江藤新平が、江戸城明渡しの際、人知れず、集めて置いた、國別地圖と、いふのがあつた。それは、幕府に於て、多年、其道の人に命じて、拵へて、置いたものであるが、之に依つて、廢藩置縣の分布が、巧く行渡つて、非常に便利を得た、といふ事である。城明渡しの際、混雜中に、在り乍ら、江藤が、さうした文書を、集めて置いた、といふのは、流石に、江藤だけの事はある。

内閣には、有ゆる人材が、頭を揃へて居て、やり付けたし、畏れ多くも、天皇陛下の御裁下を経た、といふ事を、眞向に振鬚して、掛かるのであるから、諸藩の動搖も、多少はあつたにしても、巧に壓へてしまつたのだ。

けれども、其後、尙ほ頑迷な輩は、舊藩政の習慣を襲ふて、何處までも、中央政府の命令を、拒否するが如き、態度に出て居た、といふ傾きはあつた。現に、福岡藩に於て、中央政府が、發した、紙幣が、一行に通用せず、却て、藩札の方が、氣受が好かつた。中央では、廢藩置縣の布令が、出て居るにも拘らず、福岡藩では、藩札でなければ、品物を買ふ事が出来ぬ、といふ、奇怪な事實があつた。

廢藩置縣に對する、一種の反抗と、視る可きであり、舊藩の勢力を以て、中央政府に、威嚇を興へて居たものである。其頃の大藏省は、非常に權力が強く、未だ内務省の無い時で、大藏省が、廢藩置縣の事務を、執つて居るのであつた。

大藏省の擔任する、政務は、頗る多端であつたから、その役人にも、人材を網羅して、何の方面にも、向くやうに

はなつて居た。試に重立たる者を、擧げて見れば、伊藤博文、中島信行、松方正義、上野景範、遠藤謹助、陸奥宗光、安場保和、前島密、吉田清成、津田出、益田孝、伊集院兼寛、澁澤榮一等の遺手は、大藏省に集まつて、井上の指揮の下に、働いて居るのである。

されば、當時、井上の勢力は、實に豪いものであつた。世話好の氣象が、何時か知らず、干渉好になつて、何事にも、自分から、手を着けなければ、やらせなかつた、といふ風であつたから、各省との折合が、非常に悪かつた。

然るに、福岡の藩札一條が、涌いて来た。井上は、斯うした場合に、問題を、自然の成行に、委せて置く、といふやうな人ではなかつた。民部省の役人で、親しい交りのある、大江卓を呼んだ。

『福岡藩に於て、廢藩置縣の今日、猶ほ藩札の行はれて居る爲に、中央政府の金札が、更に行はれぬ、といふのは、甚だ怪しからぬ次第であるから、早速、之を押へ付けて、嚴重な處分を、加へて来るやうにして欲しい』

『宜しい、早速、參つて、手を着ける事にするが、それに就ては、從令、鐵砲は撃たぬまでも、多少の兵威を、示さなければならぬ、と思ふから、其辭だけは、豫め御含みを願ひたい』

『宜しい』
と、打合せが済んで、大江は、福岡へ下つた。

此時には、大江も、死を決して、乗込んで来たのだ。昔からの大黒田の城下であつて、其藩臣が、中央政府の、威令に従はずに斯ういふ事をやつて、居る位であるから、無論、之を壓へやうとすれば、自分の生命が危ない位な事は、覺悟して掛かつたのだが、幸にして、大江の遺方が宜かつたので、兵力を用ひずに済んだのは、此上もない事であつた。

黒田藩の重臣を二三人、犠牲にして、東京へ引揚げて來ると、民部省は、既に廢止されて、自分の行く可き役所が無かつたのである。

まさか貸家の札は、貼つて無かつたが、民部省の門は、固く閉ざされて、番人も居なかつた。大江は、非常に憤激して、大藏省へ、怒鳴り込んだ。

『自分は命賭で、是だけの大役を、果して来たのに、役所は廢されてしまつて、歸つて来ても、戸惑ひさせられるといふが如き事は、甚だ怪しからぬ』

と言ふて、怒つたが、政府の都合で、廢止になつたのであるから、怒るには怒つたが、誰一人として、對手になるべき者もなく、井上に迫つて、嚴談に及んだので、井上は、頭を掻きながら、頻りに申譯けをする。

『洵に氣の毒だが、斯ういふ都合になつたのだから、何うか、免して呉れ。併し、君の働きに對しては、政府でも、決して放任しては置かぬ、我輩も、充分に盡力するから、さう怒らずに、我慢して呉れ』

といふ譯で、大江も、泣癡入になつたが、併し、此事が原因になつて、大江は、神奈川縣廳へ移つて、今といふ内務部長と、同じ役に就いた。

岩倉大使一行の洋行

非常に難しく思はれた、廢藩置縣の事も終り、政府の基礎は、漸く固くなつて、今は、内に顧るの憂ひが、少しも無くなつた。そこで、然るべき人物を見立て、海外に送り、各國の、帝王や大統領にも會見して、修交の誼を固め、傍ら文明國の風俗や、政治の實況を、視察して置く必要がある、といふので、頻りに相談が始まつた。最初は、さまでの計畫でもなかつたが、追々に擴がつて、果は、大袈裟な計畫になつて来た。勿論、其一行を率ゐて、行く者は、陛下の御名代といふ、資格を有つのであるから、従つて、一列に加はる者も、其人を選ばなければならぬ、といふ事になつた。

岩倉具視が、特命全權大使と、いふ事になつて、木戸孝允、大久保利通の兩人が、副使の格であつた。隨行者は、工部大輔の伊藤博文、外務少輔の山口尚芳、外務少書記の田邊太一、外務大書記の鹽田篤信、一等書記の福地源一郎、久米邦武、二等書記の柴田昌吉、渡邊洪基、小松濟治、其他、村田新八、岡内重俊、安藤太郎、金子堅太郎、山縣伊三郎、相馬永胤、田中貞吉、安場保和、佐々木高行、田中光顯、香川敬三等の人々であつた。其他に、鍋島直大、東久世通禧なども、附いて行く事になつた。尙、津田梅子や、山川捨松、其他に、十數名の婦人が加つて、一行の人数は、殆ど百五十人と、いふのだから、實に素晴らしいものだ。

昭和の今日でこそ、洋行するといふても、別に珍しくも思はれず、大してまた、難しい事でもなく、十六か七の青年が、小さな靴、一つ持つて、桑港通ひをして居るのは、横濱や神戸へ、行つて見れば、普通になつて居る位で、洋行したからといふて、それ程に驚きもしないが、まだ、明治の初年に於いて洋行といへば、大層なものであつた。若し、西洋へ行つて、歸つて来ると、其日から、月給取ならば、二割や三割の給料が、増す位であるから、洋行の有難味は、非常なものであつた。近頃では、慈な洋行なら、却て其人の相場は、下落するやうになつた。「彼奴は、洋行歸りのハイカラだから、役に立たぬ」と、一言に、抹殺されてしまふ位だ。

岩倉大使の一行中では、四五人を除いて、初めて行く者ばかりであるから、仕度の業々しい事は、又、格別であつた。殊に、百五十人といふ、十ダース以上の大連中であるから、銘々の煩はしい仕度が、實に混雑を極めた。それが、ゴツチャになつて、大騒ぎを爲るのだから、今の不規則な、團體旅行と、何の擧ぶ所は無かつた。赤毛布を背負つて、右大臣首め、百五十人が、揃つて押出したのだから、流石の毛唐も、これには驚いたらう。乍併、特命全權大使といふ、名義で乗出すのだから、各國政府でも、此一行を迎ふるのには、相當の準備をして、待構へたのは勿論である。一行中の、重立たる人の事は、少しく述べて置きたい。岩倉、木戸、大久保、伊藤の四人は、姑く措き、先づ鍋島直大の事から、言ふて見ると、是は、佐賀の藩主であつて、惻巧な殿様であつた。あまりに惻巧であつたから、維新の際には、極めて曖昧な、態度であつた。伏見鳥羽の一戦が済んで、大勢が定まると、初て乗出して来て、それから上手に立廻つたので、薩長土三藩の外に、肥前も加はつて、之を薩長土肥と、稱へるやうになつた。伏見鳥羽の戦ひが、起る前には、薩長土肥の稱は無く、土州藩が、開戦と同時に、加はつて来たので、三藩聯合の形になつた。鍋島藩に限つては、沈香も焚かず、屁も放らずで、僅に江藤新平が、輕輩の身を以て、或は薩邸に隠れ、或は長州藩士の、庇護の下に、辛うじて勤王討幕の、働きをして居たに過ぎなかつた。是が爲に、鍋島藩の、面目の

幾分は、保つ事が出来たのである。尤も、鍋島の殿様は、昔から狡い人が、續いて居たものか、聞く所に依ると、無暗に、妾を置いて、子供を産へては、領分内の、金満家を見立て、それに子供を授けて、色々な名義で、金を捲上げると、といふやうな事を、盛にやつたものだ、といふが、其所因か、佐賀人には、他を疑ふやうな調子があつて、一種、険しい氣象を、有つて居るのは、藩主が、斯うした風の遺方で、あつた爲に、自然、一般の氣風が、人を見たら、泥棒と思へ、といふやうに、なつて来たのであらう。但、此一事は、傳聞の儘を述べるのであるから、或は誤つて居るかも知らぬ。

それは、兎に角として、鍋島が、此一行に加はつて、洋行した事は、後日になつて、非常な利益であつた。といふものは、西洋から、歸つて来ると、直大の氣風が、全く一變して、佐賀の舊大守であつた、といふやうな點が、事毎に、現れて来た所から見れば、正に洋行の賜物である、と言へる。

一行中の小松濟治は、有名な才物で、一生を、通人として送つたが、一と頃は、裁判官として、評判の高い人であつた。殊に、守田勘彌とか、市川團十郎とか、或は中村芝翫とか、いふ人達が、借金で動けなかつたのを、救ひ出したので、東京の劇通の間では、小松を、神様のやうに、言傳へて居た。また、吉原へ行くと、今日でも、小松大盡の噂が、残つて居る位だ。こんな調子で、道樂が、過ぎた爲に、其末路は、甚だ振はなかつたが、福地と、此人が、東京の花柳界や、劇界に於ける、信望は、大したものであつた。

一一

貴族院議員として、世を終つた、男爵岡内重俊は、土州藩士であつて、八十歳前後迄、長壽を保つて居られたが、若い時分には、俊太郎といふて、相當に、活動した人である。禁酒會長として、有名な安藤太郎、體格も立派だし、人物も洒落て面白い人であつたが、昔は、盛に酒も飲んだ

し、女にも戯れて、此人に就ては、随分、馬鹿らしい逸話もある。兎に角、酒を飲み厭てから、禁酒會を作る、といふやうな所に、此人が、世間を馬鹿にして居る氣象が、現れて居て、一寸面白い。

村田新八は、征韓論が破れて、西郷と共に、國へ歸つた時は、陸軍大佐であつたが、併し、其爲人は、頗る大きい所があつて、同人の間には、非常に尊敬されて居た。大西郷の如きも、此人に對しては、心から許して居たやうに、思はれる。大概の難しい事は、村田の意見で極めた、といふ位に、信用されて居た。岩崎谷の洞窟に籠つて居た西郷が、愈々最後の一戦を、試みた時分にも、村田を對手に、洞窟の中で、碁を打つて居た、といふ事である。洋行の時、村田は、大臣として、恥しからぬ見識もあり、人物も大きい、といつて、一行の者から、非常に、尊敬されて居た。

田邊太一は、舊幕臣で、幕末の際には、外交の事務を、執つて居た、といふやうな關係で、幕府の外交に就ては、重い關係を有つて居た人である。號を、蓮舟といふて、詞藻にも、富んで居た人だ。三宅雪嶺博士の夫人、花園女史の實父である。

金子堅太郎は、伊藤博文の、配下の中でも、伊東已代治、末松謙澄と、並び稱されて、世間からは、伊藤の三乾分といはれた一人で、一頃は、司法大臣にまでなつたが、今は、福密院に隠れて、閑散に、日を送つて居る。福岡に近い、田舎の百姓家に生れて、今日の地位に昇つたのは、本人の努力が原因であつたらうが、人に優れた、才識が無ければ、あれだけには、なれなかつたらう。

相馬永胤は、彦根藩士である。初期の議會には、代議士になつたが、一度で、懲り懲りして、それからは、候補も争はず、正金銀行の頭取で、ウンと、金を溜込んで、世間とは、殆んど没交渉になつた。此人と、目賀田種太郎と、星亨が、日本人として、パリストルの元祖である。

久米邦武は、文學博士として、聞えた人だが、奇説を吐いて、世間を驚かした事、一再のみならず、學者の中では、

一齋ある人物だ。古い話ではあるが、神武天皇を、神様の子でない、と斷じ、今までの歴史家が、神様抜ひにして居たのに、嘲笑を加へ、神武天皇は、平凡の御方であつたやうに、論證した爲に、世間からは批難され、政府からは、蛇蝎の如く忌まれた。學者である。此洋行に就て、日誌の大部分は、此人の筆になつた。岩倉全權大使歐米回覽實記と、いふ書物が、六冊か七冊、出て居るが、此人の筆になつたのだ。

それから、安場保和と、いふ人は、細川の藩士であるが、一目眇して、其上に、念入りの跛て、風采の悪い人であつたが、一種の快男子として、傳へられた、曾て、水澤縣の知事を、勤めて居た時、給仕に使つて居た、兩人の少年があつた。それを、安場は、非常に愛して、水澤縣を去る時に、兩人の給仕を呼んで、

「お前達は、將來の見込があるから、是非、出て來い」といふて、東京へ引上げてしまつた。少年は、安場を慕ふて上京したが、その見込通り、偉い者になつた。一人は今の朝鮮總督、齋藤實であつて、他の一人は、後藤新平であつた。同じ縣廳に、同じ給仕を、勤めて居て、而も、生れた町が、同じである、といふなぞは、西郷、大久保が、同じ所から出て、あれだけになつた、それに比ぶべき、珍しい話だ。併し、人物の比較は、及びも付かぬが、唯、同じ町内から、二人の大臣が出た、といふ事だけは、よく似て居る。

香川敬三は、皇后宮大夫として、長く隠れて居たから、世間からは、全く忘れられてしまつたが、維新の際には、大江卓、中島信行等と、一つになつて、侍従、鴛尾隆聚を、擔ぎ上げて、紀州の高野山で、攘夷討幕の旗揚げをした時、參謀の一人であつた。伏見鳥羽の戦ひが濟んでから、官軍の一部將となつて、岩倉具定の、配下に屬し、江戸の南千住に、陣を取つて居た。新選組の隊長、近藤勇を生捕にして、世間に知られた。

田中光顯は、初め濱田辰敬といふて、吉田東洋を斬つた、那須信吾の甥に當る。薩長聯合の爲には、相當に盡した。その頃は、田中顯介と、いふて居た。

其他の人についても、種々の話はあるが、すべて略する事にした。

二二

此洋行に就て、随員中、最も働いたのは、福地源一郎である。他の人の事は省略しても、福地の事は、少しづつ置き度い。

日本の遊廓で、第一に数へらるるのは、長崎の丸山である。石で壘んだ、ダラ／＼坂を、丸山の方から、下りて来ると、左の出口が、有名な、カステラ屋の本家である。其筋向ふの所の、折曲りに出来て居る、一棟の長屋がある。其角から、二軒目の家で生れたのが、源一郎である、といふ事が、傳へられて居る。

生れ付いて、學問の才が、非常に優れて居た。十四歳の時に、人の爲に、碑文を書いて、非常な評判になつた。源一郎の生涯は、何ういふ事になるか、といふて、多くの人から、眼をつけられたほどであつた。

初の名は、一太郎といふて、十七八歳の頃には、幕府の書物役に、召出された位だ。安藤對馬守の手附であつたら、つまり内閣大臣の秘書である。未丁年にして、殊に舊幕時代に、此拔擢をうけたのは、異外といふ可きである。學問に就て、天才を有つて居た者は、何事に付けても、一般の若者よりは、優れて居たものか、早くから、女道樂を覚えて、吉原などには、足繁く通つた。何處の家でも、評判が好く、花魁などには、ひどく可愛がられた、といふ事であるが、兎に角、福地の女道樂と言ふたら、此頃になつても、築地邊りの、古い待合には、話の種が、遺つて居る。

明治の文壇に於ける功績と、其位地に就ては、敬意を表す可きものがある。今の新聞紙の文章は、岸田吟香の力に依つて、其大體が出来て、更に福地が、相談相手になつて、研究した結果、上下を通じて、誰にでも解るやうな、一種の文體となつて、それが今、用ひられて居る、新聞紙の文章である。單に、これだけの點から言ふても、福地が、

今の新聞界に、貢獻した力は、大したものであつた。

殊に、西南戦争の時、新聞記者として、砲煙彈雨の間に出入して、其戦況を新聞に掲げた。それが爲に、東京日日新聞の騰價が、益々上がつて、讀者は、著しく殖えたのみならず、戦役が終つて、歸つて来た時には、木戸孝允の紹介で、畏れ多くも、明治天皇に、拜謁を賜はり、西南の戦況を、奏上に及んだ。恐らく布衣の士にして、御前講演は、福地が、元祖であらう。

それから後の福地が、東京に於ける、勢力は、日一日と、加つて来て、到頭、府會議長になつた。今日のやうに、猫でも杓子でも、少し運動費があつて、冠婚葬祭のお附合が、萬遍なく、やつて行ける者ならば、すぐ議員になれる、といふやうな、時代と違つて、其頃の公職に、就く者は、相當の力量が、有る者でなければ、なかくに、なれなかつたのであるから、同じ議長にしても、昨今の議長とは、頗る違つて居たのだ。

福地の住居は、下谷の池の端に在つた。郵船會社に、關係の深い、淺田正文の件、正吉が、住んで居る家が、即ち福地の建てた家であつて、其時代には、豪奢な生活をして、世間の問題に、上つた位である。花柳社會では、其名を言はずして、池の端の御前と呼んで居た。

芳町の奴は、都下一流の名妓であつた。二代目は、川上貞奴であるが、初代の奴は、生粹の江戸藝者であつた。貞奴が、奴といふた時代に、世間の問題になつたのは、啻に容貌が美かつた、といふだけではなく、初代の奴を、繼いだ爲である。

福地が、初代の奴に、嵌り込んで、有頂天になつたのは不思議な位であつた。道樂といふ道樂は、やり盡して来て、殊に、女の事なら、善いことも、悪いことも、根こそぎ知つて居る、通人といはれたほどの福地も、色は思案の外で奴の前に出ると、グニヤ／＼になつてしまつて、終にはお定まりの、落籍の一段になつた。

「貴郎の御鼻眞を受けて、是までに引立て戴いた、御恩は忘れませぬ。落籍のお話も、嬉しうござんすが、妾には、

中村時藏といふ、古い馴染がありましたして、何の因果か、何うしても諦める事が出来ません。旦那が落籍して下さつても時藏の事だけは、思ひ切れませぬから、それさへ、御承知ならば、御意に従ひます」と、やつて退けた。

流石に、奴は、大した女である。大概な藝者が、今、落籍される、といふ場合に、最眞客に向つて、是だけの事を言ひ得る者は、多くあるまい。

「宜しい。藝者商賣をして居る、お前の事だから、其位の隠食はあるだらう、豫ての覺悟だから、それを承知で、世話をしてやる」

「それさへ、御承知下されば、妾に、意存はありませぬが、併し、それでも、旦那は旦那として、崇めなければならぬのですから、寧ろ落籍をなさらないで、藝者の儘で、御世話をして下さる譯には、なりますまいか。其代り、時藏さんの外には、浮いた心は有ちませぬから、それだけは、特別に、許して置いて下さい、ネー、旦那」

福地は、煙に捲かれてしまった。斯うした事情で、福地は、奴の旦那として、世話を爲る事になつた。藝者はして居ても、福地といふ後楯があるから、何の不自由もなく、立派にやつて行く。別に、客を取らないでも、芳町の奴で何處へでも、押廻して行かれた。情夫の時藏は、吉右衛門の親父で、後に歌六といつた。

四

それ程に、惚込んで居た、奴が、病み付いて、醫藥の手當に、怠りは無いが、重體になつて、醫者が、見放してしまつた。福地の心配は、一と通りでなく、新聞社や、府會の用事などは、殆ど手に着かない位で、毎日のやうに、枕許に坐つては、慰めて居たのだが、何ういふものか、更に奴が、嬉しさうな顔をしなない。

「お前が、病み付いてから、随分、長い月日になるが、只の一度も、僕に、笑ひ顔を見せて呉れないのは、何うい

ふ譯か、病氣付いて居れば、誰にしても、苦しいものであるから、普通の人のやうに、浮いた心もあるまいが、偶には、笑顔を見せて呉れたら、宜からう」

何んな、偉い者でも、足駄を穿いて、首ツたけ惚れてしまふと、斯んな馬鹿者に、なつてしふのだから、女の魅力ほど、恐ろしいものはない。奴は、福地の言ふ事を聴いて、

「何と仰つても、可笑しくないから、笑ふ事は出来ませぬ」
福地は下女を呼んで、姐と金槌を取寄せた。それを、奴の枕許に据えて、

「少し響くかも知れないが、我慢して居なさい。僕が、面白い事をして見せる」
と言ひながら、帯に挿んで居た、金時計を取り出して、姐の上に戴せた。福地が自慢の、瑞西から取寄せた、有名な金時計であるが、奴は、之を見て居ると、臆て、金槌を取上げて、ガチ／＼叩きはじめた。見る／＼中に、硝子は壊れて、時計の形までが、滅茶々になつてしまつた。福地は、毀れた時計を、二本指で、摘み上げた。

「オイ、コラ」
「ハイ、何の御用でございますか」

「裏の芥溜へ、之を棄て、來い」
餘りの馬鹿々々しさに、奴が、ニヤリと笑つて、

「旦那、詰らない事を、なさいますな」
と言つた。福地は、膝を打つて、

「それ、笑つた。お前の笑顔を見たら、俺の思ひ置く事はない」
と言ふて、其日は、歸つて行つた。斯んな馬鹿々々しい事は、多くあるまい。奴は、平生から、時計の蓋を、パチンと、音を爲せて、それを聞くのが、好であつた。福地は、それから思ひついて、毀す音を聞かせやうとしたのである。

其後、奴は療養の甲斐も無く、鬼籍に入つてしまつた。
 下谷區の人民が、訪ねて来て、
 「區内の繁昌策を、考へて呉れ」
 と、言はれた時、福地は、胸を叩いて、承知した。それが、上野公園地へ、天皇陛下の行幸を、仰いだ一條になるのだ。

其頃には、陛下が、普通の場合に、普通の所へ、行幸遊ばす、といふやうな事は、容易になかつたものである。流石の下谷區民も、此事を聞いた時には、非常な喜びと共に驚いた。

福地は、政府の大官に、澤山の懇意があつて、それ／＼に、手蔓を有つて居たので、到頭、請願が容れられて、明治天皇は、上野公園へ、行幸遊ばす、といふ事になつた。

是を機會に、下谷區に祝賀會を催す事になつて、さかんな、祭典を行つた。上野公園に、公園らしい植打が付いて市民の遊び場所として、評判されるやうになつたのは、之れが始めてあつた。下谷區は、東京の北に偏在して、この區域も、今日のやうに廣くなかつた。商業も、頗る振はず、貧弱な土地であつたが、これが段々、繁昌するやうになつて来たから、區民の喜びは、一と方ではなかつた。

所が、行幸の請願を、爲る場合に、東京府會議長と、いふ肩書を利用して、東京府民總代の名を以て、願つて出たのであるから、忽ち其事が漏れると、市民の一部が、騒ぎだした。殊に、府會に於ては、福地と拮抗して、相争ふて居た、毎日新聞社長の、沼間守一が、福地を蹴落してやらうと、常にそればかりを、附視つて居たのであるから、沼間は、好機逸すべからず、と、公開演説を開いて、福地の攻撃を始めた。

『東京市の、一部分に過ぎざる、下谷區の爲に、陛下の行幸を仰ぐ、といふ事が、既に不敬であるのみならず、何人も依託せざるに拘らず、東京府民總代の、名稱を濫用した、といふのは、怪しからぬ事である。斯やうな事を許して置いては、將來の慣例にもなるから、大に福地を、責めなければならぬ』

と言ふて、例の雄辯を以て、福地の攻撃を始めたが、唯、一時の勢ひを、作つたゞけに留まり、大した反響はなかつた。長い間、福地が、養つて置いた、潜勢力は、遂に沼間が必死の攻撃も、左までの甲斐が無かつた、何時か沼間の方で、泣寝入になつてしまつた、といふやうな事もあつた。

沼間は、明治十四年の政變に乗じて、大隈重信の一派を、巧く説付けて、改進黨を組織した、發頭人である、維新の際には、佐幕軍の一部將で、板垣退助の、奥羽征討軍の、先鋒を擧めました。佛蘭西の兵法に、明るい人であつたが、一時に、座敷牢の苦を視て、特赦されてからは、東京横濱毎日新聞を創めて、一と頃は、島田三郎、肥塚龍、角田眞平、青木匡、波多野傳三郎等の人々を、乾兒同様に扱つて、藩閥政府に、反對の論客として、なか／＼活動したものである。須藤時一郎、高梨哲四郎と、兄弟であつた所から特に其名を知られ、一時は、政界に於て、大立者として鳴らした。

五

もう一人は、渡邊洪基と、いふ人である。後には、帝國大學の總長にまでなつて、達磨總長の綽名を付けられたのが、此人である。此綽名は、面壁九年、何んな事にも辛棒する、といふ意味から、附けられたのではなく、體の恰好から顔付、骨は、髯の生え振までが、よく似て居る、といふので、この綽名を、得たのである。

今の、集會政社法の本に、なつて居る、昔の集會條例は、此人の作つたものだ。自由民權の議論が、盛になつて来て、政府に、反抗する者が、追々、殖えて来るので、此儘に、棄て置いたのでは、逆も、政府の權威を、保つ事が出来ぬ、といふので、民間の有志家を、壓迫する爲に出來たのが、集會條例である。原敬は、其時代に、渡邊の書記生として、地方行脚の時、一緒に、附いて歩いた。

最初は、慶應義塾に這入つて、福澤諭吉の教を受けたが、其時分には、悪戯者が多く、寄宿舎に轉つて居た、學生には、却々、利かぬ氣のものが、多く居た。犬養毅、尾崎行雄等も、其一人であつたが、或る年の暮に、寄宿舎へ集つて、寒さ凌ぎに、土瓶酒を煽つて居るうちに、問題が起つた。

『もう、一日か二日で、正月になるのだが、何うかして、雑煮餅を食ひたい』

と、言ひ出した者があつた。けれども、そんな餘裕がある者は無く、工夫した末が、賄の爺を説きつけて、醬油や、鯉節の都合は出来たが、肝腎の餅を、買ふ錢がない。

『よし、それだけは、俺が、工夫してやらう』

と言ひ出したのが、渡邊であつた。達磨が、餅の工夫をする、といふのだから、こりやア有難い、といふて、一同は大喜びであつた。

『サアー、渡邊、早く買つて来い』

『今、持つて来るから、先づ汁を拵へて、待つて居れ。序に、餅を焼く、金網も、取寄せて置け』

といふ掛聲で、出て行つたから、一同は、首を長くして、待つて居ると、稍や暫くして、渡邊は、歸つて来た。例の達磨面を、ニコ／＼させながら、

『サアー、この通り、餅は、持つて来たから、小さく切つて、早く焼け』

と、投出したのを見ると、大きな供餅を、半分に分けたのである。

『イヤ、こりやア、渡邊、供餅だな』

『さうだ』

『フ、ム、貴様が、買つて来る、といふから、普通の熨斗餅だ、と思つたら、供餅を買つて来たのは、實に面白いな』

『此方が、厚くもあるし、雑煮としやちやア、一番に甘いのだから』

『そりやア、さうだと』

『サアー、始めろ』

といふので、小さく切つて、焼いては、鍋に投込み、舌鼓を鳴して、食つてしまつた。

所が、福澤の表、玄關に、飾り付けてある、大きな供餅の蔭になつて、居る方を、半分、切取つて行つたものがある、といふので大騒ぎになつた。

全體、福澤といふ人は、あれだけの大學者であつたが、極めて、吝嗇な人で、夫人も、非常な干渉家であつたから

下女を初め、玄關番までが、取調べを受けて、大變な騒ぎになつた。段々、調べて見ると、渡邊が、そつと、忍んで

来て、半分だけ切取つて、持つて行つた。といふ事が判つた。それを、塾生が、一同で食つた、といふ事も知れたから、福澤先生、怒るまいことか。眞赤になつて、渡邊を呼び付けて、眼の球の飛出る程、劍突を食はした。

それから、二十幾年の月日を経て、渡邊は、大學總長になつた。福澤は、自分の學校から、出た者が、大學總長になつたのは、心からの喜びであつた。或日、渡邊を聘んで、祝宴を開かう、となつた。併し、先生の家族だけが集つ

て、心ばかりの招宴を、催すのである。眞に水入らずの、師弟ばかりで、一夜を過ぎさう、と、いふのであつた。渡

邊は喜んで、三田の邸に出掛ける。昔話が、出て来て、主客共に、時刻の移るのを忘れた。其うちに、膳部の支度

が出来た、といふ、一室の中に移つた。福澤は、渡邊の手を取つて、

『サアー、それへ、直つて呉れ』

と、床の間の前へ、据ゑられた。今日は、渡邊も、御客さんとして、聘ばれたのだから、遠慮なく、上席に着いた。

所へ、福澤の妻君が、恭しく持つて来たのが、大きな膳部の上に、鏡餅が半分と、庖丁が付いて、其脇には、大き

な鍋に、雑煮の汁が、ブツ／＼沸いて居る。福澤は、眞面目な顔で、

「サア、渡邊君、今日の祝意は、是より外に、趣向の仕様が無かつた。遠慮なく、食つて貰ひたい」
之を見て、渡邊は、思はずクワツと、顔が赤くなつた。塾生時代に、例の供餅の、盗み食をやつた、當時の事を、思ひ出して、思はず、頭を押へた。

「イヤ、こりやア、恐れ入りました。あの時は、御叱りを受けましたつけな」

福澤も、ニコ／＼笑ひながら、

「何うぢや、渡邊君、大學の支關には、供餅は飾らないからね、ハツハツハツハ」

夫人も、共に膝を進めて、

「渡邊さん、あの時位、私は、腹が立つた事は、ごさいませんよ。お正月のお祝ひに、供へ付けたものを、半分切つて行くなんて、随分、貴下は、悪戯者でございましたね。オホ、」

渡邊は相好を崩して、

「ハツハツハ」

樂しき一夜の、師弟の小宴は、是だけの趣向であつたが、甚だ味ひのある話だ。

六

岩倉大使の一行が、愈々、洋行と極る、最後の會議で、内閣に、意外の波瀾が起きた。

徳川を倒して、明治政府を造つた時から、文治、武斷の兩派は、自然と、其立場を異にして、軋轢して居たのだ。

併、文官と武官の、單純な争ひに、なつて居たのではなく、武斷派の方にも、文勳のある者が、這入つて居て、

文治派の方には、軍將であり乍ら、加擔して居る者も、あつたのだから、一概には言へないが、先づ大體に於て、文治、武斷の二派に別れて、暗闘は、随分、激しかつたのだ。

西郷の方には、板垣、後藤、副島、江藤の四參議が附いて居る。それに、陸軍の重立ちたる者は、大概、西郷の部下に、喰付いて居たので、之に對して、岩倉右大臣を、主として、木戸、大久保、大隈、大木、伊藤などいふ、連中が、自然、相寄つて對抗する、といふやうな傾きに、なつて居たのだ。文治派の重立つた者が、打揃ふて洋行する、といふのであつた。殊に、洋行の日限は、殆ど二年以上も掛かる、といふ見込であるから、其留守中の事も、豫め極めて置きたい、といふやうな譯で、閣議が、開かれたのである。

其時に、參議の一人たる、大隈重信が、斯ういふ事を、言ひ出した。

「此度、洋行する一行には、殆ど政府の主腦部とも、いふべき人が、半數以上も居るのであるから、不在中の政務に就ては、今から、約束して置くべき、必要があらう、と思ふ。僕の考へでは、岩倉公以下の諸公が、不在中は、内外の政治の方針は、是まで通りとして、其上に、甚しい改革を加へぬといふ事にして、置きたい。又、文武の役人に就ては、奏任以上の者は、妄に黜陟を加へぬ、といふやうな事も、豫め此席に於て、極めて置きたい」といふ、意味の事を、言出したので、各參議の間には、澁つ面をした者もあつた。板垣退助は、元來が、理窟ツばい人で、疝癪も強かつたから、直に立上がつて、

「唯今の、大隈參議が、述べられた事に對しては、全然、同意が出来ない。勿論、洋行する者は、國務を帯びて行くのであるが、留守をして居る者も、亦、國務を帯びて居るのであるから、獨り洋行する者にばかり、重きを置いて、留守をする者を輕んずる、といふやうな事は、甚だ怪しからぬ。大隈參議は、我々を、何と考へて居られるか」
晩年の大隈は、なか／＼の人氣役者で、何處へ行つても、大持に持囃されて、殊に、老人の演説としては、大隈が、一番に霸氣があつた、自分も、舌の動くに任せて、頻に喋り廻つて居たが、明治四年頃大隈は、閣臣の中でも、甚だ威力のない方であつた。尤も、維新の際に、何等の功績もなかつたが、唯、薩長土肥といふ、名稱の釣合の上から、鍋島藩を代表して居た、參議である、といふに、過ぎなかつたのであるから、勢力の無かつたのも、無理はない。板

垣が、指撥を振立て、大隈を一喝して、席に着くと、今度は、副島種臣が立つて、
「唯今、板垣参議が、述べられた事は、至極同感であつて、拙者も、板垣君と、同じ考へを、有つて居る。我々、留守をする参議の、面目にも關する事で、大隈参議が、いはるゝ事には、賛成が出来ぬ。大隈参議は、如何なる考へを以て、斯やうな説を吐かれたのであるか、明かにして貰ひたい」
副島は、鍋島藩で、大隈とは、同じ出身であるが、全然、性格の違つて居る所から、閣議の上では、屢々、斯うした衝突が、あつたのである。斯うなると、洋行連の方でも、大隈を、助けなければならぬ事になつて、段々、議論は、難しくなつて來た。之を、此儘に棄て置けば、洋行も、延期となる外なく、各國政府へ對しては、何月何日に出發する、といふ通知を出して、各國に於ても、それ／＼に、歡迎の準備を、爲て居る、といふのに、今更に、斯んな事で、洋行が延びるやうになると、國の體面上、甚だ面白くない、といふので、大隈参議の説には、甚だ不同意であるが、國の體面上、此場合は、滞りなく、洋行をさせよう、といふ考へを、有つて居た者も、少くなかつたのだ。江藤新平も、さういふ考へを、有つて居た一人て、副島が、席に着くと、直に立上がつて、

「大隈参議の注意は、唯、洋行せられる諸公が、留守中の事を、心配して居られるから、それに就て、安心を與へる爲に、注意したといふに過ぎまい、と思ふから、左までに、責むる程の事でもなからう。依つて、折角の發議を、此儘に打消す、といふのも、穩かてないと思ふから、参議の言はれた、言葉の中に、改革といふ二字があつたが、潤飾といふ文字に改めて、記録に遺す事にしたら、何うだらうか」
大隈が、斯う言ひ出したのは、無論、洋行派の意を受けて、爲たには違ひないが、江藤が、其一分を立てやらう、と思つて、言ひ出した説は、所謂、最眞の引倒して、洋行派の急所を突いて、改革の二字も、潤飾と改めるなぞは、随分、戯けた言ひ分であつた。けれども、大隈は、大勢非なり、と見たから、流石に、利巧な人で、其後は、何一つ言はずに、其日の閣議は、終つたのである。

七

斯ういふやうな次第で、折角の閣議も、滅茶々々になつてしまつたが、洋行連も、斯んな事で、萬一、洋行が出来なくなると、一大事である、と思つたから、大隈参議を押し、其後は一切、何も言はせない事にして、先づ大隈は、洋行連が、歸つて來るまでは、内政外交の上に、甚だしき潤飾を加へない、といふ事にして、納まりを付けてしまつた。

けれども、此一事から、居残りの参議連中は、甚だ不快の念を以て、洋行派を、見るやうになつた。何うしても、人は、感情の動き一つで、喧嘩もすれば、調和も出来る。斯ういふやうな事がある、と、不斷、思つて居た、様々の不平が、一時に出て來て、それからそれへと、感情を、悪くする事ばかりで、何時も、大事が破れるのは、斯うした事から、始まるものだ。洋行連に對する、留守参議の反感は、縦令、閣議は、それで治まつても、決して消えるものではない。

明治四年の十二月十二日、午後一時を以て、横濱から乗船する事になり、岩倉大使の一行は、新橋を發した。西郷首め、留守参議は、見送りとして、横濱まで行く事になつた。其他、本人の家族だとか、友人だとか、いふ者を加へると、此時の見送りは、實に盛なものだ、同時に、其出發の有様を見物しよう、とする、野次馬が混るのだから、横濱の波止場は、隨分の混雑であつた。

亞米利加政府が、好意を以て、廻して呉れた船に、乗つて行くのであるから、相當な船ではあつたが、併し、今日の歐洲航路の、定期船に比べたら、逆も、お話にならぬ。それでも、其時代には、非常に大きな船だ、といふて、送つて來た者は、眼を剝いて、驚いた位である。斯くて一行は、横濱を解纜して、亞米利加へ向つた。
歸途に、汽車に乗込んだ、連中が、様々の戯談話の中に、或一人が、

「何うぢや。随分、大きな船ぢやが、あアいふ大きな船へ、乗つて居たら、何んなに、波の荒れた時でも、恐ろしい事はなからう」と言ふと、直ぐ隣席に、居る者が、

「そりやア、さうだとも、あの位の船に乗れば、安心には違ひないが、併し、音に聞く、印度洋の荒波には、へこたれるだらう。殊に、大暴雨にても出會つたならば、如何に、大きな船でも、萬一の事は、保証が出来ぬさ」

「そんな事はあるまい。大概な、暴風雨を受けても、あの位の船なら、大丈夫だ。我國の千石船でも、玄海灘や、遠州灘の暴風雨を乗切るから、如何に、印度洋の暴風雨でも、あれだけの船ならば、大丈夫だらう」

と、他愛もない事を言ふて、ワイ／＼言つて居ると、隅の方の腰掛に、デツと、腕を組んで、考へて居た、西郷は、暴風雨の話を、仕て居る連中の方へ、グツと向直つて、

「君等の話は、あの船が、暴風雨を受けて覆へる、といふ話をして居るので、ごわすか」

「こりやア、西郷さん、必ず覆へる、と言つて居る譯ではないが、暴風雨を受けては、堪るまいといふのですよ」

「イヤ、そりやア、暴風雨を受けたら、迎も堪るまいが、その儘、沈んでしまつたら、面倒が無うて、宜か思ふよ、ハツハツハー」

此悪辣な戯談には、流石に、車中の人達も、顔を見合せて、黙つてしまつた。

西郷は、随分、戯談も言ふが、斯ういふ極端な、悪口を言ふやうな、人ではないのだ。それが、今日は何うしたのか。岩倉大使の一行が、暴風雨を受けて、その儘、沈んでしまつたら、寧ろ世話が無からう、と言つたのは、前からの感情も、あつたらうが、此頃の閑議に於て、洋行派が唱へた、例の發議に、不満を懷いて居た結果、斯んな戯談を言ふたのではあるまいか。洋行連が、之を聞いたならば、あまり好い感じはしないだらう。此一事を以て見ても、洋行連と留守參議の間に、酷い反感のあつた事は、判る。

併て、洋行連は、横濱を出帆して、亞米利加まで直行しよう、といふので、船の中の混雑は、ひと通りでない。全體、日本人は、昔から旅行慣れないので、サア、旅行となると、我人共に、大騒ぎをする癖がある。僅か五日位の旅をするにも、大きな鞆を、四つも五つも、持つて歩く、といふのが、日本人の常例だ。旅行するのか、引越しをするのか、區別の判らないやうな、騒ぎをする。其處になると、外國人は、旅行慣れて居るから、大概な旅には、小さな鞆を一つ位で、済ましてしまふやうな譯で、甚だ輕便に、何の苦もなく、長い旅をする。尤も、服装からが、それに適して居るのだ。兎に角、日本人が、旅慣れないのは、評判になつて居る位だ。殊に、明治四年の當時、初めて、西洋各國に旅行する、といふのだから、随分、其仕度も業々しく、手荷物も、大した數に上つたらう、と思はれる。又、一行の中には、津田梅子、山川捨松と、いふやうな人を首め、數名の婦人も居たのであるから、其連中の仕度だけでも、好い加減であつたらう。捨松は、大山元帥の夫人になつた。梅子は、女の古い洋學者として、評判の高い婦人であつた。此人達は、まだ年齢は若かつたけれど、其他に、相當の年齢になつた、婦人も居たのであるから、船の中の混雑は、ひと通りでない。殊に、大きいとは言つても、其時分の船であるから、客室の設備なども、左迄に十分ではない、旅慣れない人達の、船中生活だから、迎も、締りの付くものでは、なかつた。従つて、此旅行中には、様々の奇談もあつて、詳しく書いたら、一冊の書物が、出来る位である。

八

一つ船に、乗つて居るのだが、岩倉は、何處までも奉られて、別物扱ひに、されて居たのだ。岩倉自身も、大勢の中へ出て、戯談を言ふたり、氣安く、對手になる、といふやうな事はなかつた。其代り、大久保と木戸が代つて、随行員に對しては、一切の事を取締つて居た。併し、其下には、伊藤を首め、それ／＼に、受持を極めて、用事を擔任して居たから、木戸や大久保が、直接に取締をするのでは無かつた。

大久保は、極めて厳格な人で、平生は、邸に居る時でも、袴を着けて、人に接見した、といふやうに、極く眞面目な、人であつた上に、自から進んで、人と打解けて、話をするといふ風がなく、何となく、大久保に對しては、隨行員も、遠慮勝にして居て、成るべく、近寄らぬやうにして居たが、木戸は、大久保とは、全く違つて、有ゆる苦勞をして來た、果の人として、なかくくに、洒落な所があつて、戯談も言へば、悪戯もする、といふやうな譯で、隨行員も、心置きなく、木戸には、戯談も言へるから、自然、木戸の室には、隨行員が、何時でも、ガヤ／＼言ひながら、集つて居た。大久保が、何れ程、厳格な人であつたか、といふ證據には、後に、内務卿になつてからも、大久保のテーブルの上にあつた、煙草盆の掃除をする、必要が無かつた、といふ位に、大久保に、會ふ者は窮屈がつて、煙草すら喫まずに、用談を済ますと、ズン／＼歸つてしまふ、といふやうな、調子であつた。岩崎彌太郎が、あれだけに豪傑肌の人であつたが、大久保には、一目も二目も置いて、思ふやうに頼む事も、言ひ出せなかつた、といふのであるから、是等の事情を以て考へても、大久保が、非常に厳格な人であつた、といふ事は、明かである。従つて、さういふやうな點から、あまり人が、懐いて來たい爲に、幾分か誤解もされて、西郷の如く、人氣が無かつた、といふのも、或は是等の事が、原因になつて居たかも知れない。

今、伊藤が、木戸の前へ、やつて來て、何か頻に話をして居る所へ、食堂ボーイが、ツカ／＼と、這入つて來た。伊藤は、之を見ると、振り返り乍ら、

「何ぢや」

「一寸、伺ひます」

「何ういふ事か」

「唯今、大久保さんの所へ行きましたら、此方へ行つて話をしろ、と言ふもので、ございますから、此方へ參りました」

「フ、ム、木戸公に、何か申上げる事がある、といふのか」

「さうで、ございます」

「そりやア、何ういふ事か」

「外の事でも、ございませぬが、食事時になりました、御供の方が、如何にも亂暴で困りますから、一應、其事情を申上げて、取締を願ひたい、と思つて、參りました」

「そりやア、何ういふ事柄か」

「第一に困りますのは、食堂で、煙草を喫んで、其喫殻を、食器の中へ、突込んで置かれるのは、實に困りますから、其事を、一二の方に申上げましたら、今度は、唾を吐込んで、置くやうなことがあります、掃除をすれば綺麗になる、とはいひながら、さういふ事をされては、洵に困りますから、何うぞ食器の中に、汚い物を入れる事だけは、御差止め下さるやうに、願ひたいのです」

「成程、それは、宜くない事だ。此方から、厳しく言ふて置くから、免して呉れ」

「それから、もう一つは、盛込の食物を、我勝に手を御出しになつて、丸で奪合ふやうにして、御取りなざる事は、私の方にも、それ／＼都合のある事で、ございませぬから、さういふ事の無いやうに、願ひたいのです。又、果物や菓子の方にも、それ／＼都合のある事を、食事中に、無暗に取つて、食べてしまはれますが、後で配ります時に困りますから、是も一應、御注意を願つて、置きたいのです」

今改めて、ボーイに言はれないでも、その状態は、伊藤も、今迄に、見て見るのだから、困つた事だと、思つて居た所へ、ボーイから、此苦情が來たのだから、何とも申譯のない事であつた。

「如何でございますか、只今、お聴きになつた通りの次第で、何とか取締りを付けなければ、船長が、外國人ですから、後で笑はれるやうな事があつても、困りますが、何うしたものでございませう」

「さうぢやね。氣の毒ぢやが、君、其取締りを、やつて呉れ」
「イヤ、私は、御免蒙る」
「何故か」

「何故か、といふて、あの連中の取締りなぞが、出来るものではありませぬ。寧ろ外の者に、申付けた方が宜しいてせう」

「さうか、それぢや、誰でも、然るべき人を、選んだら宜からう」

流石に、伊藤は、剛巧な男で、此取締りを引受けずに、外の者に、押付けてしまはう、とは、巧い考へてあつた。伊藤が、木戸に、言ふた通り、この取締りが、普通の人間に、出来るものではない。そこで、伊藤は、木戸の部屋を出る、と、取締の方法を、いろ／＼と考へた。

随行員の中に、内村良藏といふ、男があつて、既に一度は洋行して、頗る西洋慣れて居る、男であるが、何事にも出這張つて、人の世話を焼くのが、好きな性質である、といふのを、見込んで居たから、自分の部屋へ、内村を呼んだ。

「君に、頼みがある」

「ハイ、何てでございますか」

「今まで、氣が付かずに居たが、是だけの人數になると、何事に付けても、規律を正しくやらぬと、間違ひ勝ちになるから、第一に、食堂の取締りを選ぼう、と思ふのぢやが、君、それを引受けてくれる事は、出来ぬかい」

食堂の取締りなどは、詰らない事だけれど、世間には、よくある奴で、何でも、役を言ひ付かつて、肩書が出来れば、嬉しがるといふ、俗に謂ふ、幹事病なるものに、取付かれて居る者は、多くあるのだ。内村が、其患者の一人で、是非、何かの世話を、焼いて見たい、といふ風の男であつたから、一も二もなく承知して、

「宜しうございます。それでは、食堂の取締りは、私が、御引受け致しますから、御安心下さい」
「ウム、是非頼むよ」

内村は、大した役でも、言ひ付かつたやうに、非常に喜んで、肩を怒らして、出て行つた。其後姿を見て、伊藤は、ペロリと、舌を出したが、伊藤も、罪な事をしたものだ。

九

西洋料理は、一皿宛、持つて来て、其食ひ終るのを待つて、直に皿を引込まして、それから代りの皿が、出て来る、といふやうな事に、なつて居るから、何時でも、テーブルの上は、綺麗に片付いて、居る。之に反して、日本の料理は、一品宛運ぶのだけれど、食事の終るまでは、運んだ器を、片付けずに置く、といふ仕方になつて、居るのだから、長い間、其習慣に慣れて居る、連中が、俄に西洋料理の、一品宛、片付けて行く、急がしい食ひ方になる、と、誰しも閉口するやうであるが、澤山の品物を、狭い膳の上に、列べて置いて、彼方、此方と、箸をつツ突き廻して、それから、美しい不味い味を、といふのは、西洋料理の方には、ない事だから、洋食の宴會などに、出掛けると、よく日本人が失策つて、ボーイの物笑ひに、なる事がある。洋食が、流行り出してから、もう五十年にもなるが、まだ、洋食のテーブルに着く、と、ヘドモドする人が多いのだから、況して、明治四年の頃の、船中の食卓に、着く人達が、ボーイに、苦情を言はれないやうに、食事をやり終る、といふやうな者は、さう澤山に、無かつたのは當然である。殊に、そんな事には、一向に頓着しない、傑豪連が、揃つて居て、それが無遠慮に、禮儀も構はず、食卓を騒がすのだから、何うせ、ボーイから、苦情が出るのは、不思議でもなかつた。

僕等が、よく精養軒や、帝國ホテルへ、行つて見ると、不慣れた日本人が、這入つて来て、ボーイが、皿を引きに来るのが、早いのに驚いて、膝の上に、新聞紙を擴げては、ピフテキの食ひ餘したのや、コロツケーの食掛けたのを、

コツリ、包んで、袂へ入れて居るのを、屢く見掛ける事がある。スープを飲むにしても、匙をガチャガチャやつて、ズー／＼音をさせて飲むが、嚴ましく言ふと、あれも、不可いのだ。日本の碗盛などは、初めから吸ふやうに、教へられて居るのだから構はないが、西洋人に言はせると、スープは飲むものであつて、吸ふものではない、といふのが、一般の慣ひになつて居るのだから、少しも音をさせないやうに、コツリやつてしまふのが、作法である。けれども、そんな作法なんぞに頓着なく、スー／＼吸ひ込むばかりでなく、ヒドイのになる、と、皿の縁へ、口を付けて、吸ひ込むのなんぞが、あるのだから、逆も堪つたものではない。食方が、間違つて居るのは、猶だ宜いとして、美しい皿を、背中へ忍ばせたり、フォークや、ナイフの綺麗なのがあると、袂へ入れて、歸るなぞといふ、恐ろしいのもある。先年、東京に於て、宗教家と教育家が、集合した時にも、精養軒で非常に食器が、無くなつた爲に、精養軒の支配人から、政府へ對して、器具の粉失料を、請求して來た、といふやうな、珍談もある位で、斯うした場合に於ける、日本人の公徳心は、實に驚くほど、缺けて居るのだから、困つたものだ。況して、宗教家や教育家が、やる事だとして見ると、さういふ者に、教へられる國民は、實に禍であると思ふ。

偕、内村は、伊藤から、言ひ付けられて、自分は、一ばしの役目を引受けた積りで、第一に作つたのが、食事心得書と、いふものであつた。之を十數枚作つて、食卓の上に、列べて置いた。愈々、食事が始まる、と、自分は、指揮役として、食卓にも着かず、ボーイと、一つになつて、遠くの方から、立番をし乍ら、一同が食事を始めるのを見張つて居る、といふのだから、面白い、伊藤は、内村が、威張つて居るのを見て、可笑いとは、思つたが、ヂツと可笑しさを怵へて、成行を見て居ると、頻に何處かで、バリ／＼と、はげしい音がするから、軟かい肉が、出て居るのに、そんなに、音がする譯はない、と思つて、其方を見ると、村田新入が、フォークを、バリ／＼噛んで居る。皿の中に、食物が無くなつたから、といふて、フォークを噛むのなぞは、随分、亂暴な譯だが、内村の書いた、食事心得書を見て、癪に觸つたので、態と、フォークを、噛んで居るのだ。フォークは、何ういふ持方をしろ、とか、ナイ

フは、何ういふ風に置け、とか、いふやうな事が書いてあるから、態と、斯ういふ惡戯を、爲るのであつた。内村は、苦い顔をして、デロ／＼見て居る、と、そのうちに、岡内重俊が、口に一ばい肉を頬張つて、ムシヤ／＼やりながら、頻に高聲を揚げて、喋つて居たが、可笑しな事でもあつた、と見えて、プツと、吹出したから堪らない。口に這入つて居た肉が、四方に、バラ／＼と散つて、周圍に居る人が、之を吹掛けられるやうな譯で、ドツト、聲を揚げて、それを避けやう、として立つた機に、誰か知らぬが、テーブルの角に、引ツ掛かつたので、ガタ／＼ツと、はげしい音がする、と、テーブルの上に、載つて居た壺が、ガタ／＼轉がつた。之を見て居た、内村が、怒るまいことか、眞赤になつて、傍の臺の上に立つて、

『諸君』

と、一と聲嗷鳴つたから、大騒ぎを、やつて居た、連中も、流石に、鳴を鎮めて、ヂツと、其方を見た。

『吾輩は、伊藤閣下より、御指名に預つて、食堂の取締りを、命ぜられたのであります』

ドツと、喊の聲を揚げて、一同が笑つた。内村は、何て笑はれるのか、少しも解らない。益々、上氣したらしく、『依つて、我輩は、食堂心得書と、いふものを書いて、諸君の御手許へ、出してあります。然るに、諸君の中には、其心得書に反いて、亂暴な、食事の仕方をする、人がありますが、さういふ事をなさる、と、是から先、それ／＼外國人の中へ這入つて、食事をしなければならぬ、といふ場合に、差支が生じやう、と思ひますし、第一、斯ういふ事が、外國人に知れますと、日本の國辱に、なるのでありますから、何うか、さういふ下行儀な事は、ないやうに願ひます。そこで、一應、御注意をして置きますのは……』

一同が黙つて、聽いて居るのを、宜い事にして、内村は、益々、西洋通を振廻して、食事の講釋を始めやう、とした時に、誰か知らぬが、プツと一發、大きな尻を放つたので、又もや、一同は、ワツと、喊の聲を、揚げて笑つた。流行に、内村は、眞赤な面をして、眼ばかりパチつかせて居る、と、此時に、村田が、

「イヤ、内村どん、少々待ちなさい。君が、如何に食堂の取締りて、厳しい事を言ふても、君の指圖には、従はぬよ。今の一發は、君の言ふ事に不平ぢや、といふ證據ぢや。即ちブウ言ひ居つたぢやないか」
到頭、村田の混返して、内村の演説は、オジヤンに、なつてしまつた。

一〇

食堂の騒ぎが鎮つて、一同は、自分の部屋へ、歸つて來た。伊藤は、木戸の前へ出て、頻に笑ひながら、食堂の話をして居る。

「何うも、困つたものぢやね。内村も、あまり世話を焼き過ぎるからぢやが、一同も、あまりに不行儀ぢや。併し、船の中は退屈ぢやから、あの位な事は、黙つて居た方が、宜からう」

「さうです。マア、閣下は、あまり仰しやらぬ方が、宜しうございませう。そりやア、内村のやうに、厳しく言はずとも、ヤンワリと、話をした方が可いのぢやが、あの連中が、容易に、人の言ふ事を、聴くものでないのですから、私は、貴下から仰せ付かつて、御免蒙つたのです。内村の奴は、見得坊で、何でも、役さへ付けば、喜んで居る奴ですから、チヨイと、試みてやつたのですが、到頭、一度で失敗つてしまひました。アツハツハー」

「君も、なか／＼、人が悪いな」
所へ、足音暴く、這入つて來たのが、例の内村だ。

「ハツ、一寸、申上げます」

「イヤ、飛んだ御迷惑でしたな」

「私は、唯今限り、食堂取締りは、御免蒙りますから、御届けに參りました」

「マア、さう言はずに、もう少し辛抱して、やつて見て、貰ひたいものぢや」

「イエ、何と仰せられましたも、あアいふ亂暴な連中を、對手にして居ります、と、遂に食事の爲に、果合ひをするやうな事が出來ます。命賭で、食堂の取締りは出來ませぬから、御免を蒙ります」

如何にも、其態度や言語が、眞面目であるから、木戸も、可笑しさを怵へて、

「よし／＼、それぢや、君は罷めたら、宜からう」

「ハイ、斯んな馬鹿々々しい、目に遭つたのは、初めてでございます」

「マア、さう怒らぬでも、宜からう」

「あまりに人を、馬鹿にして居ます。私が、心得方に付いて、話をして居ります時に、放屁をするなぞとに、實に人間の禮を、辨へない連中で、ございますから……」

伊藤は、堪らなくなつて、

「ハツハツハー、君のやうに、さう眞面目では、逆も、長生は出來ぬぜ」

「貴下も、亦、私を混返へすのでございますか」

「決して、さういふ譯ぢやないが、マア宜いさ、彼方へ行つて、息んで居たまへ」

内村は、プン／＼怒つて、出て行つた。

「如何です、あアいふ、眞面目な人間は、澤山ありますまい」

「君が見立てた、食堂取締係ぢやから、適任でもあらうが、今の連中の取締には、チト不向ぢやらうよ」

兩人が、頻に話込んで、居る所へ、掃除係のボーイ頭が、這入つて來た。伊藤は、デロリと、それを見て、ハ、ハ、又何か苦情を、言つて來たな、と、思つて居ると、案の定、

「貴下方、連れて來ました、皆様、亂暴あります。私、困ります。叱言言ふて下さい」

「ハ、ハ、何ういふ事をしましたかな」

「便所、汚しをして困ります。大便、戸の外に致します。掃除いたします時、困ります。厳しく取締つて下さい」
「宜しい、承知しました。よく言ひ付けて、もう、さういふ事は、無いやうにする」
「フー、いけません。私と一緒に来て、見て下さい」
「イヤ、見なくても宜しい。よく判つて居る」
「フー、判りません、来て、御覽なさい」

無理遣に、伊藤の手を引張るから、之には伊藤も、聊か閉口した。木戸は、ニヤ／＼笑ひながら、
「折角、来て見る、といふのぢやから、汚い所も、見て来たら、宜からう」

「さうですな。それぢや、行つて見ませうか」

不承々に、伊藤が、ボーイに、連れられて来て見る、と、イヤ、ハヤ、御話にも、ならぬ仕儀で、便所に、内外の區別が、殆どない。足も、踏み立てる事の、出来ないやうに、糞小便が、放れ流しに、なつて居るのだ。之には、流石の伊藤も、鼻を摘んで、歸つて来た。

「閣下、なか／＼、エライ事ですぞ」

「フ、ム、何んな事か」

「何んなにも、斯んなにも、迎も問題にならぬのです。あれでは、ボーイが、苦情を言ふのも、無理はありません」

「それぢや、一應、皆に言ふたら、宜からう」

「併し、内村の二の舞をするのも、馬鹿々々しいですから、御免蒙りたい」

「イヤ、さういふ事の無いやうに、我輩が立會つてやるから、一應、言ふて置いたら、宜からう。食事の時の、戯談と違つて、さういふ事は、嚴格に、取締つた方が、宜からう」

流石に、苦勞人の木戸も、自分達が、這入る便所を、さう汚されては、矢張り迷惑をするのだから、伊藤を連れて、

甲板の運動場へ、やつて来た。直に一同を集めたから、皆、やつて来て、控へて居ると、伊藤は、一段高い所へ上がつて、

「是より、諸君に、一應、御注意申します。是は、木戸公より、確く命ぜられたのでありますから、我輩の言とせず、木戸公の御言葉として、御聴取を願ひたい」

流石に、伊藤は、場慣れて居るから、巧い所へ、漚を張つて、木戸公の名前を、頻に言ふので、一同も據所なく、謹んで聽いて居た。

「外の事では、ありませんが、便所の取締りに付いて、申述べて置きたい。誰にしても、汚い事は嫌ふものであるから、各自は用心して掛ければ、さう汚さずに、済む事だらう、と思ふ。全體、普通に使つても、汚い所であるのを、内外の區別なく、放れ流しをする、といふやうな事になると、益々汚くて、ボーイの方の苦情も、起つて居るので、すから、此上、諸君が、自から制して、さういふ不都合な事を、しないやうにせない、と、船長の方から、苦情が出た時、我々の不面目になる。此間の食堂では、屁一發で済んだけれど、今度は、音ばかりでなく、正味の話ですから、よく御注意を願ひたいものです。一寸、此事だけを、御注意して置きます」

汚い事に就ての訓示だが、それを巧に、愛嬌を振舞いて話したから、一同は、可笑しさを堪へて、クス／＼やつて居たが、反抗して騒ぐやうな者は、更に無かつた。兎に角、一同が、洋服を着たり、脱いだりするものが、不慣である爲に、斯ういふ疎勿もしたので、中には、悪戯半分に、やつた者もあらうが、大概は、袴の取脱しが、億劫である。袴が引掛かる、といふやうな譯で、間に合せに、外へやつた者も、あるのだ。其後へ、来た者は、汚なくてはひれないから、更に其手前で、用事を済ませて来る、といふやうなのが、段々、重つて来て、到頭、便所の外が、便所になつた、といふやうな事にも、なるのであつた。けれども、伊藤の訓示が、存外に利目があつて、これからは、